



TITLE:

# 言語接触とエヴェンキ語の一致に関する研究( Dissertation\_全文 )

AUTHOR(S):

松本, 亮

---

CITATION:

松本, 亮. 言語接触とエヴェンキ語の一致に関する研究. 京都大学, 2014, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2014-07-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18489>

RIGHT:

# 言語接触とエヴェンキ語の一致に関する研究

松本 亮





# 目 次

<b>序章</b>	<b>1</b>
<b>第一部 エヴェンキ語概説と諸問題</b>	
<b>第一章 エヴェンキ語の社会言語学的状況</b>	<b>5</b>
1.1 エヴェンキ族・エヴェンキ語について	5
1.2 エヴェンキ語研究史	10
1.2.1 初期の資料	13
1.2.2 文法の記述(先行研究のまとめ)	13
1.2.2.1 ワシレーヴィッチとそれ以前	13
1.2.2.2 ワシレーヴィッチ以降と現代のエヴェンキ語研究	15
1.3 危機言語としてのエヴェンキ語	16
1.3.1 シベリアの言語状況	16
1.3.2 現在のエヴェンキ語の社会言語学的統計	18
1.3.3 シベリアと中国のエヴェンキ族の系統帰属について	19
1.3.3.1 シベリア・エヴェンキ語	20
1.3.3.2 鄂倫春(オロチョン)語	22
1.3.3.3 鄂温克(エウエンク)語	23
1.4 現在のエヴェンキ語の置かれた状況	25
1.4.1 使用	25
1.4.2 教育	27
<b>第二章 エヴェンキ語音韻論</b>	<b>28</b>
2.1 母音体系	28

2.1.1 先行研究の母音体系	28
2.1.2 エヴェンキ語東方言の母音	31
2.1.3 母音調和	33
2.2 子音体系	36
2.2.1 エヴェンキ語東方言の子音体系	36
2.2.1.1 阻害音	36
2.2.1.2 共鳴音	39
2.2.2 音節と子音の同化	40
<b>第三章 エヴェンキ語形態統語論</b>	<b>48</b>
3.1 形態素とその構造	48
3.1.1 語形変化と品詞	48
3.1.2 名詞類の形態的構造	50
3.1.3 動詞類の形態的構造	54
3.1.3.1 定動詞形の語構造	55
3.1.3.2 非定動詞形の構造	56
3.1.4 語幹異形態と挿入母音の関係	57
3.2 形態統語論	60
3.2.1 語の結合方法の種類	60
3.2.1.1 派生	62
3.2.1.2 連接	63
3.2.1.3 相応	63
3.2.1.4 一致	64
3.2.1.5 反映	64
3.3 文の拡張(単文と複文)	65
3.3.1 単文と複文の構造と種類	65
3.3.2 節の主語標示	67

## 第二部 言語接触から見るエヴェンキ語の一致

### 第四章 エヴェンキ語と言語接触 73

4.1 言語接触 .....	73
4.1.1 言語接触と言語変化の見方とその類型 .....	73
4.1.2 シベリアにおける地域的言語連合の可能性 .....	76
4.2 エヴェンキの歴史 .....	76
4.2.1 ツングース諸語とエヴェンキ語～民族移動と分裂 .....	77
4.2.2 エヴェンキ語とのその諸方言 .....	83
4.2.2.1 ツングース諸語内の系統関係 .....	83
4.2.2.2 ロシア領内エヴェンキと中国領内エヴェンキの関係 .....	84
4.2.2.3 エヴェンキ諸語の系統の仮説 .....	93
4.3 エヴェンキ語とモンゴル語、ヤクート語言語接触 .....	95
4.4 エヴェンキ語とロシア語との接触 .....	103
4.5 小結 .....	110

### 第五章 エヴェンキ語の一致の起源 112

5.1 エヴェンキ語の一致をめぐる議論と整理 .....	112
5.2 エヴェンキ語の一致について .....	114
5.3 エヴェンキ語の一致の発生と変化の方向 .....	118
5.3.1 他のツングース諸語における一致の状況 .....	118
5.3.2 エヴェンキ語の東方言における一致の状況 .....	121
5.4 周辺諸言語における一致 .....	123
5.4.1 一致するようになった言語 .....	123
5.4.2 一致を失った言語 .....	127
5.4.3 一致を持たない言語～接触によっても変化しなかった言語 .....	129
5.5 小結 .....	130

<b>第六章 エヴェンキ語における一致の受容仮説</b>	<b>132</b>
6.1 方法と仮説	133
6.2 スタイルとは	135
6.3 エヴェンキ語におけるスタイルの分類	137
6.4 文体と言語接触	138
6.4.1 物語・フォークロア体	138
6.4.2 ロシア語翻訳体	139
6.4.2.1 行政文体	140
6.4.2.2 ロシア文学体	141
6.4.3 教科書体	142
6.4.4 近代エヴェンキ語体	144
6.4.5 現代エヴェンキ語体	146
6.5 語順的特徴とスタイル間の差異	147
6.5.1 文における動詞の位置	147
6.5.2 形容詞と名詞の語順	148
6.6 “一致”の受容過程～文体と語順	149
6.6.1 語順と一致の必要性	149
6.6.2 語順の変化～関係節にみられる変化の重要性	150
6.6.2.1 物語・フォークロア体の関係節構造	151
6.6.2.2 近代エヴェンキ語体	152
6.6.2.3 ロシア語翻訳体(文学体および行政文体)	153
6.6.2.4 現代エヴェンキ語体	160
6.6.3 統語関係上の曖昧性の回避	161
6.7 “一致”の規範化～教科書体にみる文法	163
6.8 小結	164

<b>第七章 エヴェンキ語の“不一致”の出現</b>	<b>168</b>
7.1 アルタイ諸語の連接とは	168
7.2 複合語について	170
7.2.1 複合語の定義と位置づけ	170
7.2.2 エヴェンキ語には無い複合語	170
7.3 エヴェンキ語現代スタイルに見える連接は複合語か	172
7.3.1 意味的に複合語と見られる場合	174
7.3.2 派生形容詞の場合	175
7.3.3 格接辞と名詞の結合の場合	176
7.3.4 相応	176
7.4 語結合の過渡期的変化	177
<b>第八章 結論</b>	<b>179</b>
付録資料	183
参考文献	205



## 略語一覽

1, 2, 3	1,2,3 人称	INTS	強調
ABL	奪格	LOC	位格
ACC	対格	LOCALL	方向格
ACCD	定対格	LOCDIR	方向場所格
ACCIN	不定対格	M	男性形
ACT	能動態	N	中性形
ADS	処格 (adessive)	NEG	否定
ALL	場所格 (allative)	NFUT	非未来
COM	共格	NOM	主格
COND	条件 (法)	PART	形動詞形
CONNeg	否定分詞形	PASS	受動態
CONV	副動詞形	PCLE	助詞
COP	コピュラ	PERF	完了 (相)
DAT	与格 (・与位格)	PL	複数
DIM	指小形	POSS	所有人称接辞
EXC	排除形	PROL	沿格
F	女性形	PRPOS	前置格
GEN	属格	PRS	現在
HAB	習慣 (相)	PRT	部分格 (partitive)
ILL	入格 (illative)	PST	過去
IMP	命令形	Q	疑問助詞
IMPF	不完了 (相)	REFL	再帰所有接辞
INC	包括形	REL	関係詞
INCP	開始 (相) (inceptive)	SG	単数
INF	不定詞・不定形	SMLF	瞬時相 (semelfactive)
INGR	起動 (相)	SUFF	接尾辞
INS	内格 (inessive)	VOC	呼格
INSTR	具格	VOL	願望 (相)





## 序 章

本論文は、エヴェンキ語の一致という文法現象について考察するものである。

一致とは、主に修飾語である形容詞と、被修飾語である名詞との間に起こる文法現象で、一種の語結合の方法といえる。被修飾語である名詞が、文中の役割に従ってなんらかの格接辞をとらなう時に、同じ格接辞が修飾語である形容詞にもつく、という現象である。そして、エヴェンキ語の場合、名詞の複数を表す接辞も一致する。

- (1)       gugda       urə  
          high       mountain               “高い山”
- gugda-*du*   urə-*du*  
          high-DAT   mountain-DAT           “高い山に”
- gugda-*l-va*   urə-*l-va*  
          high-PL-ACC   mountain-PL-ACC       “高い山々を”

これまで、一致という文法的特徴は、歴史的にも、言語類型論的にも、そして地理的分布からも、エヴェンキ語と近い関係をもつ周辺諸言語にはみられない文法であるため、このようなエヴェンキ語の一致が如何にして生じたのかが問題とされてきた。

本論文では、エヴェンキ語の言語接触の歴史を考察し、ロシア語との強い接触の結果、一致を受容し、また同時に、受け入れる必要性が生じていたことを主張し論じる。

しかし、言語の歴史的資料が乏しいエヴェンキ語においては、文献をたどるだけでは変化の経過を見てとることはできない。そこで、共時的に観察されるいくつかの言語スタイルの間に認められる相違をもとに、変化の方向と原因を探る手法をとる。いわば、形態統語論における「内的再建方法」で、言語変化を推測しようというわけである。

本論文は、二部からなる。

文の構造の違いを観察し考察していくうえでは、エヴェンキ語の文法体系の全体像をあらかじめ知っておくことは重要である。そのため、本論の第二部の前提となる文法事項を中心に、第一部では、エヴェンキ語のおかれた社会言語学的状況をまとめたあとで、エヴェンキ語の文法を概説する。その中で、これまで筆者が調査し、取り上げてきた音韻論、形態論にかかわる問題点にも触れてゆく。

第二部では、目的である一致の発生について考察をすすめる。エヴェンキ語が、どのように他のツングース諸語と関係しているのか、これまでどのような言語接触があったかをいくつかの局面から観察する。また、近年のエヴェンキ語のテキストを、5つのスタイル(文体)に分類し、それらの相互間にみられる文法的相違を観察する。そして特に、スタイル間に見られる関係節に関する語順が、一致を発生させた原因と見て考察する。

# 第一部

## エヴェンキ語概説と諸問題



# 第一章

## エヴェンキ語の社会言語学的状況

### 1.1 エヴェンキ族・エヴェンキ語について

エヴェンキ語はツングース諸語に属する言語である。また、ツングース諸語とは、チュルク諸語、モンゴル諸語と共にいわゆるアルタイ諸語としてまとめられる言語族である。エヴェンキ族の分布は、ロシアの中央エニセイ川から東の太平洋沿岸にいたるシベリア東部の広い範囲に分布する(地図1)。シベリアのエヴェンキ族の他にも、中国東北部に居住するツングース系民族もエヴェンキに同系民族として含まれると考えられるが、名称についてはエウエンキ、エウエンクなど方言差を反映した若干の相違や、ソロン、オロチョンなどのように別の名称があることがある。シベリア・エヴェンキと、これら中国・エウエンキの言語学的な関係については、後章(1.3.3、4.2.2)にまとめて触れることとする。



シベリアのエヴェンキ語に隣接する、ツングース諸語以外の周辺言語は、表1に挙げたとおりである。言語系統別に挙げているのは、言語接触を考えるためには重要な事実の一つであるからである。また、接触が考えられるおおよその地域も合わせて挙げている。

言語系統	言語	接触地域
アルタイ系	モンゴル諸語	ブリヤート語
		バイカル湖東側
		モンゴル語
	チュルク諸語	ダグール語
		中国東北部
ウラル系	サモエード諸語	ヤクート語(サハ語)
		サハ共和国内
	セリクプ語	南シベリア系チュルク諸語
		?(エニセイ川上流南)
		エニセイ川上流西岸
古アジア諸語	サモエード諸語	ネネツ語・エネツ語・ガナサン語
		タイムイル半島
	セリクプ語	ユカギール語
		?(サハ共和国)
印欧語	ロシア語	ケット語
		?(エニセイ川上流)
印欧語	ロシア語	(朝鮮語・日本語など多数
		サハリン島)
印欧語	ロシア語	全域

表1 エヴェンキ語と接触可能性のある周辺言語一覧

エヴェンキ語の広い分布と、ツングース諸語の分布の地域は大きくは変わらない。というのも、ツングースのなかでも特にエヴェンキ語とエウエン語が中央から東シベリアに広く拡散しているからであり、他のツングース諸言語は、主にロシアの極東地域と中国黒竜江省の相対的に狭い地域に集中している。

ツングース諸語の系統関係についてはいくつかの学説があるが、下に池上(1989a)による分類を挙げておく。

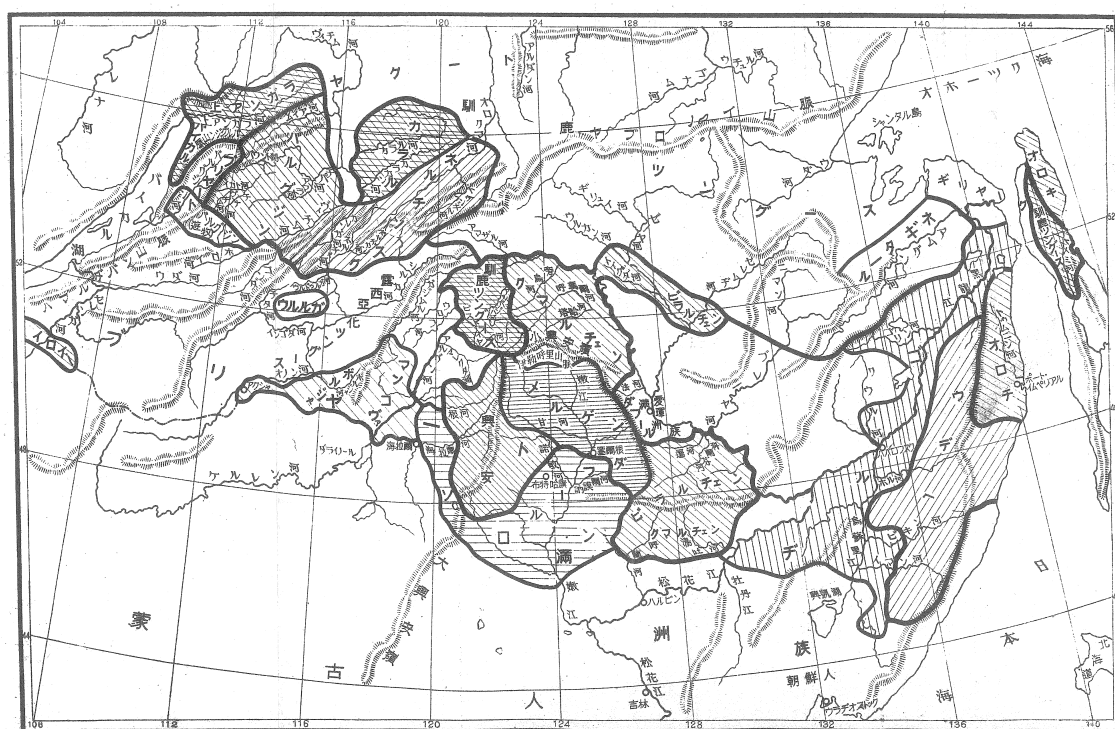


第Ⅰ群	エヴェン語(ラムート語)、エヴェンキー語、ソロン語、ネギダル語
第Ⅱ群	ウデヘ語、オロチ語
第Ⅲ群	ナーナイ語(ゴルディ語)、オルチャ語、ウイルタ語(オロッコ語)
第Ⅳ群	満洲語、女真語

表2 池上(1989a)によるツングース諸語の分類

エヴェンキ族の民族学・社会学的な研究は古くからあり、シロコゴロフ(1933、日本語訳 1941)が最も詳しい。今でもツングースの伝統社会的な記述には、多く引用される元となっている。近現代に入り経済及び政治的状況が劇的に変わったこともあり、今となっては調査することができないエヴェンキの古くからの氏族構成、生業について詳細に書かれているためである。

シロコゴロフは主に“北方ツングース族”を記述しているが、“北方ツングースの隣族”として、「ゴルヂ・ウデヘ・ダフル・満州族・蒙古人・ヤクート」を挙げているように、主としてエヴェンキを取り上げていることは確かである(地図2)。



第一圖 ツングース諸群の地理的分布

地図2 シロコゴロフによるエヴェンキ氏族の分布(ツングース故地)

エヴェンキ族の生業は、その居住する自然環境に大きく依存する。中でも伝統的な生業として、狩猟とトナカイ飼育が挙げられる。タイガに覆われた森林地帯が広く続くシベリア南部から中国東北部では主に狩猟がみとめられる。獲物はリス、ウサギ、シカなどで、毛皮を目的としたテンやキツネなどの狩猟も行われる。これより北部になるとツンドラに近くなりトナカイの放牧が主な生業となるが、タイガ地帯においてもトナカイの飼育は多く見られる。つまり、狩猟とトナカイ飼育の両方が成立する地域が広いといえる(表3参照)。

タイガ以外	滿洲		外バヤン		地域 産業
	東部 小興安嶺	西部 大興安嶺	ネルチン ク・タイガ	バルグジン ガイガ	
				「ムイア (四)」 カラ	馴鹿飼養
		ビストライヤ (二)	オロクマ (五) ネルチン ユカン (三) カレンガ (二)	ムイア (四) ヴィチム カン (一) バウ ント (二)	馴鹿飼養 及び 狩獵
ルの北 部の北 部	東湯北 部(四) 部(二) 部(一)	呼倫貝爾 (一) 上嫩江 (四) 嫩江(三)	「カレンガ (二)」 ネルチン ユカン (三) ユマルチ ニン (四) コンダ (一)	アマラト (三) ジリンダ (五)	狩獵(及び貧 なる馬飼養)
外バヤ カルの 移行地 帯		「嫩江」		「アマラト (三)」 「ジリンダ (五)」	牛飼養 及び 狩獵
南呼倫 貝爾地 帯	南外バ ヤカルの 移行地 帯	「嫩江」		バルグ ジン 溪谷	牛飼養
外バヤ カルの 移行地 帯	呼倫(北 部) (三)	「嫩江」			農業及 び狩獵
外バヤ カルの 移行地 帯	「下流」 ネルチ ン	「嫩江」		バルグ ジン 溪谷	農業及 び牛飼養
江(中流)	「呼倫」				農業

表3 シロコゴロフによる北方ツングース族の地域別産業

大規模なトナカイ放牧はソ連時代の集団農場政策の影響により始まった。基地となる定住地がつくられ、無線やヘリコプターを使った大規模なものとなる。また、毛皮獣を狩りによってではなく飼育により得る産業化もなされた。こういった大規模な産業は、ソ連崩壊後成り立たなくなるものが多かったと言われ、北方民族の失業によるアルコール依存という大きな社会問題の

要因ともなってしまった。

以上のように、エヴェンキ族の伝統的な産業や生活スタイルは地域ごとに異なり、言語面に関しては語彙の違いなどに影響している。

## 1.2 エヴェンキ語研究史

エヴェンキ語の研究は、主にロシアによるシベリア進出とともに始まったと言える。

当初は語彙や、聖書のテキストのごく一部の翻訳などに過ぎなかった。しかし、19世紀後半くらいから徐々に、言語学的な調査やテキストの採集がなされるようになってきた。

エヴェンキ語研究の歴史の記載がある先行研究はいくつかあるが、内容に差があり、網羅的にまとめたものはない。ここでは、これら先行研究に書かれているものを一覧としてまとめておきたい。エヴェンキ語の調査史および研究史は、他言語との接触の歴史を示す一端でもある。

言語学的な調査がなされる以前のデータについては、以下のとおりである(池上 1989a、Лебедева et al. 1985)。大変古い資料もあるように、言語データが収集された場所、年代などを整理し対照させたような先行研究はない。

17 世紀後半オランダ人ウィツェン(N. Witzén)の『北および東韃靼』(Noord n Ost Tartatyen):1785 年

版 (1692 年初版、1705 年第2版) ラムート語の数詞、「主の祈り」エヴェンキ語訳

1720 年代 メセルシュミット(D. G. Messerschmidt)の旅行記 *Forschungreise durch Sibirien 1720-1727*

(Berlin, 1962-77): 単語(数は不明)のみ収録

1730 年 ストラレーンベリ(Ph. J. von Strahlenberg)『ヨーロッパ・アジアの北部と東部』(Das Nord- und

Ostliche Theil von Europa und Asia, Stockholm)の付表「博言表 *Tabula Polyglotta*」、3種

類のツングースから約90語

1730-40 年代? フィッセル(J. E. Fischer)『シベリアを主とする三十四民族の三百語収録語彙』

1786-89 年? パラス(P. S. Pallas)『欽定全世界言語比較語彙集』

1790 年レセプス(J.-B. B. de Lesseps)『1787年と1788年のカムチャツカ旅行』(Travels in Kamtschatka, during the years 1787 and 1788, London, 1790)

1802 年ザウエル(M. Sauer)の”An Account of a Geographical and Astronomical Expedition to the Northern Parts of Russia, performed by J. Billings in the year 1785, etc. to 1794”

1817 年アーデルング(J. Ch. Adde lung)『ミトリダーデス』

1823 年クラブロート(J. Klaproth)『アジア博言集』 ←ストラレンベルクがエニセイ・ツングースカ周辺方言を収集

1855-56 年, 1874-76 年 カストレンによる西シベリア調査探検

この最後のカストレンによる探検により、シベリア諸言語の研究が本格的に言語学的観点から行われるようになったと言える。日本におけるツングース学の権威である、池上二郎も次のように述べている:

ツングース諸語のうち、特に、エウエンキー語、エウエン語についてその研究史を概観すると、19世紀はじめまでは、ツングース諸語にふれる著述も、主として単語だけを扱い、………… ツングース語研究において、新言語学は、19世紀なかばのフィンランド人カストレンの研究(A. Castrén, *Grundzüge einer tungusischen Sprachlehre*, St. Petersburg, 1856)にはじまる。カストレンは、シベリアのほかの言語とともに、エウエンキー語の外バイカルのウルルガ・マニコヴァ(Urulga-Mankova)方言について、言語学的に非常に進んだ調査研究を行い、これがツングース語研究の土台になったといえよう。

(池上 1989a: 1069)

一方、カストレンの調査を境として、エウエンキー語を対象(の一つ)とした探検も19世紀以降なされており、上でまとめたような語彙レベルの収集ではなく、時に大量のテキストも集められるようになってくる。データの採集者がみな言語学者というわけではないが、言語学的にも体系的な調査がなされ始めたと言えるであろう(Лебедева et al. 1985 および Воскобойников 1960)。

- 1901 年 グートによるエニセイ方言のテキスト(文学について)記述
- 1903 年 ペカルスキーによるアヤン方言の採集(ヤクートに出稼ぎに出ていたエヴェンキ人から)
- 1903-13 年 ルイチコフによるトゥルハン地方でのエヴェンキ語採集
- 1905 年 ワシリエフによるイリンピア・ツンドラ方言の伝説などのテキスト採集
- 1910-11 年, 1914 年 ススロフによるトゥルハン地方の方言採集(蠟管へ録音も)
- 1919-25 年 チトフによる北バイカル、ヴィチマ、カチュガ地方での採集

これら探検によって採集されたデータ<sup>1</sup>は、主に、サンクトペテルブルクのアカデミー東方学研究所や、ペテルブルクやモスクワのアルヒフ(文献所蔵所)などに所蔵されている。しかし、多くは出版などはなされておらず、全ての資料に当たれるわけではない。

また、これら以外にもドイツやポーランドによるシベリア調査もあったと言われ、まだ詳細が知られていない所蔵文献があることも期待される。

ただし、これら古い時代の言語データは、エヴェンキ語の歴史から見れば大変古く、量もあるという点で貴重で注目すべき価値があるが、限界もある。言語学者によらない記述もあり得るため、正確な記述か否かが不明な点があることである。もし、これら資料に当たれる場合は、将来的にそこから正確でない部分を分けて、読み取る必要があるであろう。

確かに Castrén(カストレン)による言語学的調査とその成果は、それ以前の言語学的でなかった時期のデータ資料からみると、画期的である。しかし、エヴェンキ語の研究に特化して見れば、Василевич(ワシレーヴィッチ)の包括的な研究業績を境に、その前後でみることのほうが合理的である。それまではそれぞれの方言内で記述という、限られた範囲内に過ぎなかったが、ワシレーヴィッチによるエヴェンキ語を網羅的に扱った研究は、広大な領域に広がるエヴェンキ語の全体像を意識させてくれるものといえよう。

同時に、1925 年にレニングラードに、シュテルンベルクとボゴラスにより民族学研究所が設立されたことで、シベリアへの調査探検がそれまでよりも組織的になされるようになった事も大き

---

<sup>1</sup> これ以外にも、シロコゴロフによるエヴェンキ語のテキストが、北京にあるという記述もある(高橋 1943: 12)。

い要因であろう。1930 年には、北方民族研究所もでき、シベリアの民族のロシア語普及のための教員育成のみならず、それぞれの民族の文化や言語を対象とした研究、教育がなされるようになっていく。この機関の運営により、ロシア人による民族語記述から、徐々にそれぞれの民族出身者によって母語である民族語の研究がなされていくきっかけにもなっていく。

### 1.2.1 初期の資料

上で見たように、単語の数語レベルにとどまる調査データを除けば、最初の文法を包括的に記述したものは、カストレン、続いてワシレーヴィッチである。

カストレン後、ワシレーヴィッチ以前の文法記述資料のうち、最も古いものとしては W. Ptitzine (1903) による文法記述が挙げられる。しかし、格や動詞のいくつかの活用をみの文法記述にとどまり、200語ほどの辞書があるだけである。続いて、Рычков (リチコフ) は、ロシア帝国末期の政治的混乱でシベリアへ流刑にあい、今のドゥジンカ (エニセイ川下流) あたりの、北方エヴェンキの地に数年滞在し、現地のエヴェンキ語を大量に記述している。その多くはまだ手稿のまま、ロシアアカデミーに保存されている。残されている記述は以下の三点である。

- ① 簡易文法記述: 25 頁、形態論のみ
- ② 辞書 (語ごとのカード): 4,329 枚 (語) 収録
- ③ テキスト: 3 方言につき計 973 頁

今後の詳細な分析が待たれるものである。

### 1.2.2 文法の記述 (先行研究のまとめ)

エヴェンキ語の先行研究の紹介をかねて、ここに代表的な記述について触れておきたい。

#### 1.2.2.1 ワシレーヴィッチとそれ以前

ワシレーヴィッチ以前の文法記述で特筆すべきは、前述のカストレンによるものと、Pope (ポッペ) によるものである。

カストレンは19世紀後半のシベリア探索で、ツングースのみならず、サモエードなどのウラル系言語も調査し、記述している。カストレンによる記述は、これまでのもとは比べ物にならないく

らい詳細で、網羅的である。その最も古く、現代からみても詳細な記述であるという点で、資料価値は高い。ポッペは、カストレンと同じ地域のバルグジン方言を調査する機会をえて、1927年に文法を記述しているが、カストレンの記述を修正する形ですすめられているのが特徴的である。主に、音声についての記述が詳細である。また、テキスト、辞書類も豊富である。両者とも画期的な文法記述であるが、ともに東方方言に偏っているのは残念といえよう。

これら先行研究があった後に、ワシレーヴィッチの一連の研究が出る。中でも重要なものは、『エヴェンキ(ツングース)語文法概説(Очерк грамматики эвенкийского (тунгусского) языка, 1940)』、『エヴェンキ語・ロシア語辞典(Эвенкийско-русский словарь, 1958)』、『エヴェンキ語フォークロア集(Исторический фольклор эвенков, сказания и предания, 1966)』、そして『エヴェンキ語の諸方言概説(Очерки диалектов эвенкийского (тунгусского) языка, 1948)』の著書4点であろう。ワシレーヴィッチによる文法記述には、語類の分類や、接辞の形態的種類の分類など、いまでも興味深いものがある。辞書は、各地の方言や、借用語をも考慮に入れた作りになっており、学習用というより、研究用に適している。テキスト類は、ほとんどがフォークロアにあたるものばかりであるが、きちんと文献となって出版されているものはめずらしいため、有用である。教科書や、読本として出されるフォークロアは、採集時から書き直されるものが通常であり、ワシレーヴィッチのテキストは、その書かれた言語の自然さにおいて貴重と言える。また、数は多くはないものの、それまでの別の研究者や探検者によって採集された古いテキストも収録されている。エヴェンキ語の方言を分類したのもワシレーヴィッチであり、それぞれ簡潔に記述された方言概説は、全ての地域の話者とは接触がむずかしい今においては利用価値が高い。

ワシレーヴィッチとほぼ同じ時代のエヴェンキ語研究者に、Константинова(コンスタンチノワ)と Колесникова(コレスニコワ)がいる。コンスタンチノワはより詳細な『エヴェンキ語文法(Эвенкийский язык: фонетика и морфология)』を1964年に、コレスニコワは『エヴェンキ語シンタクス(Синтаксис эвенкийского языка)』を1966年に出し、ともに有用な文献である。コンスタンチノワと、Лебедева(レベジェワ)、Монахова(モナホワ)の2人を含めた3人の著作で、エヴェンキ語教育の教師用テキストのための文法書を出している:1985年『エヴェンキ語文法—教育大学用教材』。言語の研究対象として諸方言を平等に扱う先行研究に対し、言語教育

上の規範的なエヴェンキ語の標準文法がこれにより広まるきっかけとなったと言える。エヴェンキ語の文語の基礎としてポリグス方言(地理的にエヴェンキの中心部にあり、南方言に属する)が選ばれ、これにいろいろな方言から特徴を取り入れてつくられたものが、標準語文法であった。

#### 1.2.2.2 ワシレーヴィッチ以降と現代のエヴェンキ語研究

ワシレーヴィッチの時代以降、エヴェンキ語の文法の記述は、言語学的により詳細な記述が見られるようになる。英語による記述も出版され、ロシア言語学を越えた記述へとすすむ。

Недялков(ネジャルコフ)による英語の『エヴェンキ語記述文法』は1997年に出版され、内容は2部に分かれている。前半は統語論で、句、文の構造から否定の作り方、さらに再帰や相互、比較、トピックなどの表現方法を取り上げている。後半の形態論は、屈折(Inflection)と派生(Derivation)に分け、名詞・動詞についてはパラダイムをまとめ、派生については派生接辞の列挙がなされている。そして最後には、決して多くはないが、音韻論、エヴェンキ語語彙集にも触れられている。

Bulatova & Grenoble(ブラートワとグルノーブル)による『エヴェンキ語文法』は、1999年に出版された英語によるエヴェンキ語文法書である。母語話者であり言語学者でもあるブラートワ氏が著者の一人である。決して多くはないページ数の中で、例を多く出しつつ簡潔で分かりやすい記述になっている。

Болдылев(ボルディレフ)は、ワシレーヴィッチの辞書を越える大規模なエヴェンキ語・ロシア語辞典を2000年に、ロシア語・エヴェンキ語辞典を1998年に出版している。とくに、ロシア語・エヴェンキ語辞書は、それまではワシレーヴィッチやその他の研究者らによる、いくつかの、主に学校教育用のそれほど大きくないものしかなかったため、大変有用である。また、エヴェンキ語形態論について詳細な著書があるが、例文とともに網羅的に分類・列挙された派生接辞に、説明がついた辞典的なもので、あらたな形態論的分析がなされているわけではない。

以上のように、文法、辞書の出版はワシレーヴィッチ後にもあるが、レファレンス的なものがほとんどであり、カストレン、ワシレーヴィッチから続く文法記述の枠組みからは出ていないと言える。



### 1.3 危機言語としてのエヴェンキ語

#### 1.3.1 シベリアの言語状況

ソ連の時代からあり、10年ごとに行われる国勢調査から、シベリアの言語使用状況についてみておきたい。

入手できる最新の国勢調査結果は、2002年実施のものである<sup>2</sup>。この調査の前に行われた調査は1989年にあったが(そのため本来は次の調査は1999年に行われるはずだった)、比較のために引用する。エヴェンキ語をはじめとする、他のツングース諸語と、周辺言語であるユカギール語、ドルガン語、サモエド諸語と対照して表にまとめたものが表4である。自己申告制に基づく調査であるが、それぞれの民族の人口と民族語が話せるという母語話者数から、母語率を算出して並べている(この母語率についてのみ、1989年の調査と比較対象している)。そして、ロシア語の言語運用可能者率(表ではロシア語率と記入)を加えて載せている。エヴェンキ語に関しては、都市部と村落部の統計についても加えておいた(この項目は1989年の調査には見当たらなかったなので空欄にしている)。

近年の傾向としては、母語の保持率は、言語によって程度の差こそあれ、一律に減少傾向にあることが分かる。1989年の調査では「あなたにとっての第一言語なにか(一つの言語を選ぶ)」という問に対する答えであるのに対し、2002年の調査は「○○語が出来るか(複数選択可能)」という問に対する答えであり、データの読み取りには注意を要する。しかし、複数の言語を選べる2002年のときの方が、一つしか選べない1989年のときよりも、高い保持率が出そうであるにもかかわらず、実際は下がっているということは、むしろ注目すべきであろう。

---

<sup>2</sup> <http://www.perepis2002.ru/index.html?id=17> にて入手可能。

	人口	母語率	1989 年	ロシア語率
エヴェンキ	34,610	20%	30.4%	94%
都市部	7,901	17%	-	
村落部	26,709	20%	-	
エウエン	18,642	33%	43.9%	93%
ネギダル	505	7%	28.3%	100%
ナーナイ	11,569	27%	44.1%	99%
オロチ	426	4%	18.8%	100%
ウデヘ	1,531	9%	26.3%	100%
ウイルタ(オロッコ)	298	4%	44.7%	100%
ウリチ	2,718	13%	30.8%	99%
ドルガン	7,077	64%	81.7%	93%
ユカギール	1,176	27%	32.8%	96%
ネネツ	41,302	71%	77.1%	88%
エネツ	237	34%	45.4%	97%
ガナサン	834	50%	83.2%	99%
セリクプ	4,249	31%	47.6%	99%

表4 話者数と言語保持率(2002 年ロシア国勢調査)

民族としての総人口は、シベリアの少数言語民族のなかでも、エヴェンキ族は多い方である。しかし、民族語の母語としての保持率はきわめて低いほうだといわざるを得ない。また、都市部と農村部を比べてもその割合は大して変わらない。どの言語でもロシア語の運用能力に差はなく、ロシア語保持率はほとんど100%である。つまりは、ロシア語以外に民族語をも話すバイリンガルやトライリンガルが少ないということがわかる。

### 1.3.2 現在のエヴェンキ語の社会言語学的統計

ロシアで1994年に行われた国勢調査に、民族別に、使用場面別の言語使用状況をまとめた項目がある。20年前のデータであり、現在は多少変化している可能性はあるが、ここで挙げておきたい:表5。

使用場面は、家庭、学校(子供の初等教育としてであり高等教育は含んでいないと思われる)、職場の3つである。質問はそれぞれの民族語、ロシア語、そしてそれ以外を選択する形とみられる。全体を1000として、どのくらいの割合がどの言語を使っているかが示されているが、統計には民族語かロシア語かしか示されていない。従って、合計が1000にいかない場合は、これら2つの言語以外が選択されているということになる。

エヴェンキを見ると、例えば家庭においては民族語を使用する人が61(／1000)、ロシア語が288(／1000)となっている。のこりの割合651(／1000)については統計表には明示されていない。しかし、エヴェンキ族のおかれている地理的状況から、多くは、ヤクート語、ブリヤート語がそのほとんどを占めるであろうと思われる。

ドメイン	家庭		学校		職場	
	民族語	ロシア語	民族語	ロシア語	民族語	ロシア語
エヴェンキ	61	288	6	389	7	374
エウエン	201	473	71	721	188	567
ナーナイ	106	893	22	974	33	967
ネネツ	263	731	-	1000	62	938
ドルガン	487	333	29	738	189	635
ヤクート	907	93	752	248	765	234
ブリヤート	648	351	270	729	274	725

表5 1994年国勢調査:ドメイン別の使用言語の割合(全体を1000として換算したもの)

北方少数民族語と呼ばれる言語の内部においても、それぞれの事情がかなり異なっているであろうことが、この統計から分かる。民族人口が比較的多いエヴェンキであるが、民族母語

の使用はほとんどなされていないといえる。家庭という使用場面においてすら、言語シフトが他の言語とくらべて進んでいることがうかがえる。例えば、エヴェンキも多く住む、サハ共和国やブリヤート共和国では、ヤクート語、ブリヤート語がそれぞれ多数派言語であり、使用場面にかかわらず使用率が高いことは理解できる。また、ネネツ語やドルガン語のように、居住地域が比較的限定的で村落、都市によっては当該民族が多数派であるようなところがある民族と比べれば、エヴェンキ語のように広くひろがり、ほとんどの場で少数派となることを考えれば(参考: 図3)、言語使用率が下がるのはある程度予想はつく。しかし、同じような状況が予想されるエヴェン語やナーナイ語とくらべても、エヴェンキ語においてひときわ低くなっている母語使用率は、他の社会言語学的要因があるのではないかと考えられる。



地図3 2002年国勢調査に基づくエヴェンキ人の居住人口と分布(ロシアアカデミー作成地図)

### 1.3.3 シベリアと中国のエヴェンキ族の系統帰属について

ここで、ツングース諸語に属する他の諸言語のなかでも、エヴェンキ語に近いとされる言語についてまとめておきたい。

先行研究のまとめのところででも触れたように、ツングース諸語の研究は主に西欧およびロシアのシベリア探検により始められたという経緯があり、いわば西方から徐々に東へと進んで来たと言える。日本においてはツングースというより満洲、そしてモンゴルの研究が盛んであり、言語学的なツングース諸語の研究は、北海道に居住していたツングース系民族ウイльта語（オロコ語）の研究からといえる。従って中国内のツングース族と、ロシア領内のツングース属の関係については最近になって整理されるようになってきた。

では、中国内にいるとされるエヴェンキ系言語・民族はいかなるものがあるのか、ロシア内のエヴェンキとの関係で言及しておきたい。音韻的な対応から考察する言語学的な系統関係については、第4章で改めて触れることにする。ここではまず、各地域の民族・言語について、歴史・データなどを概観しておく。

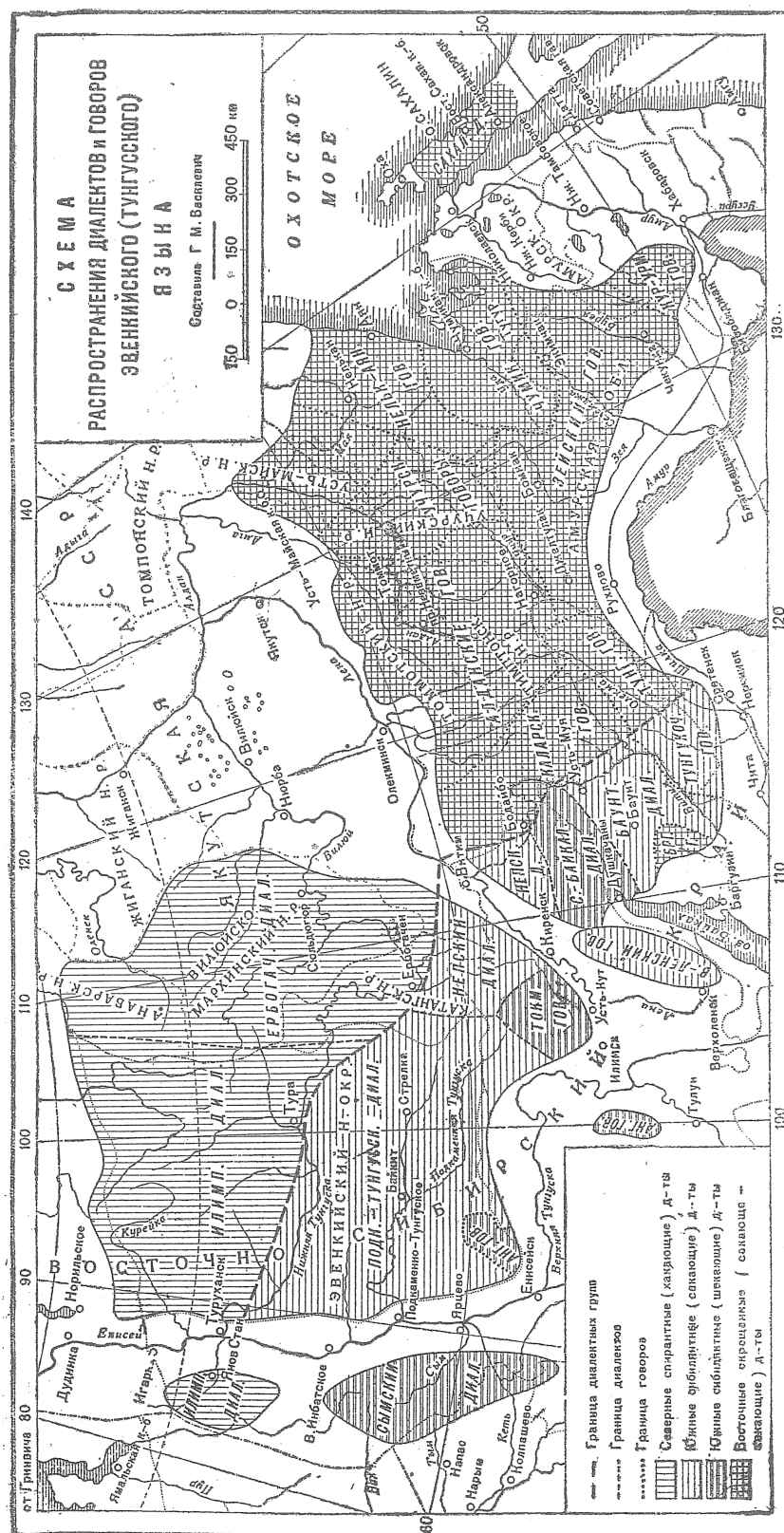
### 1.3.3.1 シベリア・エヴェンキ語

ロシアにおける統計でデータをみたように、ロシア内シベリア・エヴェンキはその広範な地域にもかかわらず話者数については、凡そ 30,000 人、エヴェンキ語を母語とする者が 9,000 人程度とされる。シベリア・エヴェンキ語については、既に方言分類に関する研究がある。Василевич (1948) には 11 の方言が紹介・記述されており、いくつかの音的そして形態的特徴に従って方言を 4 つのグループに上位分類している。通常、表 6 のような特徴的な音対応に従って分類される<sup>3</sup> (地図 4 参照)。

北方言	中央方言	南方言	東方言	ツングース祖語
h-, -h-	s-, -s-	ʃ-, -ʃ-	s-, -h-	*s-, *-s-
h-	h-	φ -	φ - ~ h-	*p-
-ʏ-	-ʏ-	-w- ~ - φ -	-ʏ-	*-g-

表6 Василевич (1948) による方言分類基準の一部

<sup>3</sup> ワシレーヴィッチは表6にある中央方言も“南方言”と呼んでいるが、紛らわしいので、Doerfer (1978)に従って“中央方言”と変えた。

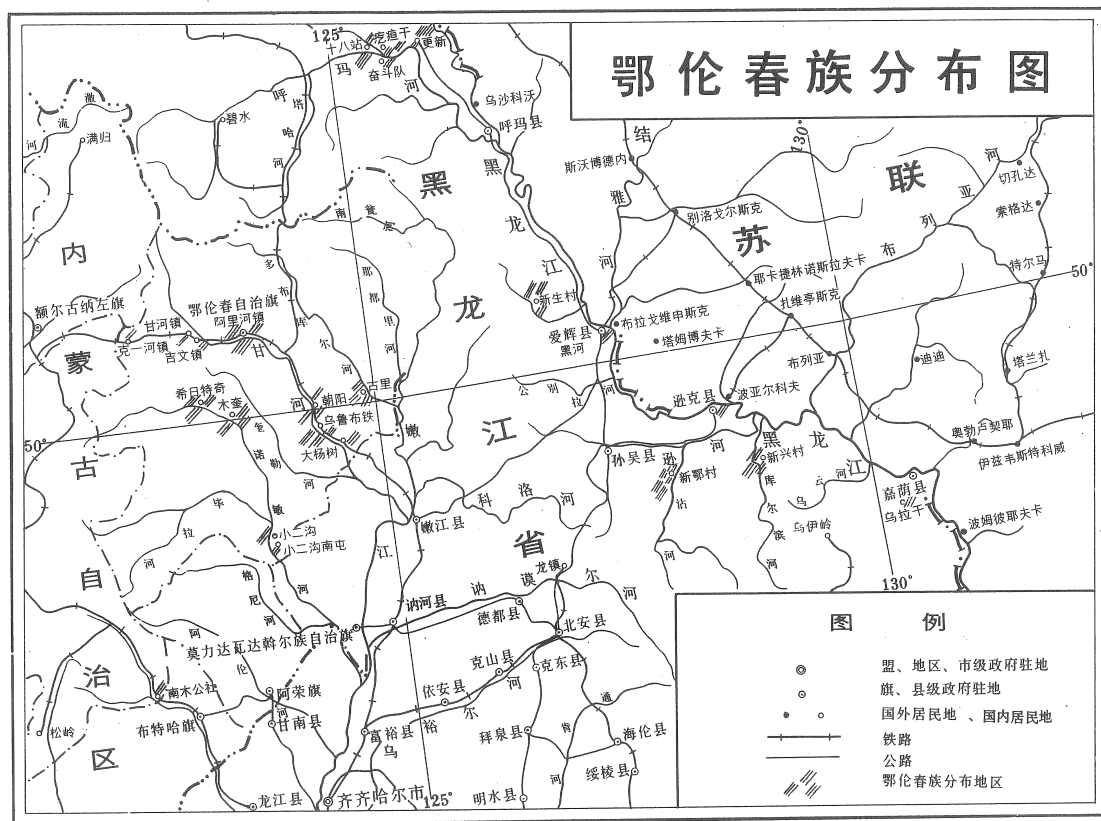


地図4 エヴェンキ語の方言分類地図(Василевич 1958)

### 1.3.3.2 鄂倫春(オロチョン)語

人口は約 4,000 人[1982 年](津曲 1988)とされる。

分布する地域は池上(1989a)によれば、「嫩江上流右岸甘河地方(鄂倫春自治旗)・諾敏河地方、鄂倫春(布特哈旗)、アムール川上流右岸呼瑪河地方・愛琿地方(新生村)・遜克地方(新興村、新鄂村など)、嘉蔭河地方(勝利屯)」などになり(地図5参照)、また「アムール川上流右岸のビラル Birar 族、マネギル Manegir 族」は鄂倫春族に含まれる。『鄂倫春族簡史』によれば、鄂倫春族の来源について、『北史』の記述から“室韋”という古代民族の一部が祖先であるとしている。その真偽はともかく、アムール川の支流であるゼヤ川や呼瑪川流域に古くから居住していたようである。



地図5 鄂倫春語の分布地域(『鄂倫春族簡史』(1983)より)

### 1.3.3.3 鄂温克(エウエンク)語

人口は約 19,000 人[1982 年](津曲 1988)<sup>4</sup>とされる。鄂温克語は大きく 3 つの下位方言(集団)に分けられるが、その分布を朝克・中嶋(2005)からまとめると次のようになる(別名//話者数//居住場所、また地図6参照):

ーホイ方言(輝河):索倫<sup>5</sup>(ソロン)鄂温克とも呼ばれる集団//16,690 人//内蒙古自治区フルンブイル(呼倫貝爾)盟鄂温克族自治旗・モリンドワダグール(莫力達瓦達虎爾)族自治旗・アロン(阿榮)旗・ザラントン(扎蘭屯)市、ハイラル(海拉尔)市、及び黒龍江省訥河県・嫩江県など

ーメルゲル方言(莫日格勒河):通古斯(ツングース)鄂温克とも呼ばれる集団//2,000 人//内蒙古自治区ホーチンバルグ(陳巴爾虎)旗鄂温克索木・鄂温克族自治旗錫尼河索木・孟根楚魯索木など

ーオルグヤ方言(敖魯古雅河):雅庫特(ヤクート)鄂温克とも呼ばれる集団//500 人//内蒙古自治区呼倫貝爾盟エルグネ(額爾古納)左旗・鄂倫春族自治旗など

朝克・津曲(1995)によれば、通古ス鄂温克はかつてロシア領にいたエウエンキ族であり(具体的にいつ頃中国へ移動したのかについては触れられていない)、また雅庫特鄂温克は現在のサハ共和国に住んでいたエウエンキ族がロシア革命後に中国に移住してきたものだという。また、相互理解性について、ホイ方言とメルゲル方言間では意思疎通がある程度可能(時にモンゴル語、ダフル語及び漢語を用いる)であるが、オルグヤ方言とは困難(漢語を主に用いる)であるという。

『鄂温克族簡史』によれば、上記3つの言語集団はその出身が異なるが、鄂温克族として一体となっており、個別に“索倫族”、“通古ス族”、“雅庫特族”と呼ばれることを望んでいないと

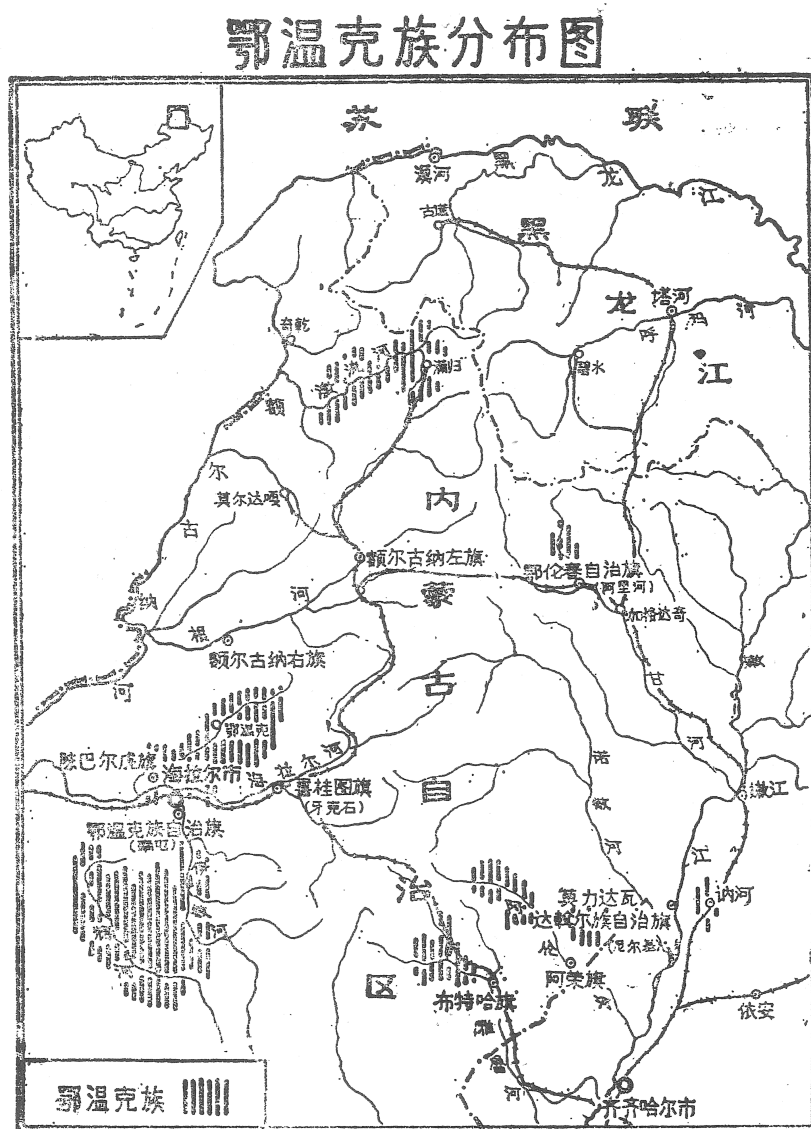
<sup>4</sup> 朝克・中嶋(2005)によると、鄂温克族は約 32,600 人、そのうち鄂温克語を母語とする話者の人口は約 18,500 人である。

<sup>5</sup> “索倫(ソロン)”という名称であるが、『鄂倫春族簡史』及び『鄂温克族簡史』によれば、満族が中国東北部の少数民族を広く指して言う名であったという。明末清初には、モンゴルからアムール河口までの広い範囲に分布する民族を呼んだもので、主に、ダグール族、鄂温克族そして鄂倫春族を指していた。清朝の軍組織・八旗に組み込まれるようになってからは索倫部のなかでさらに細かく区別するようになっていった。



いう<sup>6</sup>。なお朝克・津曲(1995)は編者序文で「中国側の民族・言語区分には一般の認め方と異なる部分がある」とし、「いわゆる「ツングース・エウエンキ」と「ヤクート・エウエンキ」はロシア側のエウエンキの一派と認められるが、鄂温克族の大半を占める「ソロン・エウエンキ」については別個の民族・言語集団(ソロン)とするのが一般的である」としている。

以上のような歴史的な民族移動に関する資料や研究がある一方で、ロシア側・中国側のエウエンキ諸方言を言語学的、とくに音韻的に比較・考察した先行研究はほとんどない。



地図6 鄂温克語分布地図(『鄂温克族簡史』(1983)より)

<sup>6</sup> それぞれの民族名称について、索倫は満洲語、通古斯はチュルク語、雅庫特はそもそも他民族名ということで、どれも他民族からの呼び名である。

## 1.4 現在のエヴェンキ語の置かれた状況

### 1.4.1 使用

ソ連・ロシアの国勢調査によるデータを見たように、エヴェンキ語の言語使用状況は決してよくはない。モノリンガルとしての話者は極めて少ないと言ってよいであろう。

話者のほとんどはロシア語とのバイリンガル、さらにはサハ(ヤクーチア)共和国では多数派言語のサハ語と、ブリヤート共和国では多数派言語のブリヤート語も入ったトライリンガルが少なくない。

2007 年1月に、サハ共和国の南方の、となりのアムール州境に近い、イエングラ村というエヴェンキ族の村落を訪問した。タイガの中の村で、主たる産業は、狩猟とトナカイ放牧、毛皮獣飼育である。エヴェンキ語・エヴェンキ文化の保持を目的とした比較的立派な学校や、行政庁舎、博物館施設もある、経済的にもしっかりとしている村であった。

数人にインタビューを試みたが、多くはロシア語、ヤクート語、エヴェンキ語のトライリンガルであった。自然な発話を採集すべく、自己紹介のモノログや、数人での日常会話の録音を試みたが、ロシア語やヤクート語とのコードスイッチングが度々観察された。スイッチのトリガーとなるものは、おおよそ話す内容によるものが大きいと見られた。狩猟やトナカイ飼育などの伝統的なエヴェンキの生活にかんする話ではエヴェンキ語が多く聞かれるのに対し、都市での生活や、経済的な仕事、行政関係の話になるとヤクート語やロシア語へのスイッチが起こるのである。下に、そのとき採集したモノログを挙げる:エヴェンキ語は正体であるが、ロシア語の部分は斜体にしてある(話者はかなり高齢のおじいさんで、聞き取りづらい発音)。

*брат старший был. брахиста сейчас в тюрьме должен быть.*

兄 年上の いた 兄 今 牢獄に 違い ない いる

*туда можете заехать, то зараз скажет.*

そこへ できる 立ち 寄る そしたら すぐに 話す.3sg

兄がいた、今はきっと牢屋だろうね

そこへ行ってもいいさ、すぐに話してくれるだろうさ

( а родители в тайге жили?) - в тайге

(一方 両親 タイガに 住んでいた?) タイガに

(кочевали?) - кочевкой.... улуки дэ чоо да охота (??)

(放牧していた?) 放牧で リス も ? も 狩猟

частниками это не выходили. колхоз был. колхоз товар-ил кэтэ.

私営として これ 否定 出ていった コルホーズ あった コルホーズ モノ-pl たくさん

колхоз товар-ил кэтэ-кун был. хорокто .....??

コルホーズ モノ-pl 多い-強調 あった 干し草

дрова... швырковые, долготевый возили.

薪 割られた ? 運んだ

(両親はタイガに住んでいた?) - タイガにいた

(放牧してた?) - 放牧で... リスとかで狩りして

個人経営はダメだった、コルホーズだけ。コルホーズではモノが豊富

コルホーズはたくさんモノがあった。干し草も...

薪も... 割ったものとか、???を運んだ。

много дрова надо было то время-ду...

たくさん 薪 必要 だった その 時代-DAT

вот такой история была...

そんな 話 だった

薪がたくさん必要だった、その時代には...

そんな話さ...

このように、ロシア語や、サハ語などのバイリンガル、トライリンガルが増える一方で、それらの言語へシフトする例も多いと見られる。例えばタイムイル半島では、エヴェンキよりも少数のガナサン語やドルガン語などにシフトするエヴェンキの人も少なくないとの報告もある。

現在では民族教育も見直されてきてはいるが、教育現場においてはロシア語のほうが重視されている。

#### 1.4.2 教育

近年、教科書類がモスクワやペテルブルグでつくられる動きもあると聞くが、それを使う民族語学校は多くない。

民族文化、言語の教育者を育成する施設は、サンクト・ペテルブルグ教育大学にある、北方民族研究所が唯一の場所であるが、学生が集まらないことや、近年の大学改革の影響で、縮小の方向にあると聞く<sup>7</sup>。遠くシベリアから、学生を奨学金で派遣する制度もあるらしいが、決して多くはない。また、シベリア出身の若い学生たちであっても、エヴェンキ語を母語として話す人はほとんどいない。教科書を使って、民族言語を学ぶわけである。

一方、研究対象として言語を研究する場所は、モスクワやペテルブルクの大学やアカデミ研究所、また、ノボシビルスクやヤクーツクのアカデミなどでも、研究者が何人かいる。

教育や研究する場所がいくつかあっても、そこへ入る若い世代がないと続くことはない。また、そのような数少ない場所すら、教育・研究に割く余裕がない経済的な事情から、縮小傾向にあるのが現状である。

---

<sup>7</sup> 研究所所長はじめ所属教員との個人談より。

## 第二章

### エヴェンキ語の音韻

第四章からエヴェンキ語と他言語との言語接触と、それによる文法的「一致」の発生の位置づけを考察していくが、その前にエヴェンキ語の文法について概観しておく。

まず第二章では、音声学・音韻的な特徴について述べる。

続いて第三章では、音韻論的および形態論統語的な特徴から品詞（語類）について考察する。そして、「一致」もその一つの特徴として区別される語の結合について全体像を確認する。最後に、以上のような音韻形態的な特徴と、語結合の方法を用いて、文がどのように拡張し複文を構成していくかについてまとめる。

本章では、エヴェンキ語の音韻体系についてまとめる。1.2.2で見たように、エヴェンキ語は既に先行研究がいくつかある。そのため、先行研究でまとめられている音体系に言及しつつ、筆者自身が採集した音声データを基に分析し再検を討行う。

#### 2.1 母音体系

##### 2.1.1 先行研究の母音体系

母音体系については、先行研究により、またエヴェンキ語の方言により差がある。まず、代表的な先行研究を3つ取り上げ、母音体系を見ていく。

表1は Василевич(1940)にある母音一覧である。[ ]の括弧に入っている音は、方言によっては聞かれる異音とされる<sup>8</sup>。特徴的なことは、狭母音の/i, ī/と/u, ū/に対応する中舌化した/i, ī/と/u, ū/があるという点である。また、前舌半狭母音の/ɛ/に対応する短母音/e/を認めていることも特徴的であるといえる。

		前		中		後	
		円唇	非円唇	円唇	非円唇	円唇	非円唇
狭	高	[ü]	i ī	u ū	i ī	u ū	[ɯ]
広	中	[ö]	e ē	[o ɔ]	ə ɛ	o ɔ	
	低		[ä ā]		[a ā]		a ā

表1 Василевич(1940: 14)の母音体系

続いて表2は Константинова(1964)にある母音一覧である。ここで取り上げられている方言は、エヴェンキ文語の基礎となったポリグス方言(ポドカーメンナヤ川流域)であると記述されている。コンスタンチノワは、レベジェワらとともにエヴェンキ語教師用教科書(Лебедева *et al.* 1985)を作成していることもあり、この母音体系がエヴェンキ語の標準的な体系として受け入れられていると言ってよい。( )内の音は異音であり<sup>9</sup>、音素として認めているのは5つの短母音/i, a, ə, u, o/と、6つの長母音/ī, ē, ā, ɛ, ū, ɔ/である。ワシレーヴィッチと異なり、前舌半狭母音/ɛ/に対応する短母音/e/がないことが特徴的である。

最後に、表3は Nedjalkov(1997)による母音一覧である。Nedjalkovは、1988年にヴァナヴァラというエヴェンキ語南方言(北方言に近い地域で標準語の基礎として参考にもされた)での調査をまとめた音韻であると記述している。先の2つの先行研究と異なり、平唇後舌狭母音/ɯ/

<sup>8</sup> それぞれ、[ü]は/u/の、[ö]は/o/の、[ɯ]は/i/の、[o, ɔ]及び[ä, ā], [a, ā]は/a, ɛ/の異音であるとしている。最初の3つは主にサハ共和国とハバロフスク地方のエヴェンキ語方言(ヤクート語の影響がある)に、[o, ɔ]は北方方言と東方言の一部に、そして[ä, ā], [a, ā]は東・南方言で聞かれると記述されている。

<sup>9</sup> それぞれ、[ɛ]および[i, ī]は/i, ī/の、[u, ū]は/u, ū/の、[ɔ<sup>o</sup>]と[ɛ<sup>a</sup>]は/a/の音色をもった異音であるとしている。

		前	中	後
狭	高	i ī (i ī)		u ū (u ū)
	中	(ε) ē	(ə̃) ə ā	o ō
広	低		(ə̃ <sup>a</sup> ) a ā	

表2 Konstantinova(1964: 8)による母音体系

を認め、対応する長母音はないことが特徴的であるといえる。しかし、残念ながらこの音素については語例も挙げられておらず、Nedjalkov(1997)の文法記述の例文等にも使われていないため、実体は不明である。また、Konstantinova(1964)の立てる音素/ē/に対して、長短ペアの /je, je:/が立てられていること、/ə, ə̃/に対して/ε, ε:/としている点も特徴的である。

	Front		Back	
	<i>unrounded</i>	<i>rounded</i>	<i>unrounded</i>	<i>rounded</i>
<i>high</i>	i, i:	—	u	u, u:
<i>middle</i>	je, je:	—	ε, ε:	o, o:
<i>low</i>	a, a:	—	—	—

表3 Nedjalkov(1997: 309)による母音体系

以上3つの先行研究を見たが、全てに共通している言えることは、/i, a, ə, u, o/と/ī, ā, ə̃, ū, ō/の5母音については長短のペアで存在することである。しかし、短母音/e/については、先行研究のそれぞれで扱いが異なっている。そして、口の開き(舌の高さ)と舌の前後の2つのパラメータにより母音の種類を特定していることは共通している。

### 2.1.2 エヴェンキ語東方言の母音

先行研究をふまえ、以下自らのデータを用い検討する。語彙のデータは、2003年にロシア・サハ共和国ヤクーツクにて、エヴェンキ語母語話者(女性、1930 年生まれ)から録音した156語である。付録1にまとめて挙げているので参照されたい。前節で見た先行研究とは異なり、方言としては東方言に属すると考えられる。

まず、母音の弁別素性として舌根収縮性(RTR:Retracted Tongue Root, 訳については「舌根後方化」「舌根后縮」などもある)<sup>10</sup>が関わっていることを指摘する。先行研究においても、ツングース諸語をはじめとして、中期朝鮮語やチュクチ語にも舌根の素性を認め、シベリアやユーラシアの内陸側諸言語に広く観察されるという主張(Comrie 1997, 松本 1998)や、中国内のエヴェンキ諸語をはじめとするツングース諸語にも ATR を認める研究(李 1998)があるなど、弁別素性としての舌根収縮性は既に指摘されている。筆者が今回得た音声データにおいても、音声・音韻的に RTR が関わっていることを確認した。

RTR の有無と、音環境の類似する疑似ミニマルペアを考慮し、以下のように母音音素を認定する。以下で語の前の数字は、付録1の語彙リストの番号を示す。

#### 前舌狭母音

[−RTR]: /i/, /i:/

[+RTR]: /ĩ/, /ĩ:/

	〈語頭・k の前〉	〈語頭〉	〈語末・k の後〉	〈語末・鼻音の後〉
/i/:	111. [iktəmi] “打つ”	38. [ilga] “花”	32. [ŋinaki] “犬”	
/i:/			21. [araki:] “酒”	
/ĩ/:		30. [idəgə] “もの”		144. [iŋini] “寒い”
/ĩ:/	8. [i:ktə] “齒”			53. [iŋaŋi:] “日”

<sup>10</sup> 舌根を後方へ引く調音方法。分かりやすく言えば、のどを緊張させ締め付けるような感じのする発声である。これらの音は母音の下に Retracted Tongue Root を示す diacritics の[ɻ]を付けて表す。音声学では一般的に ATR(Advanced Tongue Root:舌根前方化)が知られているが、エヴェンキ語では舌根を前方化させるというより舌根を後へ引くという方法が有標であるため、RTR を表記することとする。



## 後舌狭母音

[−RTR]: /u/, /u:/

[+RTR]: /ɯ/, /ɯ:/

	〈硬口蓋子音の後〉	〈語頭〉	〈語頭・b の後〉
/u/:	20. [jumu:ran] “油”	10. [ɯpakan] “指”	
/u:/:	128. [ju:mi] “出る”		132. [bu:mi] “与える”
/ɯ/:		41. [ɯɾa] “山”	125. [bɯmi] “死ぬ”
/ɯ:/:	17. [aɯ:mɯk] “病”		

円唇性のある母音は後舌半狭母音で、常に[−RTR]である。口の開きの違いにより異音が観察される。

## 円唇後舌母音

[−RTR]: /o/, /o:/

	〈語頭〉	〈語頭・s の後〉
/o/ [o ~ ɔ]:	52. [oɕikta] “星” 6. [ɔŋɔktɔ] “鼻”	
/o:/ [o: ~ ɔ:]:	63. [o:kin] “いつ”	110. [so:xi:mi] “驚く” 108. [so:mi] “泣く”

## 半狭・広母音

[−RTR]: /a/, /e/, /a:/, /e:/

	〈語頭〉	〈語頭・s の後〉	〈語頭・軟口蓋音前〉
/a/ ([a] ~ [a̠] ~ [æ]):	142. [daga] “近い”		77. [axi] “妻、女”
/e/ ([e] ~ [ɛ] ~ [ə]):	50. [delatea:] “太陽”		73. [jegin] “9”
/a:/ ([a:] ~ [æ:]):	135. [sa:mi] “知る”	109. [sæ:ndemi] “怒る”	58. [a:xeltana] “夜”
/e:/:		5. [se:n] “耳”	4. [e:xa] “目”

[+RTR]: /ɘ/, /ɘ:/

〈語頭・ŋ の後〉

〈語頭・s の後〉

/ɘ/ ([ɘ] ~ [ɛ] ~ [a] ~ [ɐ]): 131. [ŋɘŋɘmi] “行く”

93. [sɘvɘki] “神”

/ɘ:/: 149. [ŋɘ:ri] “光”

13. [sɘ:xɘ] “血”

以上よりエヴェンキ語東方言の母音体系を以下のように考える。

−RTR			+RTR		
	i, iː	u, uː		ɪ, ɪː	ʊ, ʊː
	e, eː	o, oː			ɘ, ɘː
	a, aː				

表4 エヴェンキ語(東方言)の母音体系

### 2.1.3 母音調和

エヴェンキ語は語内における母音の共起に制限がある。つまり母音調和があるが、特徴として次の2つが挙げられる。

- ① 第一音節の[RTR]の素性に従いその値が後続の母音へ波及する
- ② 円唇後舌中母音の調和(唇音牽引)が見られる

①に従うと、表4で挙げたエヴェンキ語の母音は次の二つのグループに分けられる。

## 母音調和のグループ

第1グループ [+RTR]: a, ā, e, ē, o, ō, i, ī, u, ū

第2グループ [-RTR]: ə, ɐ, ɨ, ɪ, ʊ, ʉ

母音のグループに基づき一語内における母音の共起を観察すると、採集した音声データの中に①に反する例がいくつかある。反するパターンは次の A あるいは B がありえる:

A. 第一音節が[-RTR]であるのに第二音節以下で[+RTR]が出てくる語

B. 第一音節が[+RTR]であるのに第二音節以下で[-RTR]が出てくる語

A に当たる語例は(111)の1語だけであるのに対し、B に当たる語例は11語(46, 59, 62, 85, 86, 88, 90, 130, 143, 149, 153)もある。B のほうが多いということから、第二音節以下では、第一音節に比べて[+RTR]は弱化しやすいということが指摘できる。

この第二音節以下での母音の弱化については、先行研究にも同様に解釈できる記述がある。例えば Василевич(1958)は、広母音を第1グループ:/a, ā, ē, o, ō/ と第2グループ:/ə, ɐ/ に分け、広母音の母音調和に関して表5に示すようにまとめている。この中で、先行する母音/ā/の後に、/a/ではなく/ə/が調和するとしている部分が母音調和に反する組合せであり、母音調和の例外としている。

先行する広母音	後続する広母音	
	短母音	長母音
ā	ə	ā
ō	a	ā
a	a	ā
o	o	ō
ə, ɐ	ə	ē
ē	a	ā

表5 エヴェンキ語の母音調和 (Василевич 1958: 659-60 より一部改変)

しかし、先行研究では口の開きによる母音調和(口蓋調和)を考慮しているため、先行する母音/a/に対して、弱化した/ä/が口の開きの狭い/ə/になりやすいことを指摘しているに過ぎない、と解することができる。先行研究での/a/は、舌根調和を考える本論文での/ə/に相当するが、[RTR]の異なる音素が単一語内に存在することを許容する母音調和規則があるという例外を認める必要はない。

次に②であるが、リストにある2音節以上で第一音節が/o/, /o:/で始まる21語のうち第二音節以下でも円唇母音が続く例は12語あった。池上(1989a: 1072)は、「第1音節に\*o または\*ə があるとき、第2音節以下の母音の円唇化がおきたとすれば、どんな範囲におきたかの問題は今後にゆずりたい」と述べているように、音変化としての円唇調和はツングース諸語内においては未解決である。しかし、格接辞や派生接辞のような従属形態素が語に後続する際に見られる母音調和には、円唇性が関与する。例えば、表6はツングース諸語の対格接辞の異形態である。

エヴェンキ語:	-va ~ -və ~ -vo
エウエン語:	-v ~ -w ~ -bu (3SG.POSS -van ~ -vən ~ -von)
ネギダル語:	-wa ~ -wə
ナーナイ語:	-va ~ -və
ウリチ語:	-va ~ -və
オロツコ語:	-va ~ -və ~ -vo ~ -vu
オロチ語:	-va ~ -və ~ -vo
ウデヘ語:	-va ~ -və ~ -vo

表6 ツングース諸語における対格接辞の母音調和による異形態<sup>11</sup>

<sup>11</sup> エウエン語: Цинциус(1947)、ネギダル語・ナーナイ語: Аврорин(1959)、オロチ語: Аврорин и Болдырев(2001)、ウデヘ語: Кормушин(1998)、それ以外は ЯН СССР V(1968)より。

エヴェンキ語では、対格接辞のような唇子音が関わるときには、原則として円唇調和が観察される。しかし、唇子音以外のときも、方言によっては円唇母音の異形態が観察される<sup>12</sup> (Василевич 1940: 18, Василевич 1958: 661) が、揺れも認められる。

母音調和規則②は、①に比べると弱いものと言わざるを得ないが、エヴェンキ語に存在する規則と言える。

以上のことより、以下で形態素を表記する際に母音調和による異形態を表す代表形 *A* は、*a* ~ *ə* (~*o*) を意味する。

## 2.2 子音体系

### 2.2.1 エヴェンキ語東方言の子音体系

子音の音韻体系については、先行研究の間に、母音で見たほどの大きな差は見られない。従って、主に筆者の採集した音声データを分析し、必要に応じて先行研究に触れていく。母音について分析したときと同じように、疑似ミニマルペアを考慮した音環境を示し、音素の認定をおこなう。

#### 2.2.1.1 阻害音

唇音: /b/:[p ~ b], /v/

音声としては[p],[b],[v]<sup>13</sup>が現れる。しかしこれらは現れる環境に差がある。その分布を示したものがものが表である。

---

<sup>12</sup> Василевич (1958: 661) には、ヤクート語やブリヤート語からの影響の可能性について指摘がある。庄垣内 (1992: 546) は、「唇音調和のうち、平唇広母音 *a*, *ä* が、先行する円唇母音に同化し、円唇化して *o*, *ö* になる現象を、特に唇音牽引 (labial attraction) と言う」が、チュルク諸語のなかでもキルギス語、新ウイグル語ロプノール方言、そしてヤクート語に見られると指摘している。ヤクート語に近接するエヴェンキ語などツングース諸語との相互への影響も可能性としてありえるだろう。

<sup>13</sup> 有声唇歯摩擦音で現れることもあるが、特に語頭および母音間では[w]に近い。自由変異と言えるため、[v]に Lower を示す diacritics の[ɹ]を付けてで表す。

		/b/		/v/
		[p]	[b]	[v]
語頭		×	40. [bira] “川”	114. [ɣa:mi] “殺す”
語中	母音間	×	×	93. [səvəki] “神”
	子音の前 (他に -pk- など)	146. [goropti] “古い”	×	37. [avdanna] “葉” (他に -vg- など)
	子音の後	×	88. [gərbi] “名前” (他に -mb-, -lb- など)	×
語末 <sup>14</sup>		-p (1.PL)	×	-v (1.SG)

表7 唇音の音環境による分布

表7の分布を見ると、[p]と[b]は相補分布をなしていることが分かる。[p]は語中において無声子音の前に来たときのみに現れていることから、音素/b/の異音と見做すことが出来る。

歯茎音： /t/, /d/, /s/

	〈語頭・əの前〉	〈母音間〉	〈l-aの間〉
/t/:	28. [təti] “服”	28. [təti] “服”	58. [a:xeltana] “夜”
/d/:	25. [dəgi] “鳥”	76. [ədi] “夫”	126. [bakaldami] “会う”
/s/:	93. [səvəki] “神”	4. [e:sa] “目”	

4. [e:sa] “目”や、77. [axi] “女、妻”といった語について、インフォーマントはそれぞれ語に含まれる[s]と[x]が自由交替することを指摘した。エヴェンキ語において、特に方言間では[s]と[x]の交替は指摘されるところだが<sup>15</sup>、これは/s/が異音として[x]を持つことがあるのであり、この後

<sup>14</sup> 語彙リストには語末に唇音が現れる例がなかったが、人称接辞の語尾として現れる音があるので書き足した。なお -b で終わる音形はない。

<sup>15</sup> Василевич (1958) エヴェンキ語の方言を区分する基準の一つ /s/ : /x/ : /ʃ/ の音対応を挙げて

述べる/x/と/s/が合流(merge)を起こしているとは思えない。例えば次のような[i]の前という環境において下のような語例が挙げられる。

/s/: [ɛ] ~ [sʲ] ~ [x]      52. [oeikta] “星”      50. [sʲigun] “太陽”

/x/: [x]      110. [so:xi:mi] “驚く”

このとき、“星”に [oxikta] という音形も許容されるとしても、“驚く”に\*[so:ɛi:mi] は許容されない。従って、ここでは/s/([s] ~ [sʲ] ~ [ɛ] ~ [x])と/x/を、別の音素と見做す。

後部歯茎音: /tɕ/, /dʒ/

〈語頭・u:の前〉

/tɕ/:      36. [tɕu:ka] “草”

/dʒ/:      33. [dʒu:] “家”

軟口蓋音: /k/, /g/, /x/

〈母音間・aの前〉

〈ɤの前〉

〈o:の前〉

/k/: [k] ~ [q]      36. [tʃu:ka] “草”      147. [kɤtɤ] “多い”      118. [ako:mi] “作る”

/g/: [g] ~ [ɣ]      51. [be:ga] “月”      18. [bɤgɤ] “葉”      148. [ogo:kun] “少ない”

/x/: [x] ~ [χ]      138. [o:xa] “小さい”

3. [ɔmχɔtɔ], 45. [toyo], 27. [tomqo]の3語において軟口蓋よりも後ろでの調音がなされていることが聞き取れた。これら[χ], [ɣ], [q]は、どれも後舌半狭母音[o]の前後であり、軟口蓋音の異音としてとらえるのが妥当である。

---

いるが、/i/の前で起こる口蓋化とは別である。例を挙げれば次のようなものである。

	南	北	東
「知る」	sāmi~jāmi	xāmi	sāmi
「女」	asī,~aʃī	axī	axī
「目」	āsa~āʃa	āxa	āxa

### 2.2.1.2 共鳴音

鼻音： /m/, /n/, /ɲ/, /ŋ/

〈a の前〉

/m/: 150. [baɣdama] “白い”

/n/: 71. [nadan] “7”

/ɲ/: 10. [ɯɲakan] “指”

/ŋ/: 7. [amɲa] “口”

流音： /l/, /r/

〈o-o の間〉

〈ə の前〉

〈an の前〉

/l/: 43. [dʒoːlo] “石”

15. [ɯllə] “肉”

67. [ilan] “3”

/r/: 141. [goro] “遠い”

101. [xəɾə] “下” 41. [ɯɾa] “山”

20. [jumuːran] “油”

半母音： /j/

〈語頭〉

〈母音間〉

/j/: 128. [juːmi] “出る”

154. [aja] “よい”、86. [bəje] “男、人”



以上より、エヴェンキ語東方言の子音音韻は表8<sup>16</sup>のようになると思う。

	Labial	Alveolar	Palatal	Velar
Plosive	(p,) b	t, d		k, g
Affricate		tc, dz		
Fricative	v	s		x
Nasal	m	n	ɲ	ŋ
Liquid		r, l		
Semivowel			j	

表8 エヴェンキ語東方言の子音一覧

## 2.2.2 音節と子音の同化

エヴェンキ語の音節構造は比較的単純である。語頭において子音連続が見られないこと、語末には子音が1つだけは立てること、語中において子音の連続は2つまで可能ということ

<sup>16</sup> Василевич (1940) による子音一覧を挙げておく。一覧には( )内に示された異音を多く紹介しているが、本論文で確認したエヴェンキ語東方言の子音と比べると、音素の/p/を認めないこと以外には大きな違いはない。

			両唇	歯	硬口蓋	軟口蓋	前喉頭
騒	閉鎖	有声	b	d	(d)	g	
		無声	p	t	(t)	k	
	破擦	有声		(ʒ)	ʒʲ		
		無声		tʃ	(tʃ)		
	摩擦	有声		(ʒ)		(ɣ)	
		無声		s (ʃ)		x	(h)
鳴	側面			l	(l)		
	ふるえ			r			
	鼻音		m	n	nʲ	ŋ	
	共鳴音		w		j		

考え合わせると、音節構造は次のように表すことができる。

(C)V(V)(C) : 但し VV は長母音とする

音節末に立ちうる音は、表9に挙げるように/b<sup>17</sup>, v, t, k, g, s, m, n, ŋ, l, r, j/である。

一つの形態素である語中における子音連続の種類は、方言ごとの差がある。その違いについては、シベリアのエヴェンキ語と中国のエヴェンキ語の関係を考察する時(4.2.2.2)に触れるので、ここでは形態素境界で生じる音法則について考察する。

		名詞	動詞
-V#		<i>ju</i> “チュム、家” <i>agi</i> “森”	<i>sa-</i> ‘知っている’ <i>əmə-</i> ‘来る’
-C#	-g/v/j#	<i>jav</i> “舟” <i>gag</i> “白鳥”	<i>av-</i> ‘洗う’ <i>ag-</i> ‘接岸する’ <i>aj-</i> ‘救う’
	-l/r#	<i>dil</i> “頭” <i>bər</i> “弓”	<i>il-</i> “立つ、止まる” <i>ugir-</i> “上げる”
	-m/ŋ#	<i>laŋ</i> “罨”	<i>um-</i> “飲む” <i>uŋ-</i> “送る”
	-b/t/k/s#	<i>amut</i> “湖”	<i>is-</i> “着く” <i>kik-</i> “噛む” <i>jəb-</i> “食べる” <i>tət-</i> “着る”
	-n#	<i>oron</i> “トナカイ”	<i>gun-</i> “言う”

表9 語幹末音の種類とその名詞・動詞の例

<sup>17</sup> /b/は、語末や形態素末では[p]として実現すると考える。

語の境界に生じる子音連続は、生産的に生じうる、いわば共時的な音変化の法則があてはまる場面といえる。それらは同化 (assimilation) として捉えることができる。以下にエヴェンキ語にみられる同化の種類をまとめておく。

まず名詞の活用に観察される、隣接する子音間の音変化を見てみる。表10に挙げた例は、名詞の格活用の一部である。

語幹のタイプ  格	語幹末音 (単数形)					複数形  -l, -r
	母音	子音				
		<i>k,s,t,b</i>	<i>m, ŋ</i>	他	<i>n</i>	
主格	“木” mo	“ツンドラ” dət	“罨” laŋ	“島” bur	“トナカイ” oron	“木々” mol
対格 -vA	mo <u>va</u>	dətvə	laŋ <u>mə</u>	burvə	oron <u>ma</u>	molva
不定対格 -jA	mo <u>ja</u>	dətvə	laŋ <u>jə</u>	burjə	oron <u>a</u>	mo <u>la</u>
与格 -du	mo <u>du</u>	dətv <u>u</u>	laŋ <u>du</u>	burdu	orond <u>u</u>	mol <u>du</u>
方向格 -t(i)ki	mo <u>tki</u>	dətv <u>iki</u>	laŋ <u>tiki</u>	bur <u>tiki</u>	oron <u>tiki</u>	mol <u>tiki</u>
方向場所格 -(i)kla	mo <u>kla</u>	dətv <u>iklə</u>	laŋ <u>ikla</u>	bur <u>ikla</u>	oron <u>ikla</u>	mol <u>ikla</u>
離格 -git	mo <u>git</u>	dətv <u>kit</u>	laŋ <u>ŋit</u>	bur <u>git</u>	oron <u>ŋit</u>	mol <u>git</u>
道具格 -t (~ -ji)	mo <u>t</u>	dətv <u>it</u>	laŋ <u>it</u>	bur <u>it</u>	oron <u>ji</u>	mol <u>ji</u>

表10 語幹末音別に並べた名詞曲用の例 (Лебедева и др. 1985; 59)

ここでまず指摘できるのは、有声・無声の同化と、鼻音性の同化である。また、これらは順行同化として現れている。

例えば与格 -du と離格 -git は、有声閉鎖音で始まる接辞と見ることができるが、無声子音で終わる語の後に来ると無声化する。一方、方向格 -tiki (~ -tki) は無声音で始まる接辞であるが、有声子音 (主に共鳴音) の後にきても有声化しない。これを、規則化すると(1)のように書くことができる。

(1) 無声の順行同化

$$\begin{array}{ccc} C & > & C \quad / \quad C \quad \_ \\ [+voice] & & [-voice] \quad [-voice] \end{array}$$

また、対格 *-va* や離格 *-git* にあるように、有声閉鎖音 /v/, /g/ で始まる接辞は、鼻音性の音で終わる子音の後で、調音点は変わらずに鼻音性において順行同化する。一方、与格の *-du* のように、有声閉鎖音であっても /d/ は鼻音化しない。これを、規則化すると(2)のように書くことができる。

(2) 鼻音性の順行同化

$$\begin{array}{ccc} g & > & \eta \\ v & & m \quad / \quad C \_ \end{array}$$

一方、不定対格の *-ja* をみると、語末が *-n* の名詞のあと、そして複数接辞 *-l/-r* と接する時に、*-j* が脱落していることが分かる。さらにデータを加えて、語末が *-n* の語と複数接辞 *-l/-r* にかかわる音変化を挙げる。表11は動詞の過去形の活用である。また、表12は名詞の所有人称活用である。表10の名詞の活用一覧と同じく、語幹末子音別に例を並べてある。

語幹 人称		語幹末音				
		母音	子音			
			他	-l	-m, -ŋ	-n
		sa- “知る”	tət- “着る”	il- “立つ”	um- “飲む”	gun- “言う”
単数	1 <i>-(i)m</i>	sam	tətim	ilim	umim	gunim
	2 <i>-nni</i>	sanni	tətinni	ilinni	uminni	guninni
	3 <i>-ra-n</i>	sarən	təttən	illan	umnan	gunən
複数	1 incl. <i>-ra-p</i>	sarəp	təttəp	illap	umnap	gunəp
	1 exc. <i>-ra-v</i>	sarəv	təttəv	illav	umnav	gunəv
	2 <i>-ra-s</i>	sarəs	təttəs	illas	umnas	gunəs
	3 <i>-ra- φ</i>	sarə	təttə	illa	umna	gunə

表11 語幹末音別に並べた動詞の過去形(接辞 *-ra-*)の人称活用の例(Лебедева и др. 1985; 133)

語幹 人称		語幹末音 : 単数			: 複数	
		母音	子音	-n	-r	-l
		ju “家”	bər “弓”	oron “トナカイ”	oro-r	ju-l
単数	1 <i>-(i)v</i>	juv	bəriv	oronmi	ororvi	julvi
	2 <i>-(i)s</i>	jus	bəris	oronni	ororri	julli
	3 <i>-(i)n</i>	jun	bərin	oronin	ororin	julin
複数	1 incl. <i>-(i)t</i>	jut	bərit	oronti	ororti	julti
	1 excl. <i>-vun</i>	juvun	bərvun	oronmun	ororvun	julvun
	2 <i>-sun</i>	jusun	bərisun (bərsun)	oronnun	ororrun	jullun
	3 <i>-tin</i>	jutin	bərtin	orontin	orortin	jultin

表12 語幹末音別に並べた名詞所有人称活用の例(Лебедева и др. 1985; 69)

これらのデータから、エヴェンキ語では、/n/で終わる語と、複数接辞/l/, /r/で終わる語が、/j/, /r/, /s/で始まる接辞と接するときに特殊な音変化規則がはたらいていると見ることができる。ここで観察される音変化は、次のように①/n/で終わる語、②複数接辞(/r/, /l/)で終わる語、③/r/で始まる接辞の、3つの形態的な音環境に分けてまとめることができる。

#### ① /n/で終わる語

/n/で終わる語は次のように a, b の2種類の音変化をする。表10の不定対格接辞 *-ja*、表11の動詞過去時制接辞 *-ra* (1・2人称単数には出てこない)にあるように、次にくる子音 *-j-*, *-r-* が脱落する。

##### a) 後続する子音が脱落する

$n + r > n$  (一方、 $n + n > nn$ , となり2音分の長さ残る)

$n + j > n$

また、2人称所有接辞単数 *-s*／複数 *-sun* のように、/s/で始まる接辞と隣接する時は、順向完全同化を起こす。

##### b) 順向完全同化する

$n + s > nn$

#### ② 複数接辞/l/, /r/の後

語幹末の音が/l/, /r/である語のときと異なり、複数接辞である/l/, /r/の後に子音で始まる接辞がくるときは、下のように a, b の2種類の音変化が起こる。

まず、不定対格接辞 *-ja* のように、/j/で始まる接辞が後続するとき、/j/は脱落する。

##### a) 後続する子音が脱落する

$r + j > r$

$l + j > l$

2人称所有接辞単数 *-s*／複数 *-sun* のように、*/s/*で始まる接辞と隣接する時は、順向完全同化を起こす。

b) 順向完全同化する

$$r + s > rr$$

$$l + s > ll$$

一方で、複数形の音形式の場合と同じ*/r/*、*/l/*の後という音環境ではあるが、*-r* 語幹および *-l* 語幹の名詞の場合は、挿入母音の*/i/*が入ることで子音が隣接せず同化を避けている。この挿入母音は他の子音語幹の名詞の場合にも見られる、形態音韻論規則である(3.1.4)。

$$2 \text{ 人称単数} \quad -C, r, l + s > -C, r, l-(i)-s$$

$$2 \text{ 人称複数} \quad -C, r, l + sun > -C, r, l-(i)-sun$$

③ */r/*で始まる接辞

表11の動詞過去時制接辞 *-ra* (1・2人称単数には出てこない)にあるように*/r/*で始まる接辞は、①-a)で述べた音変化以外にも、次のように先行する子音と同化をおこす。

a) */r/*の先行子音との同化

$$l + r > ll$$

$$k, s, t, p + r > k, s, t, p - t$$

$$m, \eta + r > m, \eta - n$$

以上、本章では先行研究をもとに、エヴェンキ語の音韻体系、そして主に母音調和と隣接する子音の同化規則についてまとめた。

なお、次の第3章以下で挙げるエヴェンキ語の例は、筆者自身の得たデータ以外にも、先行

研究や発行されているさまざまなテキストを多く使用し、必要な場合は元の表記をローマ字転写にて引用している。本章でまとめた体系と異なる表記もあるが、それは元データをそのまま引用しているためである。



## 第三章

### エヴェンキ語形態統語論

#### 3.1 形態素とその構造

##### 3.1.1 語形変化と品詞

エヴェンキ語の語類は、形態的な特徴から、格接辞や所有人称接辞などがつきうる**名詞類**と、文の述部となる**動詞類**、そして**不変化詞類**の3つに大きく分けられる。

名詞類には、**名詞**、**形容詞**、**代名詞**、**指示詞**、**数詞**が含まれる。

動詞類には、**動詞**、**コピュラ**、**否定動詞**が含まれる。

不変化詞類には、**副詞**、**接続詞**、**前倚辞**、**感嘆詞**などが含まれる。

エヴェンキ語においては、品詞の境が明確に引けないものが少なくない。とくに、派生接辞等のつかない非派生形(語根語)の名詞類は、形容詞、副詞にもなるものが多い。例えば次の例の「長い」という語は格接辞が付くなど単独で使用が可能であり、名詞と見做すことが出来るが、派生などを経ずにそのままの形式で統語的に形容詞や副詞としての使用も可能である。

例) *ɲonim* “[名詞]長さ、[形容詞]長い、[副詞]長く”

Василевич(1940: 42)では、このようないくつかの品詞にまたがって使われる語類を次のような6つのグループに分けて分析している。

- ① 名詞・形容詞
- ② 名詞・形容詞・動詞
- ③ 名詞・動詞
- ④ 名詞・代名詞: *kəṭə, upkat, adikan* など量を表す語彙
- ⑤ 指示代名詞: *ər, tar* ⇒ 名詞、形容詞、格接辞を伴い場所・時間の副詞にもなる
- ⑥ その他特殊な語彙: *ačīn* (不存在を表す語で名詞、形容詞、動詞), *so* (強いこと意味し、名詞、形容詞、副詞), *e-* (疑問を表し名詞、形容詞、動詞),

多くの品詞にまたがる語類にはなんらかの傾向がある。詳細については未調査であるが、表1のような語類の重なりを観察すると、名詞と動詞が基本的な語類であると見ることが出来る。また、形容詞であるものは、たいていの場合は副詞にもなる。しかし、一方で、動詞であり副詞であるものは見当たらず、同様に動詞と形容詞が同じ語根になる例もなさそうである。形容詞が派生されたもので、名詞的には使われないものでも、副詞的に振る舞うこともあることも指摘できる。

名詞	形容詞	副詞	動詞
←→			○
←→	←→		○
←→	←→	←→	○
	←→	←→	○
		←→	?
	←→	←→	×

表1 複数の品詞にまたがる語類の傾向

表1の分布を見ると、語類の間に階層があるように見える。つまり、名詞＞形容詞＞副詞、という名詞類で代表される階層で、動詞はここには入らないが、動詞＝名詞のように名詞を介して同語根になりうる。エヴェンキ語においてもっとも基本的な語類は、名詞と動詞であると解する

ことが出来る。

エヴェンキ語において派生や屈折、曲用といった形態的な変化にしたがっていくつかの語類にまたがることのできる語は語根語である。一方でなんらかの派生接辞がつくことでつくられる派生語は、語類が複数にまたがることはあまりない。次の例は語根語である *goro*「遠い(こと)」に対して、例えば派生接辞-*pču* がつくとはそれは原則として形容詞としてしか使われない。

例) *goro* > *goro-du* 遠くに(格接辞がつく→名詞的活用)

*goropču* 遠い(形容詞)

*goroki, gorot* 遠く(副詞)

*gorol-* 遠くなる(動詞)

### 3.1.2 名詞類の形態的構造

名詞類の語がとる構造は(1)のとおりである。例として、*asikarvavun*“私たちの娘(女の子)を”という語の構造をその下に挙げる。

#### (1) 名詞類の形態的構造

[[[[[名詞語幹(+派生接辞)] 複数接辞] 格接辞] 所有・再帰人称接辞]

例)	<i>asi</i>	<i>-ka</i>	<i>-r</i>	<i>-va</i>	<i>-vun</i>
	女	DIM	PL	ACCD	1PL.EXC.POSS

名詞の語幹のすぐ後ろに来るものは、複数形語尾:-(*i*)*l* である。*-n* で終わる名詞については、複数形は語末子音-*n* が-*r* になる音交替によって作られる。また、一部の親族名称には特別の複数形がある。(2)はそれぞれの複数形の作り方の例である。

(2)	単数形		複数形
生産的	<i>esa</i>	“目”	<i>esa-l</i>
- <i>n</i> 語幹名詞	<i>oron</i>	“トナカイ”	<i>oro-r</i>

親族名詞      amin      “父”      amtil

その次に来うる形態素は格接辞である。格接辞は、動詞類述語で表される行為との関係を示す文法格接辞、場所や状況を表す状況副詞的な関係を示す副詞的格接辞、そして格としてはまだ緩く、後置詞とするには独立性が弱い格接辞を後置詞的格接辞として、3種類に分類する。

文法格接辞		副詞的格接辞		後置詞的格接辞	
主格	-φ	与位格	-dū	共同格	-nun
対格	-vA	具格	-t	所持格	-či
不定対格	-(j)A	奪格	-duk	様格	-gačin
		場所格	-(du)lA		
		方向格	-t(i)kī		
		離格	-git		
		沿格	-(du)lī		
		方向場所格	-(i)klA		
		方向沿格	-(i)klī		

表2 名詞につく接辞の分類

特に後置詞的格接辞は、揺れが大きい。他の格接辞はいわゆる一致といわれる修飾関係をしめす語結合で、修飾部と主要部の両方につくが、後置詞的格接辞は主要部にのみつき、修飾部にはついたりつかなかったりする。また、後置詞的格接辞は名詞を修飾する用法もあり、このとき主要部につく格・数の接辞に一致することがある。つまりその際、後置詞的格接辞の後ろに、さらに複数接辞や文法格あるいは副詞的格接辞が後続することがあるのである。

このように、後置詞的格接辞は他の格接辞とは振る舞いが異なり、区別すべきであると考えるが、実際のエヴェンキ語教科書などで扱われる規範とされる文法においては、他の格接辞と同等に扱われていることが多い。

## 不定格について

基本的な文法格は、主格と対格である。この対格と区別する格として不定対格がある。不定格は主に、不定的な対象が目的語として現れる時に使用される格接辞(あるいは部分格的使用)だが、不存在文の主語としても出てくる(欠格的使用)。ツングース諸語のいわゆる“指定格”との関係も指摘されるが、実際の使用を観察するとロシア語の生格と似た現れ方をする能格的な特徴と見ることも出来る。詳しくは、第4章でロシア語との言語接触について考察するとき(4.4)に触れる。下に、不定対格の典型的な使用例を挙げておく。

(3) Mōkā-r-ə      gənnə-kəl,                      taduk      mōkā-r-və      ədu      nā-kəl.

枝-PL-ACCIN   持ってくる-IMP.PRS.2SG   そして   枝-PL-ACCD   ここ   置く-IMP.PRS.2SG

“枝を持って来い、そして(その)枝をここに置け”(Константинова 1964: 49)

(4) Əma-*ja*-val              jəptilə-*jə*              sindu              bi-sin ?

何の-ACCIN-PCLE   食べ物-ACCIN   2SG.DAT   COP-PRS.3SG

“何か食べ物を君は持ってるかい?” (No.4 p.11 l.9)<sup>18</sup>

(5) Alat-čən,              alat-čən,              Xomōti-*jə*-kə              ačīn.

待つ-PST.3SG   待つ-PST.3SG   熊-ACCIN-PCLE   ない

“(狼は)待って、待って、熊は全然現れない” (No.1 p.4 l.7)

しかしこの不定対格は、その使用が義務的な環境はなく、自由な発話ではほとんど出てこない傾向にあるといえる。例えば次の例文(6)は否定文であり、さらには否定名詞 *āčīn* の前では不定対格形が出てくることが予想されるのだが、実際 *adin* “夫”という語は語尾のなにもない主格が現れている。

<sup>18</sup> 例文(4)(5)は *Бугады орол -Эвенкийские народные сказки-* (Бурятское книжное издательство 2001, Улан-удэ) より。

(6) Mindu      adin      āčin.

1SG.DAT    夫      ない

“私には夫がいない。”

名詞類の構造の最も最後に来うる形態素は、人称所有接辞と再帰所有接辞である: 表3。1 人称複数形には、包括形 (*inc*) と排除形 (*exc*) の区別がなされる。これら2種類の所有接辞は共起することはない。

名詞語幹と接するときに音変化が起こり、音節構造も変わることがある(名詞所有曲用の例および音変化音節構造については2.2.2を参照されたい)。

	単数	複数
1	-v	inc. -t, exc. -vun
2	-s	-sun
3	-n	-tin
再帰	-vi	-var

表3      人称所有・再帰所有接辞

再帰所有接辞は、対格接辞と共起することがない。名詞句の形態素の構造の規則からいえば、(7a)のように *-va-var* という連続になるはずであるが、実際には対格接辞のほうが落ちてしまう(7b)。

(7) “自分たちの家を”    a. \**jū-va-var*

   b. *jū-var*

## 代名詞

代名詞類には、人称代名詞、再帰代名詞、指示代名詞、疑問代名詞がある。不定代名詞と、否定代名詞は、疑問代名詞に助詞がついたものがその役割を果たす。

(8) *ekun* “何” > *ekun-mal* “何か”, *ekun-da* “何も(～ない)”

人称代名詞は表4、指示代名詞は表5のとおりである。「主格の形／斜格の語幹」をまとめている。1人称複数形には、包括形と排除形の区別がなされるのは、所有接辞のときと同じである。また、3人称の代名詞は、格接辞をはさむ接周辞(*circumfix*)のような形式をもつことが特徴であるが、語末に来る形態素は3人称の所有人称接辞と同じである。なお、不定対格形はないが、対格の形式は名詞の不定対格形と同じである。

	単数	複数
1	<i>bi/min-</i>	<i>inc. bu/mun-, exc. mit/min-</i>
2	<i>si/sin-</i>	<i>su/sun-</i>
3	<i>nuṇan/nuṇan- -n</i>	<i>nuṇartin/nuṇar- -tin</i>

表4 人称代名詞の主格/斜格語幹

近称	遠称
<i>ər</i>	<i>tar</i>

表5 指示代名詞

### 3.1.3 動詞類の形態的構造

動詞は、文を終結する動詞類述語を形成するが、動詞類述語にはつぎの(9)のように、3つの種類があると考ええる。

(9) a. 動詞述語

b. 名詞類述語: 名詞類(主格形) + 繫辞動詞 *bi-*

c. 否定動詞述語: 否定動詞 *a-* + 本動詞類の否定分詞形 *-ra*

動詞類は、文末に立ちうる**定動詞形**と、文中に表れ、補文や関係節、副詞節をつくるときの**非定動詞形**とに分けられる。

### 3.1.3.1 定動詞形の語構造

定動詞形の形態素の構成は次の(10)のようにまとめられる。否定動詞の場合、通常否定動詞には[法・時制—人称語尾]だけがつき、[ヴォイス—相]は本動詞につく。

#### (10) 定動詞形の形態的構造

肯定形: [[[[[動詞語幹(+派生接辞)] ヴォイス] 相] 法・時制] 人称語尾]

否定形: [[[[[否定動詞 *a-*] 法・時制] 人称語尾] + [[[本動詞語幹(+派生接辞)] ヴォイス] 相]]

例えば、それぞれの範疇に属する接辞を並べると表6のようになる。

動詞語幹	ヴォイス	相	法・時制	人称語尾
非派生形	受動			
<i>jəv-</i>	<i>-v-</i>	開始	現在	1人称単数
“食べる”	使役	<i>-l-</i>	<i>-rA-</i>	<i>-m / -v</i>
派生形	<i>-vkan-</i>	未完了	過去	3人称複数
<i>mu-lə-</i>	受動結果状態	<i>-jA-</i>	<i>-čA-</i>	<i>- / -tin</i>
“水を汲む” < <i>mu</i> “水”	<i>-čA-</i>			

表6 動詞形態素構造の例

ここから、例えば次のような組み合わせで動詞句が形成される。

⇒ *jəv-u<sup>19</sup>-v-jə-rə-φ* “彼らは食べられている”

食べる-(挿入母音)-PASS-IMPF-PRS-3PL

<sup>19</sup> 音節構造の制約から挿入された母音(3.1.4)。



*mu-lə-vkən-čə-v* “私は(誰かを)水汲みに行かせた”

水-動詞化派生接辞-使役-PST-1SG

### 3.1.3.2 非定動詞形の構造

動詞類の非動詞形には、名詞類への派生形である形動詞形と、副詞的な意味をになう副動詞形の2つがある。形動詞語尾と副動詞語尾は、ヴォイスと相までが含まれる動詞語幹につくことが出来る。

形動詞形語尾の代表的な例を(11)に挙げる。形動詞形は、動詞が名詞類的にふるまう形式になるが、接辞により使用される用法の頻度が異なる。例えば *-na* で形成される形動詞形は「～したこと」という動名詞的な意味合いで使われることが多いが、*-ri* は「～している(・・・)」というように名詞修飾、あるいは補文として現われることが多い、などである。名詞類述語的というのは、繫辞動詞 *bi-* とともに述部に出てくることが多いもの、法・時制接辞的というのは人称語尾がつけば定動詞形として出てくることがあるものを指す。但し、これは使用される傾向の差であり、どれか一つの使用に限定されるというようなことはない。

#### (11) 動名詞・形動詞形語尾の代表例

より動名詞的 *-na*(完了行為)

より形動詞的 *-ri*(現在), *-čə*(過去)

より名詞類述語的 *-vki*(習慣), *-vka*(義務)

より法・時制接辞的 *-jəŋə*(未来), *-ŋki*(過去)

副動詞形語尾と種類は、先行研究より引用した表7を挙げる。主文の主語と、副動詞形に導かれる従属文の主語の異同により、形態的につきうる人称語尾が異なる。同主語副動詞は従属節の主語の複数性を示す任意的な複数マーカーを取りうるだけで、人称語尾は取れない。異主語副動詞は義務的に人称語尾を取る。他の副動詞は、異主語の時は人称語尾を、或いは同主語の時は再帰所有語尾を義務的に取る。副動詞語尾は方言差が激しく、地方によってはまったく現れないもの、意味がずれるものがあるなどの記述がある(Василевич 1958:

717-9, 721 など)。

主文と従属文の主語			同主語	同或は異主語	異主語
語末にともなう主語との一致接辞		おおよその意味	(+ 数の接辞)	+ 再帰或は人称語尾	+ 人称語尾
Contextual	simultaneity	～して、しながら	<i>-ǰAnA</i>		
	anteriority	～すると、～したら	<i>-mi</i>		<i>-rAk</i>
	posteriority	～する前に、～するまで		<i>-dAlA</i>	
Contact	anteriority	～して、～するや	<i>-nA</i>	<i>-ktAvA</i>	
Exact	simultaneity	～すると同時に	<i>-mnAk, -mnen</i>	<i>-ŋAsi</i>	<i>-ǰAnmA</i>
Anteriority	proper	～してその後	<i>-ksA, -kA(n)im</i>	<i>-čAlA</i>	
Purposive		～するために		<i>-dA, -vunA</i>	
Result		～するまで		<i>-knAn</i>	

表7 Nedjalkov (1997: 271)から副動词语尾の分類と一覧

### 3.1.4 語幹異形態と挿入母音の関係

名詞や動詞の派生や、語形変化を考えるとときに、音節構造の制限から音韻形態論的に避けなければならないことがある。形態境界において子音が3つ連続する場合がそれである。子音2つが語末・語幹末にたつことはないため、このような状況が生まれるのは、接辞が2つの子音で始まる場合である: (12)。

(12) 子音が3つ連続する可能性

[...C]<sub>語幹</sub> + [CC...]<sub>接辞</sub>

このとき、エヴェンキ語の音節構造から語中における3つ以上の子音連続が許されないため (13)、なんらかの回避が求められることになる。いずれかの子音が削除されることはないことよ

り、結果的に母音が挿入されることになる。したがって、現れうる回避方法は2種類ある。語と接辞の間に母音が挿入される場合(14a)と、接辞の二子音連続の間に母音が挿入される場合である(14b)。後者は、いわば、二種の異形態をもつ接辞と言える。

(13) ...C + -CC... > \*...CCC...

(14) a. ...C + -CC... > ...CV.CC...

b. ...C + -CC... > ...C.CVC...

一方、子音で終わる語に、一子音からなる接辞がつく場合にも、語末に子音が2つ連続することになり、音節構造の規範に違反する。このときも、(15)のように母音が挿入される方法は2種類考えられる。語と接辞の間に母音が挿入されるか、あるいは語末に母音が加えられるかの2つである。

(15) a. ...C + -C > ...C-V-C

b. ...C + -C > ...C-CV

(14a)や(15a)のような回避方法を母音挿入式、(14b)や(15b)のような回避方法を異形態式と呼ぶことにする。

一子音のみからなる接辞、および二子音連続で始まる接辞は、多くの例があげられるが、例えば次の(16)のようなものがある。

(16) A. 一子音からのみなる接辞の例

-*l* (複数接辞), -*s* (2人称単数接辞), -*v* (受動態接辞), -*t* (道具格接辞) など

B. 二子音で始まる接辞の例

-*vki* (習慣形動詞接辞), -*ŋki* (未来形動詞接辞)

-*tmAr* (形容詞強調接辞), -*tiki* (方向格接辞) など

これら接辞は、A, B それぞれ、音的構造からいえば同じ条件である。つまり、例えば B のように子音が語中で3つ以上連続するのであれば、同じ回避方法をとってもおかしくない。しかし実際は、接辞によって回避方法が異なる。接辞により、次のどのタイプに属するかが決まっているわけである。

① どちらかの決まった回避方法をもつ接辞

A. 母音挿入式をとる接辞 例) *-l*(複数接辞), *-ŋki*(未来形動詞接辞)

jav “舟” + *-l* > javil “舟(pl.)”

B. 異形態式をとる接辞 例) *-tki/tiki*(方向格接辞), *-tmar/-timar*(形容詞強調接辞)

aja “よい” + *-tmar* > ajatmar “よりよい”

ŋonim “長い” + *-timar* > ŋonimtimar “より長い”

② 音的環境によって、回避方法を使い分ける接辞

例) *-vkan* ~ *-mukan*(習慣形動詞接辞), *-t*(道具格接辞)

il- “立つ” + *-vkan* > ilivkan- “立たせる”

iltən- “通る” + *-vkan* > iltənmukan- “通らせる”

ber “弓” + *-t* > berit “弓で”

oron “トナカイ” + *-t* > oronji “トナカイで”

①のタイプをとる接辞は、音的環境で予測することが出来る。しかし②のタイプはそれぞれ接辞により条件が異なる。例えば、上で挙げた例の接辞 *-vkan* ~ *-mukan*(習慣形動詞接辞)であれば、動詞語幹の鼻音にだけ異形態式がつく。また接辞 *-t*(道具格接辞)は、*-n* 語幹名詞と複数形の接辞の後にだけ異形態式が出てくる。

数としては、①A タイプに属する接辞が多く、もっとも生産的規則的なルールと見ることが出

来る。それに対して、①B や②のタイプは生産的とはいえない<sup>20</sup>。

## 3.2 形態統語論

### 3.2.1 語の結合方法の種類

文の要素は、いくつかの要素が相互に連結することで成立している。文要素はお互いに関係が明確になるように、形態的にあらかじめ決まった結合手段によって結びついている。

エヴェンキ語においては、語内レベルとそれ以上の語外レベルで大きく二分される。

語内レベルとは、一つの独立形態素としての語から、新たに独立した一つの語を形成する場合を指す。このような語形成は、エヴェンキ語には**派生**によるものしかない。つまり、二つ以上の独立形態素が結合して、新たに一つの独立した語となること(一般的に複合と呼ばれる方法)が、観察されないのである。

語外レベル、つまり二つ以上の語(独立形態素)が結びつく時は、補部(通常、主要部となる語の前におかれる)が名詞の場合は**相応**<sup>21</sup>が、そして形容詞の場合は**一致**が、その結合のしるしとなる。

形態的に不変化詞に相当する副詞は、何の結合のしるしも示さない。いわばそれだけで修飾する形容詞や動詞との関係をあらわすわけだが、上で見たような語結合とは異なるため、**連接**という名称で呼ぶ。

一方、動詞には主語の人称・数に合わせて人称語尾がつく。主語に相当する語は、主格としてなんらかの形式をも示すことはないため(ゼロ接辞)、(17)に挙げた例のようにその構造は相応と並行的に見ることが出来る。しかし述語の活用語尾としての人称接辞は、文レベルの主語と動詞の関係を示すものであり、語結合の方法と区別するうえで**反映**と呼ぶ。つまり、人称接辞には主に名詞につき所有関係をしめすもの(人称所有接辞)と、定動詞形の活用形につ

<sup>20</sup> おそらくこのようなタイプの接辞は、歴史的になんらかの音的、形態的变化をしたために、一見すると不規則形のように見えると思われる。

<sup>21</sup> 本文で用いる形態論的語結合の用語は、ロシア言語学において一般的に使用される用語の訳語として用いている。相応 *отражение*、一致 *согласование*、連接 *примыкание*、反映 *соответствие*。単に行為者との関係を動詞に示す反映に対して、2つの語の間の何らかの従属関係を示す相応、一致、連接は、従属 *подчинение* としてまとめられる。

き主語を表すもの(動詞人称接辞)がある。

語レベル	派生	語形成の手段
	一致	修飾関係
句レベル	相応	所有構造-所有者人称・数・再帰
	連接	副詞的成分
文レベル	反映	動詞語尾-主語人称・数

表8 語の結合方法とそれが表す関係

- (17) a. 所有人称形 P'et'a pəktirəbun-(mə)-*n* “ペーチャの銃(を)”  
 ペーチャ 銃-(ACCD)-3SG.POSS
- b. 形動詞の主語標示 P'et'a pəktiru-čə-du-*n* “ペーチャが撃ったときに”  
 ペーチャ 撃つ-PART.PST-DAT-3SG.POSS
- c. 副動詞の主語標示 P'et'a pəktiru-rəki-*n* “ペーチャが撃ったら”  
 ペーチャ 撃つ-CONV-3SG
- d. 定動詞形の主語標示 P'et'a pəktiru-čə-*n* “ペーチャが撃った”  
 ペーチャ 撃つ-PST-3SG

動詞人称接辞には4つのタイプがある。これらの接辞は、付きうる形態に決まりがある:表9。

所有型は、名詞につく所有人称接辞と同じである。名詞類に準ずる非定動詞形につくのはもちろん、一部の定動詞形にもつく。行為者型は、定動詞形の語尾としてのみ使われる。混合型は、人称が単数のときは所有型、複数のときは行為者型となる。命令形にみられる人称語尾は特殊な接辞となり、特殊型としている。

<i>Type</i>	I		II		III		IV
	所有型		行為者型		混合型		特殊型
	sg	pl	sg	pl	sg	pl	
語尾の形式	1	-v inc.- <i>t</i>	1	- <i>m</i> - <i>p</i>	1	- <i>m</i> - <i>t</i>	
		exc.- <i>vun</i>		- <i>v</i>		- <i>vun</i>	(略)
	2	- <i>s</i> - <i>sun</i>	2	- <i>nni</i> - <i>s</i>	2	- <i>nni</i> - <i>sun</i>	
	3	- <i>n</i> - <i>tin</i>	3	- <i>n</i> -	3	- <i>n</i> -	
使用される接辞 例)		- <i>čA</i> -過去形		- <i>ǰA</i> -現在形		- <i>mačín</i> -義務法	命令形
		- <i>ŋki</i> -過去形		- $\phi$ -完了		- <i>rgu</i> -蓋然法	
		- <i>mčA</i> -条件法		- <i>ǰAl</i> -未来形			

表9 人称接辞のタイプと使われる環境

### 3.2.1.1 派生

派生は語結合の方法ではなく、語形成の方法であるが、ここで触れておきたい。というのも、エヴェンキ語においては語形成方法の唯一の方法であるためである。2つ以上の独立形態素が結合して語形成をなすことはなく、1語として形成されるものは派生によるものだけである。2語以上が結合する場合は、3.2.1.2以下で紹介する結合方法しかなく、単に並べるだけであらたに1語になること(いわゆる複合)はない。

エヴェンキ語には派生接辞が大変多い。生産的なもの、非生産的なものがある程度分類されているが、その境目は明確でないことも多い。

#### (18) *sulaki-ksa* “キツネの毛皮”

*fox-suff.*

例えば(18)では、派生接辞-*ksa* は、動物などの名称につき、その毛皮を表す語を派生する接辞である。語彙としては *sulaki* “キツネ”が単独でも用いられる独立形態素であり、派生語と

みることができる。*inŋakta* “毛皮”という語彙はあるが、他の動物を表す語と組み合わせて“(動物名)の毛皮”のように使用されることはない。

### 3.2.1.2 連接

連接とは、単に並置させるだけで、形態的な語結合を示す標識はなにもない方法をさす。形容詞や動詞を修飾する副詞や、人称語尾をなにも取らない副動詞形などがこれに当たる。

- (19) a. *so hægdi bəjə* “とても大きい人”  
           *very big man*
- b. *so hægdi-və bəjə-və* “とても大きい人を”  
           *very big-ACCD man-ACCD*

*so* は副詞として用いられるときは“とても”という程度の大きさを表すが、それが修飾する語の前に置かれる。そして、修飾している語が語形変化しても、それ自体はなんら形態的变化はおきない。

### 3.2.1.3 相応

相応とは、主要部に標示される語結合方法である。主に、所有形構造に観察される。

- (20) a. *oron ijə-li-n* “トナカイ(単)の角”  
           reindeer.SG horn-PL-3SG.POSS  
           └──────────┐↑
- b. *oro-r ijə-l-tin* “トナカイ(複)の角”  
           reindeer-PL horn-PL-3PL.POSS  
           └──────────┐↑



語順は通常、所有者である名詞が被所有物を表す名詞の直前に置かれる。稀に後置されることもあるが、2つの語が離れる(間に別の語が入るなど)ことはあまりない。1人称や2人称の場合は、通常所有者の代名詞は省略される。

エヴェンキ語にはいわゆる属格がないと解釈されており、所有構造を表すときはこの構造をつかう。前置される所有者である名詞には主格形が用いられる(なお5.2参照)。

### 3.2.1.4 一致

一致とは、主要部につく数・格の語尾が、主要部を修飾する語にもつくことで、語結合を示す方法である。

- (21) a.   gugda       urə       “高い山(が)”  
           high        mountain  
       b.   gugda-*du*   urə-*du*   “高い山に”  
           high-DAT    mountain-DAT  
       c.   gugda-*l-va*   urə-*l-va*   “”高い山々を  
           high-PL-ACCD   mountain-PL-ACCD

- (22) bi       sindu       aja-*ja*       avun-*a*       bu-*ǰəm*.  
       I.NOM   you.SG.DAT   good-ACCIN   hut-ACCIN   give-FUT.1SG  
       “私はあなたに好い帽子をあげましょう。”

### 3.2.1.5 反映

反映とは、語結合というよりも動詞類述語に現れる、主格主語に対応する人称語尾をさす。動詞類述語が定動詞であるときのみならず、動名詞・形動詞形るとき、副動詞形るときにも現れることが特徴的である。主語は必ずしも明示する必要はない。

主語と動詞語尾の相関を一致と呼ぶこともあるが、本論文では“一致”は前節で説明したように、修飾関係を表すときの語結合方法を指す。

(23) (bi) Moskva-du ηənə-m. “私はモスクワへ行った”



### 3.3 文の拡張(単文と複文)

本論文では、エヴェンキ語の一致が複文の構造の複雑性から生じたものであると論じるため、ここでエヴェンキ語における単文・複文の構造について説明しておく。

#### 3.3.1 単文と複文の構造と種類

文には、必ず動詞類述語が一つ含まれる。動詞類述語が一つであるときは定動詞形になるが、そのときは**単文**である。

動詞類述語が二つ以上あるときに、そのうち一つは必ず定動詞形になるが、他の述語が定動詞形か、非定動詞形かにより文の種類は異なると考える。全ての述語が定動詞形であるときは**並列文**となるが、形動詞形や副動詞形の非定動詞形のときは**複文**となる。

---

#### 述語の数

---

A. 一つ      = 単文

B. 二つ以上    B-1 並列文    = このとき動詞は全て定動詞形

B-2 複文 = 従属文の動詞が ①形動詞形で ①-1 主要部のとき    = 補文構造

①-2 従属部のとき    = 関係節

①-3 名詞活用するとき = 副詞節

②副動詞のとき      = 副詞節

---

(24) 単文 Si tinəvə əmə-čə-s.

2sg.NOM yesterday come-PST-2SG

“あなたが昨日来た。”

(25) 並列文 [Si tinəvə əmə-čə-s], [timatnə ju-la-vi suru-nni].

2sg.NOM yesterday come-PST-2SG tomorrow house-ALL-SG.REFL.POSS go-PRF.2SG

“あなたは昨日来た、そして明日家へ帰る。”

複文は、形動詞が独立した名詞類として扱われると補文構造となり、主要部である他の名詞類を修飾する時は関係節となる。補文として、文中で名詞類として現れる時は、主語との関係は名詞類の所有構造と同じく“反映”の語結合をとる。一方、関係節の時は、名詞を修飾する場合と同じく“一致”の語結合をとる。

補文

(26) [Əni-m əčən sa-rə [si tinəvə əmə-*nə*-və-s]]. (Константинова 1964: 200)

mother-1SG.POSS NEG-PST.3SG know-CONN 2SG.NOM yesterday come-PART-ACCD-2SG.POSS

“私の母はあなたが昨日来たことを知らなかった”

関係節

(27) [Hutə-l-in ičə-rə [əmə-jə-*ri*-və] bəjə-və]. (Колесникова 1966: 47)

son-PL-3SG.POSS look-PERF.3PL come-IMPERF-PART-ACCD man-ACCD

“彼の息子たちは(こっちへ)やって来る男を見た”

(28) [[Haval-ja-ri-la-n] əmə-čə-tin]. (Nedjalkov 1997: 268)

work-IMPERF-PART-ALL-3SG.POSS come-PST-3PL

“彼が働いているところに、彼らはやって来た”

副動詞形で導かれる節は、文の中では接続による副詞的な要素として機能する。副動詞形の形態素についての説明(3.1.3.2)で見たように、主語と一致した人称/再帰所有接辞あるいは複数接辞を伴うことが普通である。例文(29)に出ている副動詞形 *-jənə* は、従属文の主語が主文の主語と同じ時に使われる副動詞形であり、数の接辞がつくが、例文では主語は単数であるためゼロ接辞がついている、と見る事が出来る。

#### 副詞節

(29) [[*Kuṣakan silgin-jənə*] *soŋo-ḵoro-n*]. (Nedjalkov 1997: 272)

child.SG.NOM tremble-CONV cry-IMPERF-3SG

“子供が震えながら泣いている。”

#### 3.3.2 節の主語標示

動詞は、定動詞形(命令形を含む)を含む主文の中で、副動詞(従属文を副詞的に導く)、形動詞(節を名詞的或いは形容詞的に導く)に形を変えて文をつなぐ。

定動詞形に人称接辞が付くことは、多くのモンゴル諸語を除けば、すべてのアルタイ諸語に一般的に見られる。しかし、副動詞形に人称接辞がつくことが出来るという特徴は東シベリアに地理的に特徴的なことであるといえる。この地域的な特徴については、4.3にて扱う。一方、形動詞形が関係節となって名詞に修飾する時に、主語を示す人称接辞がどこに現れるかは、東シベリアのアルタイ諸語の内部においても異なり、いくつかの類型に分けられる。

まず、エヴェンキ語であるが、副動詞形の場合(30)も、形動詞形の場合(31)、(32)も、動詞句に人称接辞として現れる。行為者を反映する人称接辞は、一律に動詞句につく。

(30) *Bi hutə-l-vi suruvu-m əntīl-dulə-v nuḡartin ānḡet-tā-tin.*

1SG 子供-PL-REFL.SG 遣る-NFUT.1SG 両親-ALL-REFL.SG 3PL.NOM 泊まる-CONV-3PL.POSS

“私は子供たちが泊まるように両親のところへ彼らを行かせた。” (Колесникова 1966: 209)

- (31) əni-m      ə-čə-n      sã-rə      si      əmə-nə-və-s.  
 母-1SG.POSS    NEG-PST-3SG    知る-CONNEG    2SG.NOM    来る-PART-ACCD-2SG.POSS

“私の母は君が来たことを知らなかった。” (Nedjalkov 1997: (115))

- (32) Bu      ičə-rə-v      baka-na-l-va-*tin*      oro-r-vo.  
 1PL.EXC    見る-NFUT-1PL.EXC    探す-PART-PL-ACCD-3PL.POSS    トナカイ-PL-ACCD

“私達は彼らが探しているトナカイを見た。” (Nedjalkov 1997: (117b))

次に挙げる例は、エヴェンキ語(33)、ヤクート語(34)、ブリヤート語(35)、トルコ語(36)を対照に、動詞の形動詞形が現れている句を並べている。形動詞語尾は太字斜体、人称接辞は太字斜体に下線を付けて示している。動詞の主語の反映である人称接辞の現れる位置は、言語により異なっている。

- (33) bəyə    va-*na-n*      homoti    (Nedjalkov 1997: (170b))  
 人    殺す-PART-3SG.POSS    熊

“人が殺した熊”

- (34) Uybaan    suruy-*but*    surug-*a*    (Stachowski & Menz 1998: 427)  
 イワン    書く-PART    手紙-3SG.POSS

“イワンが書いた手紙”

- (35) Aldar-ai    bar'-aad    bai-*han*    tülx'üür-*iin'*    (Skribnik 2003: 126)  
 人名-GEN    持つ-CONV    COP-PART    鍵-3SG.POSS

“アルダルが持っていた鍵”

- (36) Ali-'nin    kavga    et-*tiğ-i*      arkadaş (勝田 2001: 142)  
 人名-GEN    けんか    する-PART-3SG.POSS    友人

“アリがけんかした友人”

これら例文の構造を簡略化して書くと次のようになる。(下線を引いた部分は動詞の主語である。また、人称接辞は単純に-3SG で示した。)

- (33)' [ [ 人が 殺した-3SG] 熊 ] (エヴェンキ語)
- (34)' [ [ イワンが 書いた] 手紙-3SG ] (ヤクート語)
- (35)' [ [ アルダルが 持っていた] 鍵-3SG ] (ブリヤート語)
- (36)' [ [ アリが けんかした-3SG ] 友人 ] (トルコ語)

人称接辞の現れている位置は、エヴェンキ語では形動詞形のすぐ後ろである(トルコ語と同じ)。それに対して、ヤクート語とブリヤート語では形動詞形によって修飾されている名詞に付いている<sup>22</sup>。

<sup>22</sup> ここで被修飾名詞に付いている人称接辞が表すものが、行為者(修飾する動詞の主語)であり所有者ではないということは、例文を引用した文献による判断である。また、この点を例文とともに詳細に記述した論文等は、筆者の見る範囲では見付けられなかった。これを確認する為に、母語話者に電話にて次の質問をした。

**質問**: 次の 2 つの phrase はヤクート語、ブリヤート語で何と言いますか(英語とロシア語共に伝える)。

1. a dog which I killed (собака, которую я убил) “私が殺した犬”
2. your dog which I killed (ваша собака, которую я убил) “私が殺したあなたの犬”

**答え**:

ヤクート語

1. min    ölör-büt    it-īm  
1SG    殺す-PART    犬-1SG.POSS
2. min    ölör-büt    it-īm    ehiene  
1SG    殺す-PART    犬-1SG.POSS    2PL.物主所有形

ブリヤート語

1. minii    ala-han    noxoi  
1SG.GEN    殺す-PART    犬
2. minii    ala-han    tanai    noxoi  
1SG.GEN    殺す-PART    2PL.GEN    犬

ヤクート語でははっきりと確認できたと言えるであろう。しかし、ブリヤート語においては任意に被修飾名詞に人称接辞が付く。そのため、上の質問では接辞が付かない例が得られた。念のため次に、文献に挙げられている例から、人称接辞が 1 人称である同じ環境の例を挙げておく。

- (i) xara-**gsa**    basaga-**m**    (Sk:114)  
見る-PART    少女-1SG.POSS  
“私が見ている少女”

ブリヤート語では人称接辞が付く例、付かない例共に見られるが、人称接辞が形動詞形に付く例(エヴェンキ語やトルコ語のように)は見られない。

説を導く形動詞形による名詞の修飾という語結合には、いくつかの関係が重なっている。第一に形動詞形で現れる動詞の行為者である主語と動詞の関係(A)、第二に形動詞形とそれが修飾する名詞との結合関係(B)、そして第三に関係節内の行為者である主語と被修飾語である行為の対象との関係(C)である。これらの関係が、それぞれの言語でそのような方法で示されているかをまとめたものが表10である。

	エヴェンキ語	トルコ語	ヤクート語	ブリヤート語
<b>A</b> 関係節内の主語と形動詞形の間	反映	反映 斜格主語	(なし) ↑	斜格主語 ↑
<b>B</b> 関係節と被修飾名詞の間	一致	連接	連接	連接
<b>C</b> 行為者と行為対象との間	(なし)	(なし)	相応	相応

表10 形動詞形による関係節と語の結合

このように見ると、ブリヤート語では全ての関係についてなんらかの結合の標示があると見ることが出来るが、他の言語では全てを標示しているわけではないと分かる。修飾関係は一致あるいは連接で表すが、反映の標示である人称接辞の現れる場所が異なることから、その役割がエヴェンキ語、トルコ語と、ヤクート語、ブリヤート語とで異なっていると見ることができる。ヤクート語、ブリヤート語では行為者と行為対象との間が所有構造と同じ相応で表されている。一方でエヴェンキ語とトルコ語では、人称接辞が動詞に付くことで反映として表されている。

## 第二部

言語接触から見るエヴェンキ語の一致





## 第四章

### エヴェンキ語と言語接触

前章までは現代エヴェンキ語の社会言語学的状況、規範的な文法体系について概観した。本章では、エヴェンキ語の言語接触による言語変化について考察する。

まずはじめに、言語接触による言語変化についての一般言語学的な見方について、先行研究に基づき大枠を確認する。

次に、エヴェンキの民族の歴史を確認し、その中でどのような接触があったのかを具体例とともに見ていく。

#### 4.1 言語接触

言語変化を扱う研究分野で、その原因が他の言語との接触によるものであるとき、言語接触 (Language Contact) という概念で捉えて考察する分野がある。語彙の借用という場面は、そのもっとも分かりやすい言語接触による影響の痕跡であり、古くから研究の対象とされてきた。その接触言語学の研究史については、入門書に譲るとして (Winford 2003: 6, Matras 2009: 1 など)、体系的に全体像を捉えたのは Weinreich (1953 (1963, 1975); 和訳 1976)、および Thomason & Kaufman (1988) であるといわれている。

##### 4.1.1 言語接触と言語変化の見方とその類型

どの言語学的局面がもっとも影響を受けやすいのか、あるいは、どのような構造がもっとも影響を受けやすいかなど、接触による影響の受けやすさを理論的に研究する先行研究は多い

が(Heine & Kuteva 2005, Myers-Scotton 2002 など)、言語変化は個々の置かれた状況の差が大きく作用する。それらはケーススタディとしては興味深いが、全てのケースに当てはめられるようなモデルの構築は難しい。ここでは、エヴェンキ語が一体どのような局面にいるのかを考えるために、言語接触のタイプを類型的な分類にまとめてみたい。

まず、接触による変化の結果から3つに分類される:

1. 言語の維持
2. 言語のシフト
3. 新しい言語の成立

Winford (2003) では、1の言語が維持される場合のパターンとしては、語彙の借用、構造の収斂、コードスイッチングが挙げられている。そして、3の新しい言語の成立においては、ピジンやクレオールといった、もとの言語のどちらとも言い難い言語の誕生のほか、混成言語の使用などが指摘される。しかし、元の言語の構造が過度に変化した場合と、バイリンガルによる混成言語とは、いったい何が異なるのかは、それを判断する研究者や、対象とする言語により異なると言える。

この3つの基準は、Thomason & Kaufman (1988) が用いる言語接触の言語変化パターンにも通じるものであるため、日本語にしたものをのせておく: 表1。

さて、ではエヴェンキ語における現状はいったいどの段階にあると言えるであろうか。

言語の維持については、都市生活をおくるかぎり、維持されているとはいいがたい。また村落部であっても、ロシア語借用語は大量であり、文法的な構造も変わりつつある。言語シフトがかなりのスピードで起こっていると言え、母語保持率はこのままで進めば話者が消えることも考えられる消滅の危機に瀕した言語の一つと呼べる。また一方で、母語を維持している話者もそのほぼ全員がバイリンガルであり、そのシフト先のロシア語の習得レベルは完璧に近い。つまり、ロシア語にも基層として影響を残す可能性も大きいとは考えられず、ロシア語のピジンのように新たな言語が生じる可能性は低いと見る事が出来る。従って、母語は維持しているものの「激しい文法の置換」と、「言語がシフトする」とが同時進行として起こっていると考えられる。

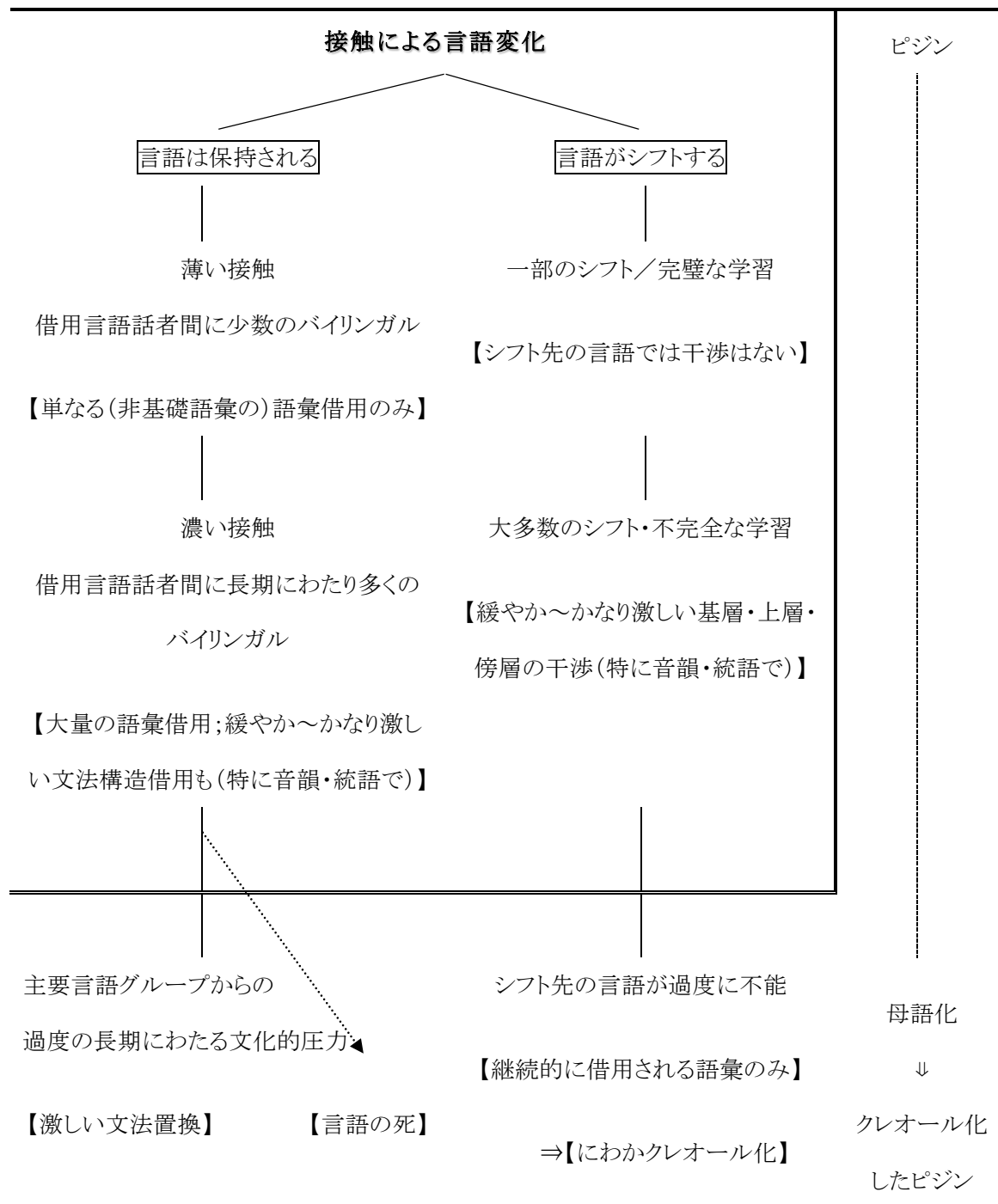


表1 言語接触によるの言語変化の類型(Thomason & Kaufman (1988: 50) より)

以上のような現状を念頭に置き、エヴェンキ語がこれまでの言語接触でいかなる変化を遂げてきたのか、そして構造の変化の結果まだエヴェンキ語であると言える程度の変化にとどまっているのか、あるいは、さらに進んだ混成言語のようなものが出来ているのか、具体的な面を見て、考察していくこととする。

#### 4.1.2 シベリアにおける地域的言語連合の可能性

世界の各地に、系統関係のない言語であっても、長く相互に密接な関係をもちつつ共同体を形成していると、どの言語の特徴からともいわず相互に似通った文法を持つようになる地域がある。いわゆる、言語連合と呼ばれるものである。

シベリアにそのような地域があったのか、あるいは現在あるのか、という点が論じられることがある(Helimski 2003)。しかし、主に、南シベリアのチュルク系言語や、ウラル山脈以西のウラル系諸語の居住する地域のことが扱われる。エヴェンキ語とのかかわりではタイムイル半島のサハ語、ドルガン語、ガナサン語などのサモエード諸語との関係が触れられたりする程度である。ロシア語やヤクート語、ブリヤート語との関係では、接触の影響はほぼ一方的であり、言語連合のような共同体はないと言える。

しかし、かつて中国東北部からバイカル湖周辺でアルタイ系諸語の言語連合にかかわる共同体がなかったのかというと、それは簡単には推測できない問題である。アルタイ系諸語全体で共通した特徴をもつなか(言語類型論的にしろ、言語系統的なものにしろ)、もしその地域だけにみられる特徴があるとしたら、言語連合の存在の可能性があるといえるかもしれないからである。

#### 4.2 エヴェンキの歴史

本論文では、エヴェンキ語の言語接触による言語変化について取り上げるわけであるが、いつ、どこで、どのように他言語と接触を持ったのかを考える上では、エヴェンキの民族としての歴史を概観しておくことは不可欠である。

ここで、主に歴史等の先行研究をもとに、アルタイ系諸語の言語の分布についてみる。続いて、ツングース諸語の分布と移動について触れた後、エヴェンキ語の移動と形成についてまとめる。つまり、より大きい単位での民族の移動から、エヴェンキという個別の民族へと、焦点をあてていく。

#### 4.2.1 ツングース諸語とエヴェンキ語～民族移動と接触

民族の歴史の観点から見たとき、ツングース族、そしてその中のエヴェンキ族はどのような移動をして、現在のような広い範囲に住むようになったのであろうか。

シロコゴロフによれば、原ツングース民族はいまの中国の中原あたりにいたとされるが(地図1を参照)、古代にさかのぼる原始の状態については統一的な見解はまだないと言うべきである。しかし、モンゴル系やトルコ系といわれる民族が中国史に登場するところには、中国東北部およびロシア沿海州からモンゴル高原にいたる地域に、ツングース系民族が居住していたであろうという点については、多くの民族史文献に指摘されている(ヤンフネン 1983: 49、加藤 1986: 179-186など)。つまりその段階でチュルク・モンゴル系との接触が考えられ、かなり古い段階での借用語類も確認される。

その後、シロコゴロフはエヴェンキの民族が何度かの波となって移動をおこなったと推測しているが、それは南方への移動を主にしている。例えば、地図2はその第一移動波の時の地図である。年代についてははっきり明示してはいないが、12～3世紀頃を想定していると思われる。その後、トナカイ飼育を習得したことから北部への移動が始まったと見るのである。ソロンとダグールの分離もこの時期に始まったとみている。

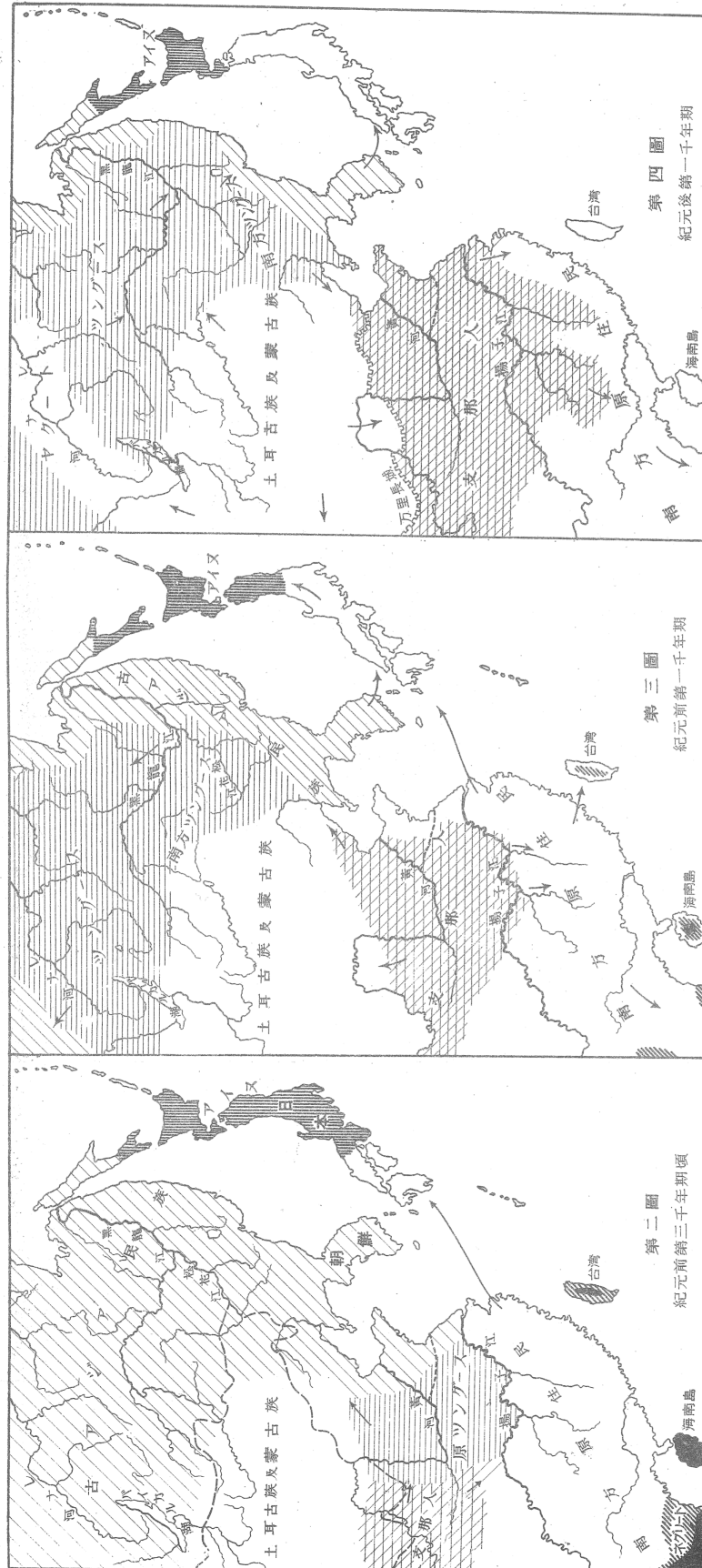
地図3は、第三移動波であるが、17世紀後半ごろとシロコゴロフは書いている。ちょうどロシアがシベリアへ進出し、記録が出始める時期であるとしている。地図4は、その反対側からのロシアの進出の地図である。シベリアの大河に沿い、バイカル湖へと進出していることが伺える。特に、バイカル湖西側からエニセイ川沿岸は、いまでもエヴェンキ族が多く居住する地域である。

以上、先行研究から分かることは、古代については明確なことはもはや分らないが、12世紀ごろを中心とする長い時代においてツングース系民族は中国東北部からモンゴル高原地域で、モンゴル系民族との接触をもってきた。その後、エヴェンキ族もふくまれる北方ツングース

族は、モンゴル族からトナカイ飼育の技術を得て、バイカル湖に注ぐエニセイ川やレナ川に沿って、シベリア北部へと広がったと考えられる。その後北上してきたヤクートとは、今のサハ共和国地域とおよそ同じ地域において接触を持ってきたと推測できる。西側のエニセイ川へ進出した北方エヴェンキは、バイカル湖から東地域に居住する東方エヴェンキよりも、16世紀頃から進出してきたロシアと早くから接触し、支配下に置かれたことが指摘できる。

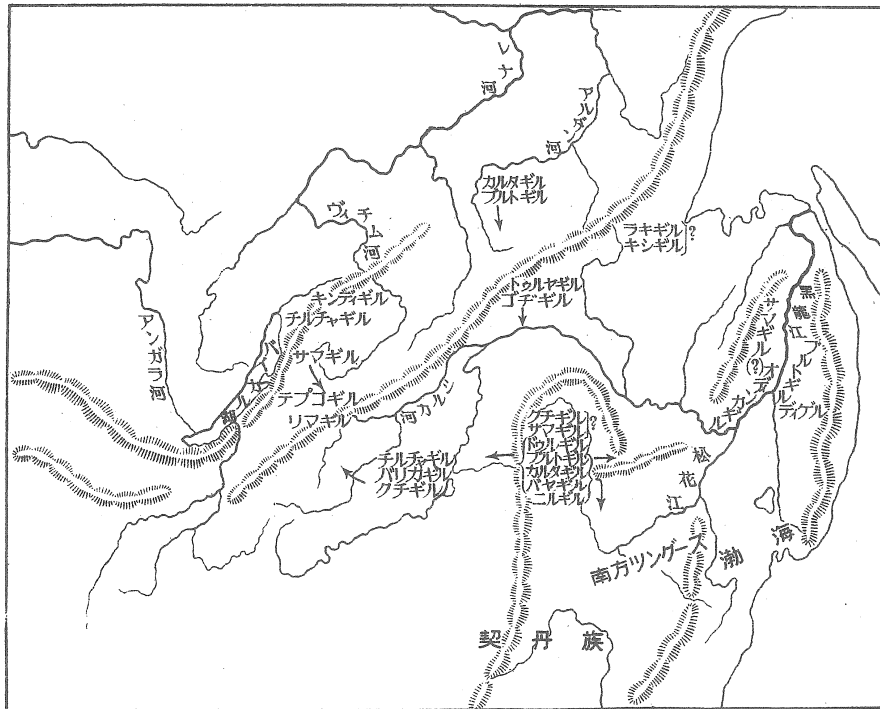
ツングースがアルタイ諸語とよく似た構造をとるのは、この長い時間の接触によるものと推測される。しかし、それ以前の言語の形がどうであったかまでは再構することは難しい。長い間の緩やかな接触により、収斂的に類似した言語が生まれたとも考えられるからである。

その後のロシア語との接触は、近代になってからのものであり、急激なものであったと考えられる。まだロシア人が少数であったころの時代と異なり、ロシア帝国後期からソ連時代にかけてのシベリアへのロシア系民族の移住と、都市が建設されたことによる生活、文化、産業、教育上の激変は、それまでのアルタイ系諸言語との接触とは異なる、ロシア語との濃い接触が予想される。

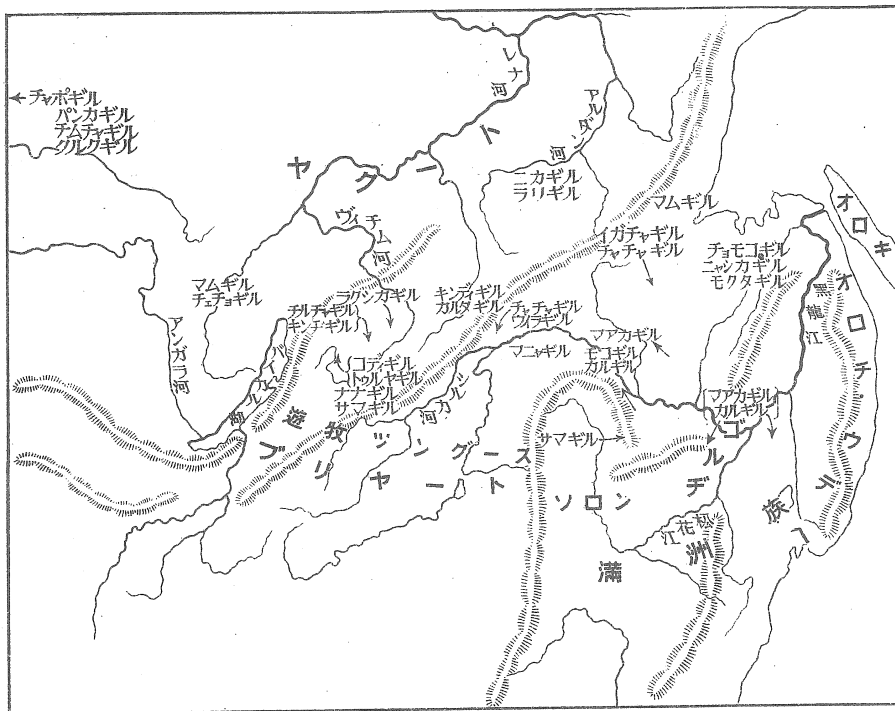


地図1 シロゴロフによるツングース民族、エヴェンキ族の移動の仮説

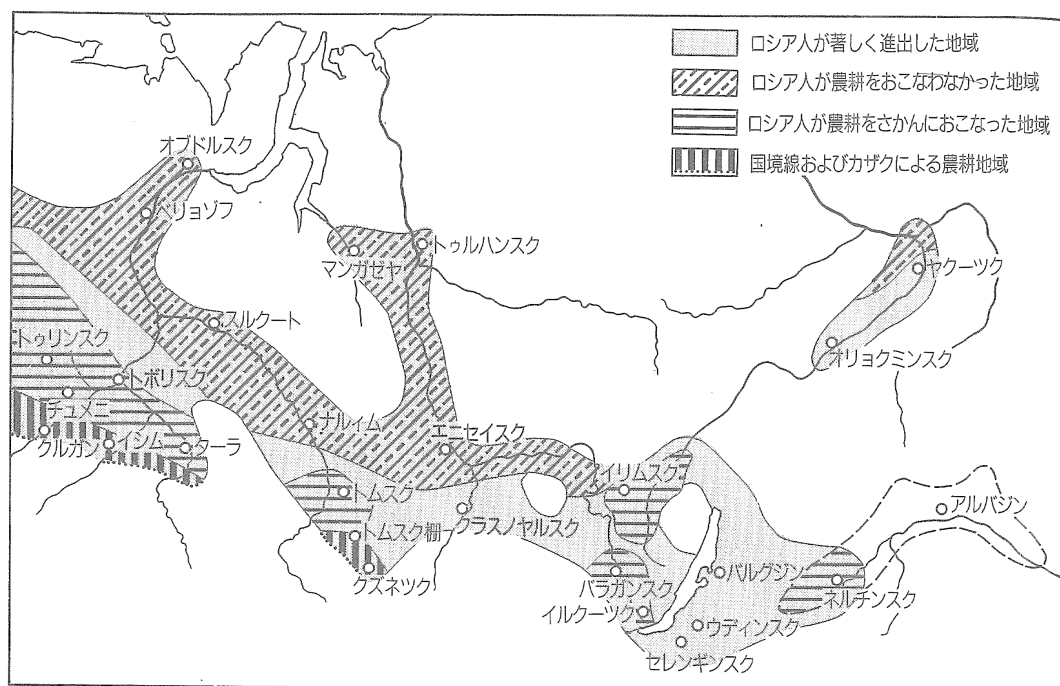




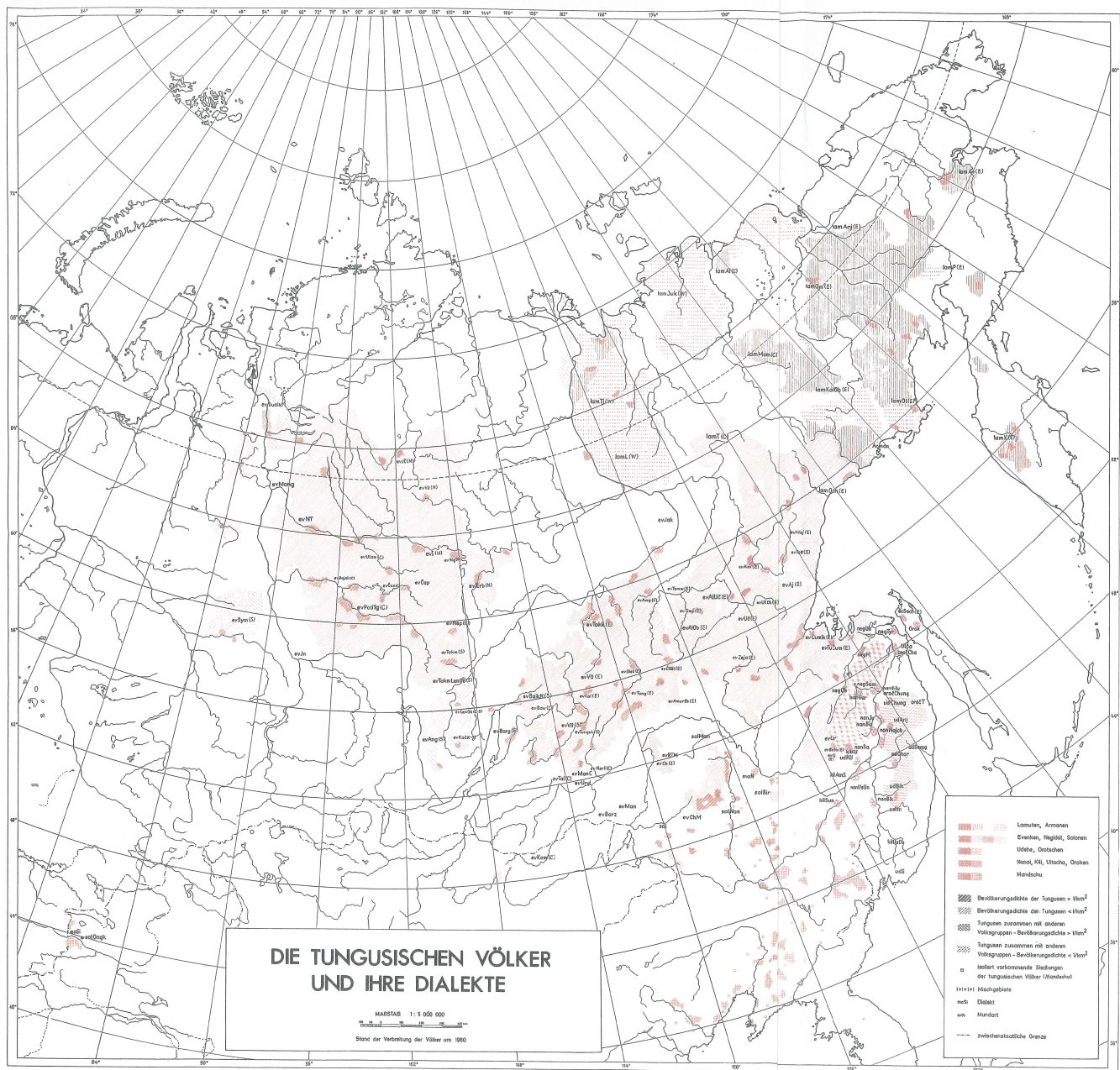
地図2 北方ツングース氏族の“第一移動波”



地図3 北方ツングース氏族の“第三移動波”



地図4 ロシアによるシベリア進出(16～17世紀)(加藤 1989)



地図5 現在のツングース民族の分布 (Appendix of Doerfer (1985))

(赤い部分がツングース諸民族の現代の居住地域を示している)

## 4.2.2 エヴェンキ語とその諸方言

### 4.2.2.1 ツングース諸語内の系統関係

Doerfer(1978)によれば、ツングース諸語の比較言語学的視点からの研究の歴史は長くない。また、ツングース祖語を再構する研究はいくつかあるものの、相互の系統・派生関係については一致した見方はなく、近い関係にあると思われる言語の分類がいくつか為されている程度である。系統関係を打ち立てることが困難な理由として Doerfer(1978: 6)は、“言語が相互にあまりに密接に関係している”こと、“ツングース諸言語に跨る特徴が多く見受けられる<sup>23</sup>”ことなどを挙げている。

そのような状況の中、北方ツングース諸語に含まれる言語はほぼ研究者間で一致しており、音韻面では例えば表2のような特徴的な対応がある<sup>24</sup>。

	ma	go	olč	orok	oroč	udh	sol	negd	ew	lam
*p-	f-	p-	p-	p-	x-	x~s	φ	x	h (~s?)	h
*-p-	f~φ	p~φ	p~φ	p~φ	p~φ	f~φ	w~g	w	w	w

表2 ツングース諸語における\*pの分布 (Benzing 1955: 33)

エヴェンキ語をはじめとする、ネギダル語、ソロン語、エウエン語は北方ツングース諸語であり、これらの言語では他のツングースで両唇の閉鎖音が現れているところに、唇音退化がおり、接近音化や両唇性をなくすなど、弱化や脱落などが共通してみられる。

<sup>23</sup> より具体的には、音が分類上、或いは地域的に、あまりきれいには対応していないことなどを指すものと思われる。具体的に挙げられている例は、\*öの現在の反映形がほとんどの言語でuとして現れる中、エウエン語では最も古い音で保存されている。一方で、同じエウエン語のある方言では最も変化した形で現れている。また、分類に関係なくu~oの自由変異を持つ方言も点在しているというものだ。

<sup>24</sup> 言語の略は次のとおり；ma 満洲語、go ナーナイ語、olč オルチャ語、orok オロツコ語、oroč オロチ語、sol ソロン語、negd ネギダル語、ew エヴェンキ語、lam エウエン語。なお、Benzing はエウエン語を独立させて5分類としている。

#### 4.2.2.2 ロシア領内エヴェンキと中国領内エヴェンキの関係

上の挙げたツングース諸語の系統関係は、ソ連という研究されていた当時の時代背景もあり、主にロシア内のツングースと、古い時代に集められたモンゴル、中国東北部のツングース諸語のデータと使って考察されたものであった。現代では中国内のツングース諸語に対する研究も進められており、国境に関係ない広い範囲でのツングース諸語の歴史言語学的な整理が期待されるところである。

ここでは、中国内のエヴェンキ語とされる諸言語と、シベリアエヴェンキ語との関係をまとめておきたい。

言語の名称・種類と、語彙の対応を挙げる際に用いる各方言の省略は次のとおりである: Ev シベリア・エヴェンキ語、Or 鄂倫春(オロチョン)語、H 鄂温克(エウエンク)語ホイ方言、M 鄂温克(エウエンク)語メルゲル方言、A 鄂温克(エウエンク)語オルグヤ方言、Sol ソロン語。

扱う語彙のデータは以下のとおりである:

シベリア・エヴェンキ語: Василевич(1958)を主に Василевич(1948)を参考にしてまとめる。

文語と呼ばれる形式(ポリグス方言を基盤に作られたもの)で載せている。

鄂倫春語: 胡(2001)を主にし、足りない部分は韓・孟(1993)をも参照した。

鄂温克語: 朝克採録・著/津曲敏郎編(1995)を主にし、胡・朝(1986)<sup>25</sup>も参照した。

ソロン語: Понне(1931)に紹介されている言語。1927-29年にハイラル等の出身のソロン人を対象にウランバートルで調査が行なわれた。

基礎語彙の対照は、数詞・身体名称・動植物・自然・時間表現・親族名称・方向表現・基本形容詞・代名詞・疑問詞を取り上げ、総数216語になる(全ての語彙について全ての言語に対応する語があるとは限らない)<sup>26</sup>。数字は対照語彙の番号であり、付録2に挙げているので参

<sup>25</sup> ここではハイラル辺りの鄂温克語を記述していることから、ホイ方言として扱った。

<sup>26</sup> 付録の語彙対照表には、できる限り元のデータ文字表記を同じにした。しかし本文中でそのまま例を挙げるのは煩雑でわかりにくい為、ほぼ同じ音韻と思われるものは同じ文字で表記するようにしている。参考に下に各方言の音韻体系を載せておく。

括弧内は借用語など限られた環境に出てくる音素を指し、(= )としたものは上で述べたように本文中で挙げる為に文字を改めたものを指す。

・シベリア・エヴェンキ語: /a, ā, ē, ə, ɔ, ō, i, ī, u, ū/

照されたい。

以下では、各方言間で異なる特徴的な子音対応をまとめ、その音変化の方向や過程を考察する。なお、対応語彙において、母音や語末鼻音についても違いがあり、何らかの音変化があったことは容易に想像が付く。しかし、例えば母音については母音調和が類型的に異なる、又は失われるなど、各方言内での変化が著しいため、ここでは扱わない。従って、以下では主に子音の対応に着目して考察していく。

### 鄂倫春語及びオルグヤ方言について

シベリア・エヴェンキ語と鄂倫春語、鄂温克語オルグヤ方言は相互に極めてよく似た音体系・構造を持っていることが分かる。オルグヤ方言は、後述の③で触れる音対応以外は、ほぼシベリア・エヴェンキ語と同じと言える。また、シベリア・エヴェンキ語とオルグヤ方言にだけ共通する語というものの少なくない(35, 37, 44, 66, 87, 104, 171, 175, 188, 211)。これら2言語と鄂倫春語が相互に区別される違いは、語頭の *h-/x-* : *φ-* (24, 30, 32, 33, 52, 123, 165, 183)や、母音間における *-k-* : *-x-* (49, 53, 56, 78, 80), *-g-* : *-y-* (4, 9, 47), *-ŋ-* : *-w~-y-* (63, 101), *nn/ll* : *n/l* <sup>27</sup>(29, 38, 41, 45, 88)、そしてあらゆる環境での *s/x* : *f* (17, 39, 53, 92, 161, 174, 206)の対応である。

---

	/p, b, m, v~w, t, d, s, n, r, l, č, ʃ, ŋ, k, g, ŋ, h, y (f, ʎ)/
・鄂倫春語:	/a, aa, ɪ, ɪɪ, ɛɛ (=EE), ɔ, ɔɔ, u, ʊʊ, ə, əə, i, ii, ee, o, oo, u, uu, (uə, ua)/
	/p, b, m, φ, w, t, d, n, r, l, č (=tʃ), ʃ (=dʒ), ʃ, ŋ, y (=j), k, g, ŋ, x, (ʎ, h)/
・鄂温克語	
-ホイ方言:	/a (=ɑ), aa (=ɑɑ), o, oo, u, uu, ə, əə, ɐ, ɐɐ, ɯ, ɯɯ, i, ii, e, ee/
	/p, b, m, w, s, t, d, n, r, l, č (=tʃ), ʃ (=dʒ), ʃ, k, g, ŋ, y (=j), x/
-メルゲル方言:	/i, ii, e, ee, a, aa, o, oo, u, uu, ə, əə, (ua, ou, ia)/
	/p, b, m, f, w, s, t, d, n, r, l, ts, dz, ʃ, k, g, ŋ, y (=j), x/
-オルグヤ方言:	/a, aa, o, oo, u, uu, ə, əə, ɐ, ɐɐ, ɯ, ɯɯ, i, ii, e, ee, (iə, ia, ie, iu, io, ua)/
	/p, b, m, f, w, s, t, d, n, r, l, č (=tʃ), ʃ (=dʒ), ʃ, k, g, ŋ, y (=j), x/
・ソロン語:	
	/a, ā, ə (=e), ǣ (=ē), ē, è, i, ī, ō, ō, u, ū, ɯ (=u), ɰ (=ū), (ɛᵢ, öᵢ, üᵢ), ǣ, ǣ (=ē), ē, ī, ō, ō, ū, ɰ (=ū)/
	/p, b, f, m, w, t, d, ts, č (=č), ʃ (=ʃ), s, ʃ (=š), ž, r, l, n, j (χ), k, g, x, ʎ, ŋ, (h)/

<sup>27</sup> 鄂倫春語の *ll > l* という変化については、他のエヴェンキ諸語にはみられず、また後で見るように(表3)ネギダル語と共通している。

123. “娘” Ev *hunāt*, Or *ʋnaaǰi*, A *xunaaǰ* (M *unaadz*, H *unaaǰ*, Sol *unāǰi*)
49. “乳” Ev *ukumnī*, Or *uxun*, A *ukun* (M *ukun*, H *uxun*, Sol *uxu*)
4. “4” Ev *digin*, Or *diyin*, A *digiŋ* (M *digiŋ*, H *digiŋ*, Sol *digī*)
63. “銀” Ev *məŋun*, Or *mowon*, A *məŋun* (M *məgun*, H *mugun*, Sol *məgū*)
101. “日” Ev *inəŋi*, Or *iniyi~inigi*, A *inəŋi* (M *inəŋi*, H *inig*, Sol *inəŋi~inəyi*)
45. “魚” Ev *ollo*, Or *ɔlo*, A *ollo* (M *oldo*, H *oxsoŋ*, Sol *oxsōō*)
39. “血” Ev *sāksa*, Or *ʃɛkʃə*, A *saaxa* (M *səagsə*, H *səəčči*, Sol *sākčə~sātčə*)
92. “星” Ev *ōsīkta*, Or *ɔʃikta*, A *oxigta* (M *oofigta*, H *ofitta*, Sol *ōfikta~ōfitta*)

上のような音の対応はシベリア・エヴェンキ語内の諸方言にも見られることから、各方言で独自に起こった音変化と考えるのが妥当である<sup>28</sup>。すなわち、鄂倫春語と鄂温克語オルグヤ方言はシベリア・エヴェンキ語の一方言と同等に扱うことが出来る。そして実際には、1. 3. 3. 1の表6にある音対応から判断すると、鄂倫春語はエヴェンキ語南方言に、鄂温克語オルグヤ方言はエヴェンキ語東方言に最も近いと言うことができる。

#### ① 鄂温克語ホイ方言により新しい音変化が見られるもの

次に、シベリア・エヴェンキ語や他の鄂温克語諸方言では同じ音で対応している語彙が、鄂温克語ホイ方言においては音変化があったと考えられる対応がある。また、音変化 (phonetic process) を考えると、その過程の途中段階を示すような形がソロン語に見られる例もあることが指摘できる<sup>29</sup>。

$bk > pk > kk > *k > x$  (8, 76)

8. “8” M *dzabko.˙*, A *ǰabkoŋ*, || Or *ǰapkoŋ*, Ev *ǰapkoŋ*, || Sol *ǰakkū*, || H *ǰaxoŋ*

<sup>28</sup> Fox (1995)の言うところの、parallel innovation、或いは drift と見做すことができる。つまり、鄂倫春語を他のシベリア・エヴェンキ語や鄂温克語との対比から別の系統とするには十分な証と見ることは出来ない。

<sup>29</sup> 一方で、 $k > x$  (27, 31 等),  $-lC- > -lVC-$  (106, 111, 134 等)はエヴェンキ語内ではよく見られる変化であつたり、ソロン語にはない変化であつたりするため、ホイ方言内での変化と見る事ができる。

*gt > kt > tt* (13, 17, 20, 22, 26, 48, 60, 69, 92, 150)

92. “星” M *ooſigta*, A *oxigta*, || Or *ɔɔfikta*, Ev *ōsīkta*, Sol *ōfikta~ōfitta*, || H *ofitta*

*rk > rg > gg* (59, 146?, 163)

163. “重い” M *uurku*, || A *urgə*, Or *urgə*, Ev *urgəxī*, || Sol *uggərdi*, H *ugguddi*

*mk > ηk > \*gk > kk* (152, 154, 164)

164. “軽い” (M *əniη*) A *inimkηη*, Or *əyəmkun*, Ev *əīm kūn*, || Sol *ənikkūū*, H *ənikkηη*

(152. “短い” M *urumkuη*, Or *urumkun*, Ev *urumkūn*, || A *urūηkηη*, H *urūηkηη* )

*gd > dd* (85, 87, 147, 149, 174, 181)

85. “雷” M *agdi*, A *agdi*, Or *agdī*, Ev *agdī*, Sol *agdī*, || H *adde*

*mn > \*mm > m* (27)

27. “首” M *nikimna*, A *nikimna*, Or *nikimna*, Ev *nikimna*, || Sol *nixama~nixima*, H *nixam*

*mη > mm* (23)

23. “口” M *amηa*, A *amuηa~amηa*, Or *amηa*, Ev *amηa*, || Sol *amma*, H *amma*

*w~v/y > g* (58, 107, 137)

107. “昨日” M *tiinuw*, A *tiinuw*, Or *tiinəwə*, Ev *tīnivə*, || Sol *tīnugə*, H *tinug*

これらのデータから、鄂温克語ホイ方言は、80年前に調査されたソロン語がさらに音変化を経た後の姿であると言うことが出来る。このことは、ソロン語がハイラル出身者を対象に言語調査されたこと、そしてホイ方言も主にハイラルを含む地域で話されているという地理的一致からも裏付けられる。そして、ソロン語とホイ方言にのみ共通する語がいくつか存在し(14, 22, 36, 45, 55, 69, 181)、逆に異なる語である場合にソロン語が他の方言と共通の語彙を持つ例は見



当たらない(例えば 44, 68, 73 等)ことも、それを支持する事実として挙げられる。

一方、上記の子音連続の出現形は、シベリア・エヴェンキ語の諸方言間での揺れはない。従って大まかに言えば、メルゲル方言が最も古い形を保持し、シベリア・エヴェンキ語では一部の素性の同化が認められ、ソロン語及びホイ方言では完全同化する、というように特徴づけられる。

## ② 鄂温克語ホイ方言とメルゲル方言に古い音が残っているもの

次に、音変化の中で鄂温克語ホイ方言とメルゲル方言により古い形が残っていると考えられる対応がいくつか見られる。次に挙げるものであるが、ホイ方言とメルゲル方言において“共鳴音 + /d/”という子音連続の環境では同化が避けられると、まとめることができる。この /d/ は、Benzing (1955) によれば、祖語の \*/s/ としてたてられる音素が、語中での子音連続に伴う音変化に共通して見られる: 表3。

$nd > nn \sim ll > n \sim l$  (38, 88)

88. “雪” Sol *imanda*, H *imanda*, M *imanda*, || A *emanna*, Ev *imanna*, || Or *imana*

$ld > ll > l$  (41, 45?)

41. “肉” Sol *uldə* ~ *uldi*, H *uldu*, M *uldə*, || A *ullə*, Ev *ullə*, || Or *ulə*

$md > nd / mn$  (40)

40. “骨” M *giramda*, || Sol *giranda*, H *giranda*, | A *giramna*, Ev *giramna*

古い音形が残っているという共通点 (shared retention) からでは両言語の関係について何らかの結論を導き出すのは難しい。しかし、ツングース諸語全体での音対応を見ると、新たな見方が可能である。

	ma	go	olč	orok	oroč	udh	sol	negd	ew	lam
*-ns-	-ŋg- (~h?)	-(n)t-	-(n)t-	-(n)t-	-s- (~h-)	-h-	-nd-	-n-	-nn-	-nr-
*-ls-	-lh-	-lt-	-lt-	-lt~-las-	-kt-	-lah-	-ld-	-l-	-ll-	-lr-
*-ms-	-ŋg- (?) ~mh?)	-ms-	-ms-	-ps-	-ms-	-mah-	-nd-	-mn-	-mn-	-mr-

表3 ツングース諸語における\*-ns-, \*-ls- \*-ms-の分布 (Benzing 1955: 44)

表4を見ると、ホイ方言とメルゲル方言に残る音形は、北方ツングース語のツングース祖語からの分岐を特徴付け得る音変化 (shared innovation) と言うことができる。

また“共鳴音 + /d/”は、シベリア・エヴェンキ語においてその出現形に揺れが大きく見られる子音連続である; (1)。

(1) シベリア・エヴェンキ語における“共鳴音 + /d/”の出現形 (TMC より)

/nd/: -nn- ~ -nd- ~ -nñ- ~ -nr-<sup>30</sup>

/ld/: -ll- ~ -ld- ~ -ldr- ~ -nl-<sup>31</sup>

/md/: -mn- ~ -md- ~ -mñ- ~ -mr-

①と②で見た音変化を合わせて考察すると、語中子音連続の同化について表4のような分布が見られる<sup>32</sup>。

<sup>30</sup> -nr-, -mr-という音形で現れるのはどちらもチュミカン方言 (東方言に属する沿海州北のオホーツク海に面した湾の辺り) のみである。

<sup>31</sup> *unlə* ‘肉’ という語形でトクマ方言 (バイカル湖北西地域の南方言) に挙げられている (TMC2: 262)。

<sup>32</sup> 表4について、◎: 完全同化 (重子音化) がありその後単子音化の変化が見られる、○: 完全/部分同化が見られる、×: 同化が見られない、を意味する。

共鳴音 + /d/	左以外の C <sub>1</sub> C <sub>2</sub>	
○	× (～○)	オルグヤ方言
◎	× (～○)	鄂倫春語
(×～)○	× (～○)	シベリア・エヴェンキ語
×	○～◎	ソロン語/ホイ方言
×	×	メルゲル方言

表4 語中子音連続の同化の有無

以上をまとめると、シベリア及び中国エヴェンキ語を全体的に眺めるとき、ソロン語はエヴェンキ諸語の一部として考えることができる。従来ソロン語は、エヴェンキ語やエウエン語などと並んで、いわば独立した言語として扱われてきたが、その必要はない。最も古い音形を保持していると見られるメルゲル方言に近い言語を **pre-Evenki**(前エヴェンキ語)として想定し、シベリア及び中国エヴェンキ語(ソロン語を含む)はそこから派生した諸方言(言語)と見るほうがより自然だと考える<sup>33</sup>。

### ③ 中国内で共通の音変化と見られるもの

中国エヴェンキ語及び、鄂倫春語に共通する音変化が見られる。全てにおいて/ñ/と/ŋ/の音に関係している。

#### 1) 鄂温克語三方言に共通するもの

$\check{n} > n$  (13, 20, 169)

13. “髪” Ev *ñuriktā*, Or *ñuriktā*, || A *niurigtā*, M *nuurigtā*, H *nuuttu*, Sol *nñuriktā~nñuritta*

<sup>33</sup> おそらく **pre-Evenki** にネギダル語も含まれる可能性が高いと考えているが、今回は詳しく見ていないのでこれ以上は触れない。またエウエン語についても詳細に見る必要があるが、暫定的な予想として **pre-Evenki** には含まないとする。

$\eta > n-$ ,  $-g-$  (50, 68?, 203)

50. “犬” Ev *ɣinakin*, Or *ɣanakin*, || A *ninakin*, M *ninakin*, H *ninixin*, Sol *ninaxĩ*

203. “3 人称代名詞主格” Ev *nuyan*, || Or *nuganın*, A *nugaŋ*, M *nugaŋ*, H *nugaŋ*

$n\eta > *n\eta > \eta$  (5, 140)<sup>34</sup>

5. “5” Ev *tunɣa*, || Or *toɣɣa*, || A *toɣa*, M *toɣ*, H *toɣ*, Sol *toɣa*

$\eta n > nn$  (182)

182. “黒い” Ev *koɣnomo*, Or *kɔɣnɔrin*, || A *konnoriŋ*, M *konnoriŋ*, H *xonnoriŋ*, (Sol *xoɣnorĩ*)

$\eta t > nt$  (34, 35, 68, 161)

161. “深い” Ev *huɣta*, Or *fuɣta*, || A *sonta*, M *sonta*, H *sonto*, Sol *sũnta*

## 2) 鄂温克語ホイ方言とメルゲル方言にのみ見られるもの

$\eta > n-$ ,  $-g-$  (22?, 29, 63, 151)

29. “手” Ev *ɣālā*, Or *ɣaala*, A *ɣaalla*, || M *naalla*, H *naalla*, Sol *nāla~nāli*

63. “銀” Ev *məɣun*, Or *mowon*, A *məɣun*, || M *məgun*, H *mugun*, Sol *məgũ*

鄂温克語ホイ方言にのみ見られるものは②で見たとおりである。

興味深いことに、/ñ/と/ŋ/の変化については、表5のように、概ね段階的および含意的な変化として見る事が出来る。つまり、(2)に示したように、式の左側の言語に変化が見られれば右側の全ての言語にその変化が見られるということである(一部鄂倫春語に進んだ音変化が見られるため、一種の傾向であるといえる)。

<sup>34</sup> この変化は、ホイ方言にのみ見られる例が多いことから、ホイ方言が周辺言語へ影響を及ぼした変化という可能性がある。

$n\eta > n\eta \sim nn > \eta \sim n$  (25, 33, 103)

33. “膝” M *ənnən*, A *xənnən*, Ev *hənnən*, || Sol *əɣə*, H *əɣə*

先行研究において、\*ŋ の存在について問題はない。従って、ソロン語の時代から既に/ŋ/を語頭・母音間で失い、語頭で/n/に、母音間で/g/に合流していた鄂温克語ホイ方言との接触により、地理的に近い方言から影響を受け、同じ音変化が広まったと考えられるだろう。

H	M	A	Or	Ev	例
-ŋ-	-ŋ-	-ŋ-	-ŋ-	-ŋ-	6, 185
-ŋg-	-ŋ-	-ŋ-	-ŋ-	-ŋ-	36
n-/g-	n-/ŋg-	ŋ-/ŋ-	ŋ-/y-	ŋ	29 / 101
-g-	-g-	-ŋ-	-w-	-ŋ-	63
n-	n-	n-	ŋ-	ŋ-	50, 68
n-/g-	n-/g-	n-/g-	n-/g-	ŋ	208 / 203
n-	n-	n-	ñ-	ñ-	13, 20, 169 / 31
n	n	n	n	ñ	43

表5 /ŋ/とñ/の変化の分布

(2) 傾向: 鄂倫春語 > 鄂温克語オルグヤ方言 > 鄂温克語メルゲル方言 > 鄂温克語ホイ方言

同様のことが/ñ/についても、/ñ/の/n/への合流ということで考えられそうだが、少し複雑である。先行研究において\*ñ の存在については問題があるのだ。Цинциус(1949)は表6のように\*ñ を認めている。しかし、Benzing(1955: 40)は、“ソロン語とオロツコ語であらゆる環境で/ñ/が現れないこと、満洲語、ナーナイ語、オルチャ語で対応に ñ と n の間で揺れがあること、もし ñ を認めるのならば口蓋化した b<sup>i</sup>, g<sup>i</sup>, s<sup>i</sup> も祖形に音素として認めなくてはならないこと”などを挙げ、否定している。Benzing は *i*-で始まる二重母音を祖形に立てており、ñ は二次的に発生したとしている。

	ma	go	olč	orok	oroč	udh	sol	negd	ew	lam
*ñ-	ñ~n-	ñ~n-	ñ~n-	n-	ñ-	ñ-	n-	ñ-	ñ-	ñ-
*-ñ-	-ñ-	-ñ-	-ñ-	-n-	-ñ-	-ñ-	-n-	-ñ-	-ñ-	-ñ-

表6 ツングース諸語における\*ñ の分布 (Цинциус 1949: 250-1)

②及び③で見たように、ソロン語を含め中国エヴェンキ語はシベリア・エヴェンキ語とともに、pre-Evenki から派生したと考えられる。\*ñ については以上のような問題があるが、エヴェンキ語諸語について考察する限り、pre-Evenki の段階において、/ñ/は存在していたとしても問題ない。従って、/ñ/についても/ŋ/と同じことが言え、ホイ方言において脱口蓋化した/n/が接触により中国エヴェンキ語に広まったと考える。

#### 4.2.2.3 エヴェンキ諸語の系統の仮説

以上4.2.2.2節で見てきたことは、次のようにまとめられる。

- ・ 鄂倫春語と鄂温克語オルグヤ方言は、それぞれシベリア・エヴェンキ語の南方言及び東方言に分類され得るような音対応をもつ。また、メルゲル方言もエヴェンキ諸語のより古い音形を保持している言語と見るができることから、エヴェンキ語の一方言として扱うことができる。
- ・ ソロン語は鄂温克語ホイ方言の異時代の同言語である。また、ソロン語を北方ツングース語から分派した言語と見るよりも、前段階の pre-Evenki から分派したエヴェンキ諸方言の一つと見るほうが妥当である。
- ・ 後代になり中国内のエヴェンキ諸語間での接触の結果によりホイ方言から受けた影響であると解することで、説明がつく音変化がある。

相対的年代を決める決定的な音変化がないため、各言語・方言間の系統を導き出すのは難しいが、おおよそ次のような系統樹<sup>35</sup>を立てることができる<sup>36</sup>。

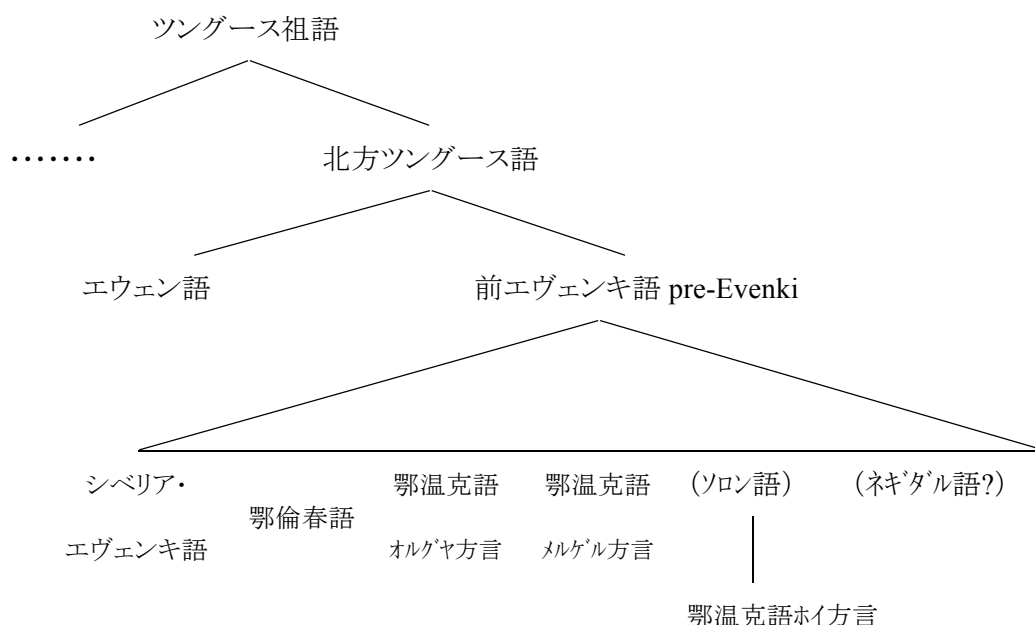


表7 エヴェンキ諸語の関係

音の対応を見る限り、中国のエヴェンキ諸語は、シベリアのエヴェンキ語と、他のどのツングースよりも近いことは確認できた。しかし、その内部の音変化は相互的で系統樹にすることは難しい。ここでは、連続体として方向性を示すことだけが可能であると考え。

<sup>35</sup> 前エヴェンキ語に含まれる各言語(方言)については、地理的位置及び地域的特徴の共有を重視して横に並べたにすぎない。音対応からみた分類をも考慮すると1次元的な図では書き表せ得ない(そのため、例えばシベリア・エヴェンキ語は鄂温克語オルグヤ方言より鄂倫春語に近いということを表しているわけではない)。

<sup>36</sup> ツングース諸語の系統関係を扱う研究はいくつかあり、可能性として有りえるあらゆる組合せが提案されているが、ここに出した表7の分類も結果的に Benzing と同じになった。

### 4.3 エヴェンキ語とブリヤート語、ヤクート語間の言語接触

4.2.1でみたように、ツングースおよびエヴェンキにとって、中国東北部からバイカル湖東側あたりが分裂して移動する前の故地であったと推測されている。原ツングースの起源の地については他にも諸説あるが、現在まで最も受け入れられているのはこのシベリア起源説で、バイカル湖南東の森林地帯であるとするものといえよう(シロコゴロフのほかにも、ヤンフネン 1983: 49、加藤 1986: 179-186 などが挙げられる)。

この地域は、モンゴル系の民族も古来居住していた地域でもあり、ツングースとはかなり古い時代からの接触が予想される。例えば、エヴェンキを含めツングース系諸民族は「元来トナカイ飼養民ではなく、タイガの中を徒歩で歩く狩猟・漁撈民であった」(加藤 1986: 132)。東シベリアに広く分布するエヴェンキにとってトナカイ飼養は極めて重要な要素であるが、これはバイカル湖周辺のモンゴル系牧畜民から得た知識だという<sup>37</sup>。

その後、北方ツングース民族はそこから北方へ移動する。トナカイ飼養技術を得たエヴェンキはこの北方ツングースに属する。こうしてエヴェンキは近代へつながる「トナカイ飼養の狩猟民すなわち、移動・運搬手段として少数のトナカイを保有しながら山野に獲物を求めて移動生活をする狩猟民」(荻原 1989: 84)という民族的特徴を持つようになったと考えられている。その後、南から移動してきたヤクートがレナ川に沿って北上しエヴェンキと遭遇するが、「定住に際して先住民であったツングース族は彼らに狩猟や漁労を教えることもしたが、ステップ地方の伝統的牧畜文化をもつ経済力に富んだヤクートに多くは同化吸収された」(庄垣内 1987: 51)とされる。

言語学的には、アルタイ語族説は受け入れられていないことは言うまでもない。しかし、系統的な問題とは別に、ツングース諸語が歴史的に他のアルタイ諸語、特にモンゴル系の言語から大きな影響を受けてきたことは、先行研究にもあるとおりである。このツングースとチュルク、モンゴル諸語との言語接触に関する先行研究は、主に借用語や音韻に関する研究である(例えば Kałużyński(1962)、Poppe(1972)、Романова et al.(1975)、池上(1989b)など)。

---

<sup>37</sup> この根拠としてはエヴェンキ語でトナカイの乗用道具に関する言葉がモンゴル語の乗馬具と共通していることが挙げられている(加藤 1986: 133)。



## 副動詞形につく人称接辞について

先行研究にあるような語彙及び音韻的な借用は比較的明確に観察できる言語変化であるが、一見するとあまり明確には見えない文法に關係する部分での変化もある。例えば、松本(2005)から、言語接触による収斂の結果、共通した文法特徴をもつに至ったと考えられる現象を見てみよう。

エヴェンキ語の副動詞は、主語に対応する人称接辞がつくことができるものがあることは既に見た(3.1.3.2)。副動詞形という動詞の副詞的従属節をつくる形式は、ヤクート語、ブリヤート語にも存在する。この副動詞形を次の点から分類する：

- ① 副動詞語尾が人称接辞をとらないか、任意的にとるか、義務的にとるか
- ② 副動詞語尾が同主語複文のみに現れるか、異主語複文のみ現れるか、或いは両方で現れることができるか<sup>38</sup>

この2つの基準に従うと、全てで9通りの組合せが考えられる(表8)。

		②主文と従属文の主語		
		同主語	併用	異主語
①人称語尾	不要	1	2	3
	必須	4	5	6
	任意	7	8	9

表8 副動詞形の人称語尾と主語の相違の組合せ

## エヴェンキ語

まず、エヴェンキ語について、Колесникова(1966)、Nedjalkov(1997)<sup>39</sup>で挙げられている

<sup>38</sup> この視点は Nedjalkov(1995)でも挙げられている。

<sup>39</sup> 本文中にあるように3つに分類されるという結果は Nedjalkov(1997: 271)と同じである。しかし、そこでは同主語複文、異主語複文またはそのどちらも作ることが出来るという3点を並列に見て一面的に捉えている。これに対して、本論文で取っている基準は既述の2点(①②)から二面的に見ているという点で異なっていると言える。

副動詞形のうち、主たる形式を2つの基準から分類すると次のように3つに分けられる<sup>40</sup>。意味等については、3.1.3.2を参照されたい。

①人称接辞を取らない副動詞語尾

－1: 同主語複文のみ可能＝**A**; -nA, -mnAk, -kAim, -mi

②人称接辞を必須とする副動詞語尾

－1: 同主語複文・異主語複文が可能＝**C**; -dA/vunA, -knAn, -dAlA, -ktAvA, -ŋAsi, -čAlA

－2: 異主語複文のみが可能＝**D**; -rAk, -jAnmA

## ヤクート語

Коркина(1985)、Харитонов(1982)、Убрятова(1976)、Stachowski and Menz(1998)での副動詞形に関する記述から、ヤクート語の全ての副動詞形が一つのタイプに属することが読みとれる。

①人称接辞を任意に取ることが出来る－1: 同主語複文・異主語複文が共に可能＝**C'**;

-an<sup>4</sup>, -a<sup>4</sup>/i<sup>4</sup> (-i)mīna<sup>4</sup> 前2つの否定形), -bakka<sup>12</sup>, -aari<sup>4</sup> (-īmaari<sup>4</sup> 否定形), -aat<sup>4</sup>, -bičča<sup>12</sup>

## ブリヤート語

ブリヤート語について、Poppe(1960)、Bosson(1962)、Skribnik(2003)で挙げられている副動詞形を分類すると次のように3つに分類される。

①人称接辞を取らない副動詞語尾

－1: 同主語複文・異主語複文が共に可能＝**B**; -ja<sup>3</sup>, -aad<sup>4</sup>

－2: 同主語複文のみ可能<sup>41</sup>＝**A**; -xaar<sup>4</sup>, -ngxaar<sup>4</sup>

②人称接辞を任意に取ることが出来る副動詞語尾

－1: 同主語複文・異主語複文が共に可能＝**C'**; -bal<sup>3</sup>, -tar<sup>3</sup>, -msaar<sup>4</sup>, -xlaar<sup>4</sup>, -haar<sup>4</sup>

<sup>40</sup> 語尾の右上にある数字は、母音調和、或いは子音調和による異形態の数を示す。

エヴェンキ語: a<sup>3</sup>=a~ə~o、ブリヤート語(モンゴル語): a<sup>3</sup>=a~e~o, a<sup>4</sup>=a~e~o~ö, aa<sup>4</sup>=aa~ee~oo~öö, uu<sup>2</sup>=uu~üü、ヤクート語(トルコ語): a<sup>4</sup>=a~e~o~ö, i<sup>4</sup>(i<sup>4</sup>)=i~i~u~ü, 子音調和の場合例えば ba<sup>12</sup>=b~p~m~x~a~e~o~öということを表す。

<sup>41</sup> 他に -xayaa<sup>4</sup>, -ngaa<sup>4</sup>が分類されると考えられる可能性があるが、この副動詞語尾は既に再帰接辞が含まれていると見ることもでき、本文では除外しておく。

## モンゴル語

モンゴル語において、小沢(1963)で挙げられている副動詞語尾を分類すると、次のように2つに分けられる<sup>42</sup>。

①(原則) 人称接辞を取らない副動詞語尾－1: 同主語複文・異主語複文が共に可能＝**B**;

-j/č, -(g)aad<sup>4</sup>~iad<sup>2</sup>, -saar<sup>4</sup>, -vč, -magc<sup>4</sup>, -xaar<sup>4</sup>, -val/bal<sup>4</sup>

(②3 人称所有接辞或いは再帰所有接辞を任意に伴う副動詞語尾

－1: 同主語複文・異主語複文が共に可能＝**C'**; -tal<sup>4</sup>, -nguut<sup>2</sup>)

## トルコ語

勝田(2001)ではトルコ語の副動詞について同主語複文あるいは異主語複文のどちらに現れるかという点から既に分類が為されている。そこへ人称接辞についての基準を加えると、次のように分類される。

① 人称接辞を取らない副動詞語尾

－1: 同主語複文のみ可能＝**A**; -(y)ip<sup>4</sup>, -(y)e<sup>2</sup>-(y)e<sup>2</sup>, -(y)erek<sup>2</sup>, -mek<sup>2</sup>tense, -ce<sup>2</sup>sine 等

－2: 同主語複文・異主語複文が可能＝**B**; -(y)ince<sup>4</sup>, -meden<sup>2</sup>, -(y)e<sup>2</sup>li, -(y)ken, -dik<sup>4</sup>çe 等

組合せからいえば、表8で挙げたように9つのタイプが可能であったはずだが、実際に観察されるタイプはそのうちの5つである<sup>43</sup>(存在しないタイプの欄は斜線で消してある)。

表9に見るタイプの分布は、Haspelmath(1995)で挙げられている世界の言語の *converb* における一般的傾向と一致していることが指摘できる。参考にそこで挙げられている表10を下に挙げる<sup>44</sup>。

<sup>42</sup> ②－1というタイプは人称接辞が3人称と再帰所有接辞に限られる。つまり、1人称または2人称の人称接辞が現れる例がない。この意味において不完全と見ることができ、括弧を付けて示した。例文は挙げない。

<sup>43</sup> ここで**C**と**C'**というタイプについて説明を加えておく。本論文で見たいのは副動詞に人称接辞が付くという現象である。そのため、ここでは、副動詞が人称接辞を伴うという特徴でまずまとめ、その下位分類として人称接辞が義務的なのか、任意的なのかという点で分類することにする。同じ記号**C**を用いているのはそのためである。

<sup>44</sup> この表に関しては次のように述べられている: ‘It should be noted, however, that so far the claims embodied in Table 4(注: 本論文の表10と同じ) lack a firm empirical foundation and are

副動詞語尾に			主文と従文の主語に関して		
			同主語複文のみ	どちらも可	異主語複文のみ
人 称 接 辞	取らない		A	B	
	取ることが出来る	必須		C	D
		任意		C'	

表9 副動詞形の人称接辞に関して分類したタイプ一覧

	same-subject		varying-subject		different-subject
implicit-subject converb	<i>typical</i>	(=A)	unusual	(=B)	unusual
explicit-subject converb	unusual		unusual	(=C)	<i>typical</i> (=D)
free-subject converb	unusual		<i>typical</i>	(=C')	unusual

表10 Subject reference in converbs (Haspelmath 1995:10)<sup>45</sup>

Haspelmath (1995)では、“subject”(主語)の表示について、その手段(人称接辞或いは主語名詞など)を特定していない。ここでは、implicit-subject とは人称接辞を取らないこと、explicit-subject とは人称接辞を義務的に取ること、そして free-subject とは人称接辞を任意的に取れることを指すと解釈すると、表9で示した A, B, C/C', D の各タイプは、各々表10に書き入れたように当てはまると考えられる。表10を見ると、まず3つの *typical* とされるタイプに当てはまるタイプが存在していることが分かる(A, C', D のタイプ)。また一方で、unusual とされるタイプに属するタイプも存在していることも確認される(B, C のタイプ)。

mainly based on impressionistic observations. Thus Table 4 represents a hypothesis that needs to be tested on cross-linguistic data.’(Haspelmath 1995: 11)

<sup>45</sup> 表9と対比が容易になるように縦軸の並びを一部変更し、また、=A, =B, =C, =C', =D を書き足している。この大文字アルファベットの記号はそれぞれ表9のタイプと同じものを指していることを示す。

次にこれまで見た言語について、表9で挙げた副動詞形に関する5つのタイプの分布を示すと、表11のようになる<sup>46</sup>。

表11を見て考察していこう。まず、ヤクート語の副動詞は全て C'タイプの一つのタイプに属している。また、長く接触をもってきたと考えられるブリヤート語、エヴェンキ語には C または C'タイプの副動詞が存在する。この2点に、チュルク諸語において人称接辞を取る副動詞はヤクート語以外には存在しないことを考え合わせると、C'タイプの副動詞がヤクート語に元来存在したとは言い難く、接触によって借用したと考えるのが最も妥当である。

	A	B	C	C'	D
エヴェンキ語	○		○		○
ブリヤート語	○	○		○	
モンゴル語		○		△	
ヤクート語				○	
トルコ語	○	○			

表11 副動詞形のタイプの分布

次にモンゴル諸語についてである。表11を見る限り、C'タイプの副動詞がブリヤート語、モンゴル語に存在する。このことから、副動詞形に人称接辞が付くという特徴はモンゴル諸語にも存在したと考えることができそうである。しかし、モンゴル語の C'タイプの副動詞は、△で示したように全ての人称接辞が付くことはなく、弱い特徴と言わざるをえない。また、ブリヤート語では多くの副動詞が C'タイプに属するのに対し、モンゴル語ではほとんどの副動詞が B タイプに属し、C'タイプは少ない。ここで、モンゴル諸語について次の2つの仮説が考えられる。

<sup>46</sup> ここで、表11のモンゴル語の C'の欄に記した△という記号について説明しておく。モンゴル語において、人称接辞を任意に伴うことが出来る副動詞は、その副動詞形に付く人称接辞が3人称所有接辞か再帰所有接辞に限られている。全ての人称接辞が付くことが出来るわけではないことから完全に C'タイプに属するとは言えない為、○ではなく△で示している。

仮説① モンゴル諸語は元来 B タイプの副動詞は無く、C'タイプの副動詞を持っていたが、何らかの理由により B タイプの副動詞を持つようになった

仮説② モンゴル諸語は元来 C'タイプの副動詞は無く、B タイプの副動詞を持っていたが、何らかの理由により C'タイプの副動詞を持つようになった

このうち仮説②により高い可能性があると考える。理由は以下のとおりである。

仮説①については、表10で示したように、B タイプの副動詞は、主語が主文と従文で異なる可能性があるにもかかわらず人称を標示しないため *unusual* とされ、いわば不安定であると言える。これに対して C'タイプの副動詞は必須ではないものの人称標示が任意で主語を明示できるため *typical* とされ、安定していると言える。言語変化の過程においては、不安定な状態から安定した状態へ変化する方向の方が、その逆の方向へ向かう変化より一般的であると言うことができる。従って、C'タイプから B タイプへ変化したというより、B タイプから C'タイプへと変化したとする方がより可能性が高いと考えるのである。また、ブリヤート語においてなぜ少数の副動詞が B タイプへ変化したのか適当な原因が見当たらない。以上から、仮説①は適当でないと考える。

続いて仮説②については、仮説①の排除の理由でも述べたように、B タイプから C'タイプへの変化は妥当性がある。モンゴル語でなぜ一部の副動詞にのみ、そしてなぜ3人称所有接辞と再帰所有接辞に限って付くようになったのかは問題であるが、これは3人称所有接辞の前倚辞化と深い関係があると考えられる。二次的に文法化された現象とみるのが妥当であり、C'タイプの発生とは別の問題を含んでいる。また、モンゴル語は定動詞(主文の述語動詞)に人称語尾を持たないことも、元来 B タイプが自然であったとの主張を支持する事実である。ブリヤート語において C'タイプに属する副動詞が多く見られる理由としては、ヤクート語が言語接触の結果全ての副動詞が C'タイプとなったと考えたことと平行的に捉え、エヴェンキ語の影響によるものと考えられるだろう<sup>47</sup>。

<sup>47</sup> Janhunen (2003)に基づいて他のモンゴル諸語について概観しておく。保安語、東郷語、モンゴル語、シラ・ユグル語など、中国内の孤立的モンゴル諸語については、副動詞形に人称接辞が付く例は見当たらない。モゴール語はペルシア語の影響から副動詞形がほとんど使われず、多くは接続詞によって文が導かれる副詞節が用いられる。一方ダグール語には人称接辞が付くことが

また、ヤクート語の言語接触はエヴェンキ語よりも前にモンゴル系言語(おそらくブリヤート語)との間にあったという史実から、エヴェンキ語から直接影響を受けたのではなく、モンゴル諸語を介して副動詞に人称接辞が付くという特徴がヤクート語に影響を与えた可能性もあることが指摘できる。

結論として、副動詞形に人称接辞が付き得るという特徴は、元来エヴェンキ語(北方ツングース語)にあったが<sup>48</sup>、長い言語接触の結果、ブリヤート語(バイカル湖周辺モンゴル諸語)に、そしてエヴェンキ語あるいはブリヤート語との接触によってヤクート語へ伝わった可能性があるがあると、指摘できる。

以上の考察から、人称語尾をとる副動詞形は、言語接触の結果により地域的な文法特徴を持つに至った言語変化の一つの例といえる。モンゴル高原からバイカル湖のシベリア地域は、エヴェンキ語とモンゴル系、チュルク系言語が長く接触した地域で、支配的な言語が存在するような「圧力」は伴わない関係であったが、借用語にとどまらず、文法にまで影響を及ぼす程度の段階に至るほどのものであったと考えられる。

---

できる副動詞形がいくつか存在する。また、オイラト語・カルムイク語にも少ないがいくつか存在する。これら人称接辞が付く副動詞形をもつ言語については、ダグル語はオロチョン語(オロチョン族は中国東北部に在住のツングース系言語を話す民族。エヴェンキ語ととても近い)と接触を持っていること、そしてオイラト語・カルムイク語を話す民族はかつてバイカル湖沿岸にいたオイラト族であるということから、ブリヤート語の場合と同じくツングース系言語との接触が考えられる言語である。一方、人称接辞が付く副動詞形を持たない言語は、ツングース系言語との接触が考えられない言語である。エヴェンキ語がブリヤート語へも影響を与えている可能性があることが、この点からも伺うことができるだろう。

<sup>48</sup> A, D タイプには触れていないが、ともに typical な地位であり、どの言語にも元からありえる文法と考えられる。実際には D タイプはエヴェンキ語だけにある特徴であり、アルタイ諸語とは共通しない特徴と言えよう。

#### 4.4 エヴェンキ語とロシア語との接触

ロシア語との接触は、東北アジアにおけるアルタイ系諸語との接触の歴史に比べればはるかに近年になってからの接触になる。しかし、その強度について考えると、ロシア語からの影響はそれまでの他言語との接触よりもはるかに強いものであると言える。征服され、完全にロシアの支配におかれ、近代に入ってからにはロシア文化の影響下で民族独自の文化が保障されているとはいっても、ロシア語による言語的な支配は強い。第一章でみたように、現代におけるエヴェンキのおかれている社会言語学的状況をみれば、それは明らかである。

ロシア語との接触により、どのような言語変化を被ったかについて、体系的な研究がなされたことはない。例えば借用語に関するものは、比較的多い(Мыреева(1972)など)が、その他の文法的な分野でのロシア語から影響についての研究は多くない。

例えば、次のような点について、ロシア語との接触による言語変化と見る可能性がある現象が挙げられる。

- ・ 弁別の特徴である RTR が曖昧になっている点

エヴェンキ語の母音調和において、その基準は RTR であるという指摘はすでに指摘されていた。筆者が行った聞き取りでも、話者が年配者であったこともあるせいか、RTR による違いを聞き取ることが出来た(第二章)。

しかし、長母音/a:/のあとに続く短母音は/a/(ロシア文字では“а”)であるという記述があり、エヴェンキ語話者もそのような認識のもと表記している。しかし、これは母音調和に従った短母音/a/が、長母音のあとで弱化したために曖昧母音になっただけではないかと考えている。

- ・ 長母音の弁別性の弱化

エヴェンキ語の母音には長短の区別がある。また、アクセントについては無アクセントとして記述されることがほとんどで、詳細な分析はない。確かに聞こえとして長母音は存在し、ミニマルペアがある語の間では、長短の区別が意味の区別の重要な弁別素となっている。しかし、一語内に長母音が連続する場合、その長さがなくなり短く聞こえるような場合がある。ロシア語



のように、強く発音される母音は長さが保たれるが、それ以外の母音は長さが保たれない場合もある。

- ・ 破擦音か口蓋化音か

ロシア語には歯茎の口蓋化破裂音 /tʲ, dʲ/ と、破擦音 /tʃ/ (無声音のみ) がある。一方エヴェンキ語には口蓋化破裂音はなく、破擦音 /tʃ~tɕ, dʒ~dʒ/ がある。ロシア文字では、/tʃ~tɕ/ = ч で表記する一方、/dʒ~dʒ/ = д + 軟母音で表記する。このとき、表記法で /tʃ~tɕ/ = т + 軟母音で誤って表記する例が見られることがある。異音として、口蓋閉鎖音が浸透してきていることの現れとみることができる。

- ・ 語彙の借用

先行研究で扱われる借用語の研究は、主にロシア語などから借用される語彙が、どのようにエヴェンキ語の音韻に置き換えられるか、という点への言及である。しかし、現在では、ほぼロシア語とのバイリンガルである話者にとって、エヴェンキ語らしい音へ変化させる必要はなく、ロシア語借用はロシア語の発音でエヴェンキ語のなかに組み入れるほうが自然に聞かれる。文法としての音韻とレキシコンについて、エヴェンキ語のものとロシア語のものが同時に二つあると考えられる。言語の習得が完璧になされ、バイリンガルが多い社会では、こうした二言語併用状態はよく観察されるタイプといえる。

- ・ 語順

エヴェンキ語は語順が比較的自由であるといわれる。確かに、アルタイ系諸語では通常動詞は文末におかれるが、エヴェンキ語では動詞が文末に必ず来るとは限らない。語順の制約については、詳しい研究はなく、本論文でも重要なテーマとなるところである。しかし、少なくとも、語順が自由になるきっかけを与える要因となりうる可能性として、ロシア語は強い候補といえる。

- ・ 疑問詞と関係代名詞

アルタイ系諸語では、関係代名詞をもつ言語はほとんどない。指示詞や、人称代名詞が、関係代名詞的な役割をして文をつなぐ接続詞としてはたらく可能性がある一方で、エヴェンキ語では近年、疑問詞を関係代名詞として使う用法が見られる。ロシア語における疑問詞も関係詞としての用法があり、影響を受けているといえよう。しかし、疑問代名詞の場合、関係節内で主格として振る舞うときの例くらいしか見られず、疑問詞が格変化するような例は見られない。今後、完全な関係詞として用法が確立していく可能性がある。

以上いくつかロシア語からの影響があるのではないと思われる現象を挙げた。今後の調査、研究が必要とされるが、ここでは指摘にとどめる。

### エヴェンキ語の不定対格とロシア語の生格

エヴェンキ語には、不定対格と呼ばれる文法格-(j)A (ACCIN)があるが、この格の用法にロシア語の生格の用法が影響を与えている可能性がある。しかし一方で、他言語の影響を受けずとも、本来の自然な変化として起こりうるものかもしれない、一概に言語接触によるとはいえない点もある。不定対格の用法について、松本(2007)をもとに観察してみたい。

エヴェンキ語の不定対格には、行為対象が不定的であること(例文(1))、あるいは全体ではなく一部にかかわること(例文(2))がある<sup>49</sup>。

### 不定

(1) Ičə-rən      Xargi      bagdama-l-va Gagi-l-va,      mənŋi bagdama-*ja* dəgi-*jə*      ǝ-mu-l-čan.

見る-PST.3SG 悪魔.NOM 白い-PL-ACCD 白鳥-PL-ACCD 自分の 白い-ACCIN 鳥-ACCIN 作る-VOL-INGR-PST.3SG

“悪魔は白い白鳥を見て、自分の白い鳥を作りたくなった”(No.3 p.8 l.5)<sup>50</sup>

<sup>49</sup> 他に、人称所有形で現れるとまだ起こっていないが将来的にその所有者に戻ってくるような行為を表す用法がある。こうした意味での使い方は、他のツングース諸語でも「指定格」として観察されるところであり、風間(1997)にもくわしい。

<sup>50</sup> 訳文後の括弧内は、データとして扱ったテキストの第何話、頁、行を示している。テキストは *Бугады ороп -Эвенкийские народные сказки-* (Бурятское книжное издательство 2001, Улан-удэ) で、ブリヤートにて子供向けに出版された動物の説話集。短い説話全8話が紹介され

## 部分

- (2) Čipa tugəniptin-ji-vi sōkat-mu-ǰə-čǎ-n, tari ǰarin altat-tə-n  
鼠 冬用貯え-INSTR-REFL.SG.POSS 自慢する-VOL-IMPf-PST-3SG そのため 頼む-NFUT-3SG  
čipičkān-mə ələkəs nuǰanǰi nǎkčəkīt-tuk-in aya-**ja** ǰəptilə-**ǰə** ǰəv-dǎ-tin.  
小鳥-ACCD まず 彼の 貯え-ABL-3SG.POSS 良い-ACCIN 食べ物-ACCIN 食べる-CONV-3PL  
“ねずみは冬の貯えを自慢したかったので、小鳥はまず彼自身の貯えから美味しい食べ物  
物を食べようと頼んだ”(No.7 p.22 l.16)

これら例(1)(2)のように、通常の肯定文でも見られることもあるが、最もよく観察されるのは疑問文(例文(3))や否定文(例文(4))の中である。また、否定文の場合、否定代名詞(例文(5))や不存在詞 *āčīn*(例文(6))と結合するときにはより出てきやすくなる。

## 疑問文

- (3) Sindu kətə ǰəptilə-**ǰə** bi-si-n ?  
2SG.DAT 多い 食べ物-ACCIN COP-PRS-3SG  
“君はたくさん食べ物を持っている?”(No.7 p.13 l.13)

## 通常否定文

- (4) Si ələkəc amta-**ja** ə-si-nni til-lə.  
2SG.NOM 最初 味-ACCIN NEG-PRS-2SG 分かる-CONNEG  
“君は最初は味が分からないんだよ”(No.7 p.23 l.11)

## 否定代名詞を含む否定文

- (5) Xomōti-du činǎ-ǰə āčīn, ə-**ja**-val alba-ra-n ō-mi.  
熊-DAT 力-ACCIN 無い 何-ACCIN-PCLE 出来ない-NFUT-3SG する-CONV  
“熊は力がなく、何もすることが出来なかった”(No.4 p.11 l.5)

---

ている。

### 不存在(*āčin*)文

(6) *Alat-čə-n, alat-čə-n, Xomōti-jə-kə āčin.*

待つ-PST-3SG 待つ-PST-3SG 熊-ACCIN-PCLE 無い

“(狼は)待って、待って、熊は全然現れない<sup>51</sup>”(No.1 p.4 l.7)

また次の例文(7)のように数詞“1”と接辞-*vəl* が不定代名詞のように修飾する例もある。

(7) *Umun-ə-vəl ŋinakin-a ačin, miso-ra.*

1-ACCIN-PCLE 犬-ACCIN 無い 走り去る-NFUT.3PL

“一匹の犬もいない、走り去った”(No.6 p.17 l.20)

以上のような、不定対格がある特定の環境で出てくる傾向に関して、対格言語に見られる能格的パターンについて類型論的に書かれた Moravcsik (1978)を参考にして説明を試みる。

Moravcsik (1978)は表12のように3つの類型を認めている<sup>52</sup>。

		他動詞主語	自動詞主語	目的語
I 型	Basic	N	N	A
	Ergative	N	A	A
II 型	Basic	N	N	A
	Ergative	X	N	N
III 型	Basic	N	N	A
	Ergative	N	X	X

表12 対格言語における能格的パターンの組み合わせ

<sup>51</sup> この例文の意味は、会う約束をした熊がいつまでたっても来ないという場面である。不存在というよりも非出現の意味がとれる。

<sup>52</sup> 表12の略号は次のとおり:N: Nominative, A: Accusative, X: 他の格か或いは句。Basic は基本の格体系であり、全ての型で共通している。Ergative は一部に現れる能格パターンの格体系である。

エヴェンキ語の例は不定対格(=X)が使われる点でⅢ型に属すると考えられる。Ⅲ型に属する言語の例として英語、ハンガリー語、ロシア語、リトアニア語、フィンランド語が挙げられている。また、能格的パターンが現れる理由に関して、次のように一般化している(「能格的現象の一般化仮説」と呼ぶことにする)：

#### 能格的現象の一般化仮説

Whenever in a language there are two classes of noun phrases such that members of one class are case-marked ergatively and members of the other class are case-marked accusatively, and there is a semantic difference between the classes related either to activeness of noun phrase referents, or their quantitative properties, or their pragmatic prominence, members of the class that ranks higher on these properties will be marked accusatively and members of the lower-ranking class, ergatively.

(ある言語に、一つは能格的に標示される名詞句クラスと一つは対格的に標示される名詞クラスの 2 つのクラスがあるとき、またそのクラスの間で名詞句の指示対象の能動性や、量的な特性、語用論的な卓立に関して意味的な相違があるときは必ず、それらの特性でより上位に位置づけられるクラスの名詞は対格で、より低い名詞は能格で標示される。)

ここで、ロシア語の生格の用に関する研究で、Moravcsik (1978) にも言及している青木 (1996) を引用する。ロシア語では他動詞の対格目的語 (8) や自動詞の主語 (9) が、否定文になるとどちらも生格になることがあり (10) (11)、これを否定生格の現象と呼ぶ (例文は全て青木 (1996) より引用)。

(8) Ja čital žurnal.

私-主格 読んだ 雑誌-対格

“私は雑誌を読んだ”

(9) Sestra byla v škole.

妹-主格 いた …に 学校-前置格 “妹は学校にいた”

(10) Ja ne čítal žurnála.

私-主格 否 読んだ 雑誌-生格 “私は雑誌を読まなかった”

(11) Sestry ne bylo v škole.

妹-生格 否 いた …に 学校-前置格 “妹は学校にいなかった”

青木(1996)では、ロシア語における生格の特徴について、先行研究を引用しつつ「ロシア語の動詞に支配される生格は、動詞の動作が対象全体に及ばない場合に現れる格で、対象が対格で標示される場合より目的語の Affectedness が低い」としている。また否定生格が出現しやすい条件として挙げられている要因をまとめると次のようになる：

- ・ 名詞がより抽象的または不定的であればあるほど
- ・ 他動詞では「目的語の結びつきによって決まるところの肯定の他動詞節に存在する他動詞性」が低い、或いは「節の他動詞性を低くする否定の強さ」が強いほど
- ・ 自動詞では「肯定の自動詞節に存在する主語が活動的な動作を行なう可能性」が低いほど、或いは「主語が活動的な動作を行なう可能性を弱め、ある場合には主語の存在を否定する」否定の強さが強いほど

これらの傾向が高いほど、否定生格が標示されやすくなると説明している。ここでいう否定の強さの一例として、*ni odin* “ひとつ・ひとりの…も(ない)”, *nikakoj* “いかなる…も(ない)”という語句を挙げている。

これらの説明はエヴェンキ語の不定対格の特徴と、それが現れる環境について上で考察したものによく似ている(但しエヴェンキ語の動詞の種類や他動詞目的語・自動詞主語の名詞の種類については考察できていない)。確かにロシア語はエヴェンキ語との接触により多くの影響を与えているが、不定対格と生格の類似は接触の結果ではなく、ともに“不定的な対象を表す”という特徴から必然的に共通した現れ方が観察される、という可能性も否定できない。つまり、両言語における能格的現象が、ロシア語では対格に対する生格の、エヴェンキ語では定

対格に対する不定対格の“能動性の低さ”が、意味的な違いとなって現れたとも考えられる。

しかし、ツングース諸語の状況をみると、不定対格と呼ばれる格形式をもつ言語は、エヴェンキ語(ソロン語を含む)、ネギダル語だけで、他のエウエン語やナーナイ語、シベ語などは持たない(風間 1999)。また、その不定対格を持たないナーナイ語やウイルタ語、オロチ語などでは、全体の部分を表す用法は処格(-*laa* など)が担っているが、否定との呼応は言語により異なり、かならずしも否定文で使われるわけではない(風間 1997)。エヴェンキ語の不定対格の能格的現象は、ツングース全般には見られない現象と言える。

また、エヴェンキ語と同様に、ロシア語(スラブ諸語)との接触があったフィンランド語には、対格(=属格)に対する部分格があり、部分や不定的な量、そして否定文の目的語、不存在の主体として現れる(White 2008: 74-5)。

以上のことを考え合わせると、不定対格は二次的に得た格形式の形態であり、ロシア語の生格(部分格)の用法から影響を受けたものであると考えられる可能性が強いといえる<sup>53</sup>。ロシア語との言語接触によって、エヴェンキ語に言語変化が起こった例として挙げられる。

#### 4.5 小結

言語接触に関する、類型的な先行研究をみたあとに、エヴェンキの民族の歴史、それに伴う他言語との接触について観察してきた。エヴェンキ語の言語の歴史的な局面は以下の4つが想定できる。

- ① ツングース分裂前の状態
- ② 分裂後、北方ツングースはモンゴルと接触
- ③ 北方へ移動後、ヤクートとの接触

⇒上記接触はゆるやかな長期にわたるものであった(A)

---

<sup>53</sup> フィンランド語の部分格は-a/*ä* ~ -*ta/tä*、ロシア語の生格(sg)は M. -*a*, F. -*i*, N. -*a* であり、エヴェンキ語の不定対格-*ja/jə/jo* と音形式も類似していることは指摘できる。

④ 17世紀のロシアによるシベリア進出以降のロシア語との接触

⇒とくにシベリアの支配が強まるロシア帝国後期からソ連時代は急激に濃厚な接触(B)

モンゴルやヤクート語との緩やか接触時期(A)、そしてそれに続くロシアとの急激な接触時期(B)に起こったと思われる言語変化の例を観察して、検証してみた。前者では相互に収斂的に共通した特徴を持つに至ったと考えられる事例を、そして後者はロシア語からの影響を一方的に受けたと考えられる事例を取り上げた。

次章からは、エヴェンキ語の一致について、ロシア語の急激な言語接触の中でいかにして影響を受け、文法を受容することになったかについて考察してゆく。



## 第五章

### エヴェンキ語の一致の起源

前章まで、エヴェンキ語の置かれている社会的、歴史的状況、伝統的なエヴェンキ語の文法の概要、そして言語接触による変化を観察してきた。広大なシベリアに分布するエヴェンキ族は、周辺言語と接触を持ってきたわけだが、母語の保持に関しては決して積極的な態度ではないことが分かる。特に近年では、ロシア語の支配が強く、言語シフトが多く見られ、母語保持率は他のシベリア諸語とくらべても低い。母語を保持しているとしても、ロシア語とのバイリンガルがほとんどであり、ロシア語からの影響は決して少なくない。

本章よりエヴェンキ語の一致について取り上げて論じる。この一致がエヴェンキ語の文法の中でも特異とされるのは、言語類型論的に、そして歴史的にも関係が深いとされるアルタイ諸語にはみられないこと<sup>54</sup>、しかも、同族言語である他のツングース諸語においても見られないことからである。筆者は、エヴェンキ語における一致という文法現象の受容についても、ロシア語との接触による影響の一つであると主張するわけであるが、一致の起源(第5章)と一致の受入過程(第6章)の2つの段階に分け、以下で論じる。

#### 5.1 エヴェンキ語の一致をめぐる議論と整理

エヴェンキ語の一致については、ツングース諸語の中でもエヴェンキ語だけ(エウエン語の一

---

<sup>54</sup> チュルク諸語には一致は存在しないが、形容詞と名詞の間にある数の一致は、例外的な“一致”の一種と見られている。また、モンゴル諸語にも一致はないが、ときに指示詞・形容詞と名詞で数の一致があることがある(しかしこのときでも名詞に複数標示はない)。

部を除く)にみられ、アルタイ諸語にも見られないことはすでに指摘されており(Колесникова 1966: 43)、ロシア語の影響の可能性に言及する先行研究もあるが(風間 1994、津曲 1996: 184)、結論には慎重であり、さらなる考察が必要としている。先行研究において、ロシア語の影響であると明言するのに躊躇していたのは、ロシア語起源であると言い切れない可能性があること(ツングース諸語にはもともと一致がなかったと言い切れない可能性と、ロシア語以外の言語との接触可能性)、そしてロシア語からであるのならどのような理由によるのかが不明確であることの2点が、大きい要因であったといえる。本来この2点は、扱えるデータの制限から、同じ舞台で論じることが不可能である。前者の一致の起源については、エヴェンキ語の一致について詳細にまとめ、歴史的に実証されるデータと、地域的な言語的事実を合わせて考察すれば考察が可能である。これに対して、後者の一致の受容過程については、徐々に一致が受け入れられていく途中段階を示す資料は残されていないことから、データによる実証はできない。可能なことは、残されたデータを分析することで、現段階での最も妥当と考えられる仮説を立てることである。

本第5章では、エヴェンキ語の一致はどこから来たのかについてのみ注目し、検討する。まず、エヴェンキ語における一致の特徴を再検討したあと、エヴェンキ語の古いデータや周辺言語での状況、そして一致を受け入れるという言語変化が他の言語にもあるという事実を示す。そして、こうした事実から他のツングース諸語や中国内エヴェンキ語方言と異なり、シベリア・エヴェンキ語がロシア語からの影響で一致を受け入れたとする以外には考え難いことを示す。

次の第6章では、ロシア語からの影響を受け、どのような過程を経てエヴェンキ語内で新たな文法として定着するに至ったかについて考察する。但しこの段階では、既に一致が定着した後と見なされるエヴェンキ語の古いテキストデータを使うため、一致の受容過程(要因や経路など)をデータにより確認することは難しい。そのため、筆者が新たに認定する、エヴェンキ語内に観察されるいくつかの言語スタイルの間に見られる文法の相違をもとに、受入過程の仮説を提唱する。

## 5.2 エヴェンキ語の一致について

エヴェンキ語の一致については、語結合の手段における位置付けに関して、第三章の文法概説で触れた。ここでもう一度定義を述べると、一致とは語結合の方法ひとつで、エヴェンキ語では広く観察される手段である。修飾語と被修飾語の間においてみられ、主要部のとる数・格の接辞形式と同じ形式が、修飾部にもつけられる統語構造のことである。以下で、さらに詳しく観察する。

Колесникова(1966)によれば、エヴェンキ語の一致には二種類があるという。この違いは、修飾する語の種類によって異なると指摘している：

### (1) 数と格が一致するとき

修飾語類： a. 形容詞

b. 形動詞

c. 序数詞

d. いくつかの定代名詞

e. 疑問・不定・否定代名詞

f. 名詞(定語や付語の機能を果たすとき)

g. 不存在名詞 *ač̣in* 分析形のとき(この場合定語が否定語の後に来る)

### (2) 格のみが一致するとき

修飾語類： a. 数詞： 例) *umun, ĵur, ilan* など

b. 集合数詞： *ĵuktā* “両方(の)”

c. 不定数量形容詞： 例) *kə̌tə* “たくさん”, *ugukun/adikun/asukun* “少し” など

d. 疑問数量詞： 例) *oki, adi, asun* “いくつの”

e. 量的総量を意味する定代名詞： *upkat, suvul* “全て(の)”

(1)と(2)で挙げられていないものも含めて、一致に関して揺れがあるものが次の3つの語類である：

(3) 所有形容詞: 例) *minŋi* “私の”, *sinŋi* “お前の” など

(4) 指示詞: 例) *ər* “これ”, *tar* “それ”

(5) 数詞: 例) *umun* “1”, *jur* “2”, *ilan* “3” など

所有形容詞は、それが意味する関係から、所有人称語尾を伴う語結合“相応”をも標示されることがある。つまり、本来は一致だけで語結合の関係は明確であるのに(6a)相応をも標示する(6b)という、いわば重複して語結合方法が共起する例と言える。

(6) “私の犬(pl.)を”

a. *minŋi-l-və* *ŋinaki-r-va*

my-PL-ACCD dog-PL-ACCD

b. *minŋi-l-və* *ŋinaki-r-va-ɣ*

my-PL-ACCD dog-PL-ACCD-1SG.POSS

所有人称形容詞と、所有人称語尾との共起は、そもそも所有を表す構造の違いがあることに関わっている。Nedjalkov (1997) には、方言によって言い方が異なるという記述がある。

(7) “私の家” 南・北方言 *minŋi d'u-v*

my house-1SG.POSS

東方言 *bi d'u-v*

1SG.NOM house-1SG.POSS (Nedjalkov 1997: 210)

エヴェンキ語は、属格に当たる格標示を欠いており、所有表現は(7)の東方言のように、所有者名詞は主格(ゼロ格)で被所有物の前にくるのが本来の形だったと考えられる。語尾-*ŋi* が属格の名残であるとの指摘もあるが、この接辞が義務的に出てくることはなく、形容詞を派生する接辞としてみるほうが妥当である。とすれば、(6b)は、相応が標示されているため、余剰的で

あると言える。

また一方で Василевич (1940) は、語結合における一致と相応について、本来は相応だけでよいところに一致も現れるという、(6) で見た例とは逆の場合もあると指摘している: (8)。

(8) *kuṇaka-r-du kətədi-du-tin*

child-PL-DAT many-DAT-3PL.POSS (Василевич 1940: 136)

“子供たちの大半に”

ここでは、*kuṇaka-r* “子供たち” の後についている与格語尾 *-du* は、本来必要ない。つまり、相応さえ示していれば2語の関係は明確であり、一致は必要ない。Василевич (1940) は、こうした重複した語結合は、数量に関わる名詞があるときに起きやすいと記述している。

指示詞に関しては、主に数のみ一致を起こし、格に関しては一致を示さないことが多い。形容詞による名詞修飾では、現在では一致に揺れがほとんど見られないのに対し、指示詞が修飾するときには一致が示されない例は、現在でもよく観察される。指示詞が、他の形容詞などの修飾語とは異なる振る舞いをしているのは、特徴的である。というのも、ロシア語では指示詞も被修飾名詞と一致を完全に示すためである。エヴェンキ語に残された“連接”による修飾構造と見ることもできる。

また、数詞に関しては、その語結合構造に揺れが大きい。Колесникова (1966) は、*ilan* (三)、*ju* (家) につく、*-du* (与格)、*-l* (複数接辞) の有無に関して次の6つの構造のパターンを示し、その頻度と方言により差があるものの、全てのパターンが観察されると指摘している: (9)。

6つの形式を、一致の有無(有るときは何が一致しているのか)で判断すると、b と e の2つだけが一致という語結合を示していると考えられる。また、数量詞がかかわると複数接辞の標示や一致に揺れがあったように、語結合とは別の概念、つまり数詞と名詞による数量詞句の構造に関する問題がかかわっているとみるべきである。そうすると、格接辞の一致に関していえば、d, e, f はそれぞれ、a, b, c の変異と見なすことができる。

		一致の有無	主要部はどちらか	文法
(9) “3つの家で”	a. ilan jū-dū	×	家	= 連接
	b. ilan-dū jū-dū	○ : 格		= 一致
	c. ilan-dū jū	×	3	?
	d. ilan jū-l-dū	×	家	⇒ a'
	e. ilan-dū jū-l-dū	○ : 格		⇒ b'
	f. ilan-dū jū-l	×	3	⇒ c'

6種類の変異の揺れがあるとの指摘であるが、語結合の点からみると、連接か、一致かの違いが大きな差であると言える。ただし、中でも例外的な形式は(9c/f)であるが、この場合、格標示は主要部にまず示されるというエヴェンキ語の根本的な形態構造を考えると、主要部が数詞のほうにあると見ることができる。このように考えることは、ロシア語からの影響を考えると妥当であるといえる。ロシア語において数詞や数量詞の構造は、名詞が生格 (genetive) となって数詞・数量詞に従属する構造をとるためである。

以上、エヴェンキ語における一致について、先行研究を再整理してみた。修飾する語類によって一致の揺れが観察されるが、所有や、数、ロシア語の数詞の影響などの、語結合という形態的論点と直接的には関係のない要因を除けば、一致を示さない指示詞や数詞は全て連接による修飾構造が残っているものと見ることができる<sup>55</sup>。エヴェンキ語が、従来は連接による語結合だけを持っていたところに、一致という語結合を新たに受け入れたという言語変化の方向を考慮すると、指示詞や数詞など一部の語類では連接による語結合が名残として残っていると見ることができる。

<sup>55</sup> 意味的に他の一般的な形容詞の語類とは区別されるためかもしれないが、その理由についてはここではこれ以上は触れない。

### 5.3 エヴェンキ語の一致の発生と変化の方向

以上に見てきたように、エヴェンキ語における一致は、歴史的にも、そして言語類型論的にも、言語変化により後から生じた文法特徴であると考えるのが妥当である。しかし、エヴェンキ語の歴史や、ツングース諸語の比較言語学的先行研究において、一致の発生について詳細に触れたものはない<sup>56</sup>。

ここで、エヴェンキ語が一致を持たない状態から持つような方向へ変化したことの根拠となる事実を挙げておく。

- ① 他のツングース諸語における一致の不存在
- ② エヴェンキ語の東方方言における一致の不存在(非義務)

#### 5.3.1 他のツングース諸語における一致の状況

ツングース諸語の中でも、エヴェンキ語以外の諸言語には、こうした一致は見られない。これらの言語では、他のアルタイ系諸言語と同じように、連接によって示される。つまり、修飾語は修飾される名詞の前におかれるだけである。

例えば次の例は、ネギダル語からの例である。ネギダル語は、ツングース諸語の中でも北方語群として、エヴェンキ語やエウエン語と近い関係あるとされている言語である。しかし、地理的な分布は、エヴェンキ語やエウエン語以外の他のツングース諸語と近接し、ロシア沿海州の地域に集中している。

- (10) bajjɯm    taŋɯndɯn    giligdi/gilisi    muuʃɯ    sɯlkɯm    dæəlbi.  
朝      毎に      冷たい      水で      洗う      自分の顔を  
“私は毎朝冷たい水で顔を洗います” (風間 2002)

ネギダル語の道具や手段を表す具格標示は *-ji* である。例文(10)では形容詞 *giligdi/gilisi*

<sup>56</sup> ツングース諸語のみならず、アルタイ諸語においても一致を持つ言語はない。つまり、アルタイ諸語研究のなかでは、一致を持たないものがもともとの文法であるという考えが当然のことであると受け入れられているといえよう。

“冷たい”が修飾している先の名詞 *muu* “水”についているのが分かるが、修飾している形容詞そのものにはついてない。つまり、一致は見られない。

風間(1994)は、ナーナイ語の例を中心にツングース諸語などの周辺言語について、一致の現象を他の文法現象と絡めながら詳しく分析している。ナーナイ語では、本来の形容詞-名詞という語順においては一致は見られないが、形容詞が名詞よりも後ろに来る時に一致が見られるという。これを風間は「修飾語の遊離」と呼んでいる。また、ほとんどが対格においてのみ見られるという特徴もある。

下に、形動詞形が使われる例を引用する：

(11) *mii joani buuxəni aapo-ji-i xarxixambi.*

私は 彼が くれた 帽子で(自分の) 振った

(=帽子を)

(12) *mii aapon-ji, joani buuxən-ji-ə-ni, xarxixambi.*

私は 帽子で 彼が くれた(の)で(その) 振った

(=帽子を)

形動詞形“くれた”が、名詞の前にある(11)では具格接辞 *-ji* が名詞にのみついている。しかし、同じ形動詞形が後置されている(12)では、形動詞形にも具格接辞がついており、一致を示している。一見すると、確かにエヴェンキ語と似たような構造に見えるが、こうした遊離形動詞形には所有人称語尾が必ずつくという。

風間(1994)では、結論としてナーナイ語のような遊離を条件とする一致を A タイプ、エヴェンキ語のような通常の語順においても求められる一致を B タイプとして区別する。そして A タイプの一致はツングース諸語ないしはアルタイ型言語には本来的に持ち得る特徴であり、その後 B タイプの一致が発展した素地にもなり得るとしている。そして、「ではなぜ発展したのか、という点は明らかではない。他言語からの間接的な影響については再考が必要」だ、と述べている。また一致の起源については、「安易に影響説を採るわけにはいかないだろう」と慎重な態度を



とっているが、語順との関係について、「はたして語順は実際にはどの程度自由なのか、またどんな要素で、どんな条件でなら自由なのか。これらについて十分に明らかにした上で「一致」との相関を考えねばならない」と指摘している。本研究はいわば、この問題を取り上げ一致の起源について考察するものである。

一方、エヴェンキ語と系統的に近い関係にあるエウエン語にも一致があるとされる。教師用教材としてエウエン語の文法について書かれた教科書には次のように書かれている：

一致とは、主要部が従属部に同じ数と格を要求する従属結合のタイプを指す。この結合は修飾語と被修飾語の間でおこる。従属させる語の活用が従属する語に同じ活用をさせるときは、一致は完全になる：

- 例) *anjamta ju* “新しい家(単数主格)”  
*anjamta juw* “新しい家を(単数対格)”  
*anjamtal jul* “新しい家々(複数主格)”  
*anjamtal duk jul duk* “新しい家々から(複数奪格)”

一致は完全でないこともある、つまり数だけ、あるいは格だけの一致のときもある。

文語においては、数と格についての完全一致の形式は、修飾語として形容詞、形動詞、指示詞および疑問代名詞、序数詞、分配数詞のときに起こり、基数詞のときはときどき起こる。

(Новикова, Гладкwa и Роббек 1991: 205[筆者訳])

そして、例がいくつか挙げられているので下に引用する：

- (13) Pioneral, xəbjəni-***l-bu*** ikə-***l-bu*** ikəni-kər, ɲənə-ddə.  
pioner-PL happy-PL-ACC song-PL-ACC sing-CONV go-PRS.3PL  
“ピオネールたちは、楽しい歌を歌いながら、進んでいく”

- (14) Bujusəmpə-l okat xöli-lə-n kuñd-di- əgdə-*m* ħobači-*w* ora-*m* itči-tən.  
 hunter-PL river.NOM upper-LOC-3SG.POSS run-PART-ACC big-ACC white-ACC reindeer-ACC see-PST.3PL  
 “獵師たちは、川を渡って走る大きな白いトナカイを見た”

このようなエヴェン語における一致の義務性は、Цинцнус (1949: 99) にも触れられている。一方で、Колесникова (1966: 43) では“エヴェン語における一致は、格および数について見られるが、規則的でない。このことは、文語では格のみ一致すると決められていることにも現れている”と述べている。エヴェンキ語よりも、より東側に分布するエヴェン語では、エヴェンキ語と比べてかなり最近に至るまで、一致は規則ではなかったことが伺える。しかし、文語の制定や教科書作成に際し、一致を規範化している動きがあることが分かる。この動きは、エヴェンキ語における教育の現場と同様であると言える。

### 5.3.2 エヴェンキ語の東方言における一致の状況

Василевич (1940)、Колесникова (1966: 44) には、エヴェンキ語の一致は、ほとんどの方言で見られるが、特に南方言と北方言では規則的に表れる一方で、東方言では「様々な方法がまばらにある」という記述がある。しかし、例えば Василевич (1940) はシベリア全域の調査で得られたフォークロアのテキストを地域別にまとめて出版した文献資料であるが、そこに収められている東方言のテキストを見る限り、原則としてどの方言でも一致が見られる。

東方言で一致がなかったと確認できるのは、Castrén (1856) にある次のような記述である。

形容詞が曲用するのは、それが名詞として使われるときだけであり、形容詞としては決して曲用しない

例)<sup>57</sup> aja bəjədú  
 aja bəjədúk  
 aja bəjəl

(Castrén 1856)

<sup>57</sup> 引用元にはついていないが、グロスを振ると次の通りになる: *aja bəja-dú* (良い 人-DAT), *aja bəja-dúk* (良い 人-ABL), *aja bəja-l* (良い 人-PL)

カストレンは、沿バイカルにいたエヴェンキ語を記述しており、これらは今ではハムニガン・エヴェンキ族とみられ、ブリヤート語の影響を受けていたとも考えられる。

第4章で見た通り、シベリア・エヴェンキととくに近い関係にあると確認された中国のエヴェンキ語ではどうであろうか。

エウエンク語では、形容詞や形動詞形が修飾語として出てくる時は、属格語尾あるいは主格のままで修飾するという(D.O.朝克 1995: 247)。

(15) bu gəɾəŋdʒiwəl nanda dʒaandag-ga dʒaandagare.

we all beautiful song-ACC sing.PRS.1PL

“私たちみな美しい歌を歌う”

またオロチョン語では次のような例がある

(16) buu omon ŋamaadʒɪ uluki-jə bakatʃaawon.

we one hundred squirrel-ACC find.PST.3PL (胡 2001: 176)

“私たちは100匹のリスを獲った”

(17) tari kəʊkan waa-tʃaa kumaka-wa məənduwəl gatʃaa.

that boy kill-PART deer.ACC to.themselves get.PST.3PL (胡 2001: 183)

“(彼らは)あの子が仕留めた鹿を自分たちにと取っていった”

ロシア領内のエヴェンキ語では、今では東方言でも一致は通常見られるが、中国領内では一致が見られない。言語接触により一致をもつようになったという言語変化の方向を考えると、ロシア語との接触がほとんどなかった中国領内のエヴェンキ語が一致を持たないことは、ロシア語からの影響が言語変化の要因であることを確認させる事実であると言える。

## 5.4 周辺諸言語における一致

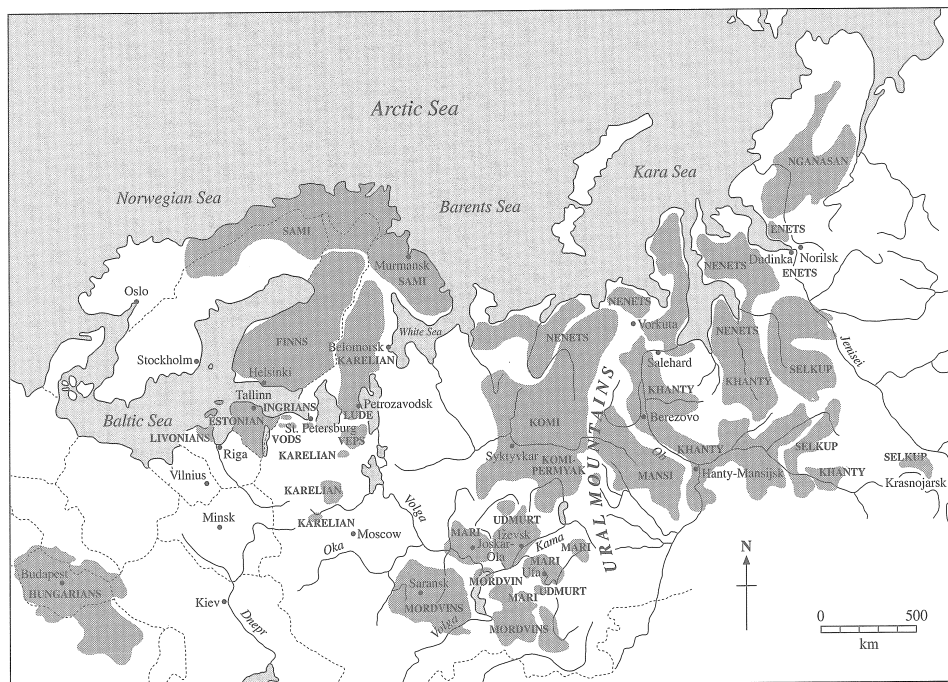
シベリアから中国東北部に分布するエヴェンキ語の周辺には様々な言語が存在する。特に、ロシアによるシベリア征服から、エヴェンキと同じようにロシア語に支配され、今日に至るまでロシア領の一部であり続けた言語は少なくない。その中には、例えばヤクート語や、ブリヤート語のように、話者数が30万人以上に及ぶ、少数とは呼べない言語も含まれる。しかし、そのような一部の大言語を除けば、ほとんどは数万人から数百人までの話者数しかいない少数言語である。ロシア語の接触の強さ(程度)を考えると、少数言語の一つであるエヴェンキ語だけが特別にロシア語からの影響を受けていたわけではないことが指摘できる。

では、まず地域的、及び言語類型論的にエヴェンキ語に近いと考えられる周辺言語を観察し、文法における“一致”がどのようにみられるのかをまとめておきたい。

一致を持つようになった言語	フィン諸語、エウエン語、ガナサン語
一致を失った言語	エストニア語
一貫して一致を持たない言語	中国エヴェンキ諸語、チュルク諸語およびモンゴル諸語、ウラル諸語など

### 5.4.1 一致するようになった言語

アルタイ諸語と同じくシベリアから西へ広く分布するウラル諸語(分布については地図1参照)を調べると、中にはエヴェンキ語と似たような変化をしたと見受けられる言語がある。ここでは深くは検討はしないが、それぞれ言語における状況を見て、この後エヴェンキ語について考察するための参考とする(ウラル諸語の系統関係は図1を参照されたい)。



地図1 ウラル諸語の地理的分布 (Marcantonio 2002 より)

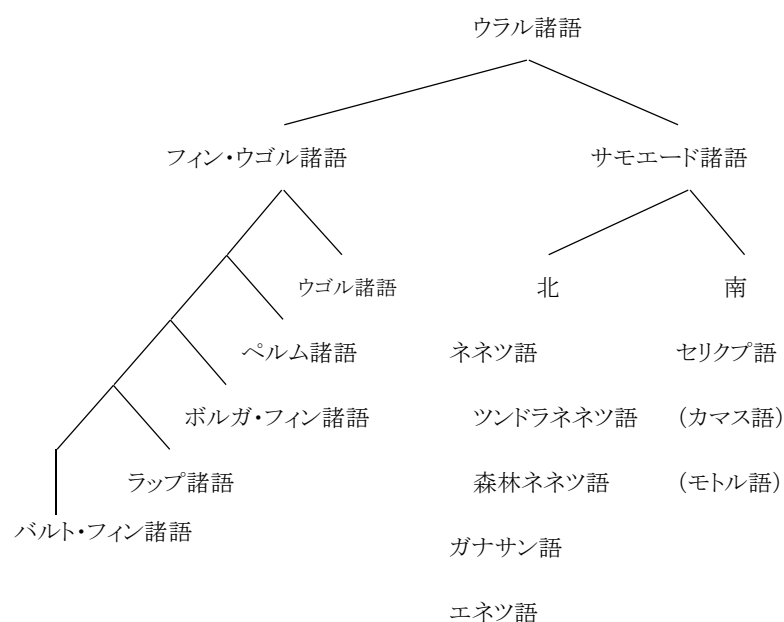


表1 ウラル諸語の系統関係

一般にウラル諸語は祖語の段階では一致は存在せず、現代の多くのアルタイ諸語と同じように修飾語は非修飾名詞の前に置かれ、形態的な変化をしない並置の手段(つまり“連接”)を有していたとされている(Janhunen 1981)。現在の多くのウラル諸語にもこれは共通しているが、一部の言語に一致が見られる。

エヴェンキ語北方言から程近い地域に分布するサモエード諸語中でも、ガナサン語は主格・属格・対格においてのみ一致を示す(一方で、方向・与格、場所・道具格、離格、沿格では一致しない)<sup>58</sup>。

西の端に位置するバルト・フィン諸語では、とても古い時代から印欧語との接触があるためか、印欧語の(現代のバルト諸語やスラヴ諸語に見られる)一致と同じ状況を示している。

#### フィンランド語の例

(18) Asu-mme iso-*ssa* keltaise-*ssa* talo-*ssa*. (White 2008: 296)

live-PRS.1PL big-INS yellow-INS house-INS

“私たちは大きい黄色い家にすんでいる”

(19) Menin tapaamaan maa-lla asu-va-*a* Kaisa-täti-*ä-ni*. (White 2008: 259)

go-PST.1SG meet-INF.ILL country-ADS live-PART-PRT aunt.Kaisa-PRT-1SG.POSS

“私は、田舎に住んでいるカイサおばさんに会いに行ってきた。”

形容詞による修飾の場合でも、あるいは形動詞形による場合でも、修飾する語や句は、被修飾名詞の前に置かれるのが普通である。このとき、数と格において一致が見られるという点はエヴェンキ語と全く同じである。また、エヴェンキ語でも近年、疑問代名詞を関係代名詞として複文をつくる構文が見られるようになってきているのだが、フィンランド語では関係代名詞がより一般的に用いられる。形動詞形による修飾の場合、修飾される名詞は、関係節文のなかに

---

<sup>58</sup> その他サモエード諸語では、ネネツ語の一部方言において、数の一致があるとされている(Терещенко 1973: 49-)

おける文法的地位は主語に限られてしまうが、関係代名詞の場合はそれに限られない。この使用される範囲の広さも、関係代名詞の構文のほうが一般的になった理由の一つと考えられるだろう。

## (20) 形動詞構文

## 関係代名詞構文

kirjasto-ssa lue-ttava kirja = kirja, jota lue-taan kirjasto-ssa

library-INS read-PART book book REL.PRO.PRT read-PASS library-INS

“図書館で読まれている本”

フィンランド語では関係代名詞がよく使われ、形動詞形による関係節構文は“古めかしい・固い表現”など、使用範囲が限られている。ウラル諸語の西端に位置するバルト・フィン系諸語は、古くからスラブ、ゲルマン、バルト諸語の印欧語と接触を持ってきており、これら印欧諸語に特徴的な、文法的な一致や、関係代名詞による構文が広く使われるようになってきたと考えられる。エヴェンキ語が、そのような特徴をもつ印欧諸語のひとつであるロシア語と接触を持つようになったのは、バルト・フィン諸語と比べれば最近のことに過ぎない。しかし両者は、一致という文法現象に関して、接触による言語変化の方向としては同じ方向へ向かっていると見ることができ。つまり、エヴェンキ語が一致を持つようになった言語変化は自然な変化として捉えることができると言える。

以上、基本的にウラル諸語の中ではバルト・フィン系諸語が文法としての一致を持っていると言え、一方で他のウラル諸語は一般的には一致は持っていないとされている。しかし、ペルム諸語(ウドムルト語とコミ語)では、特別な場合に一致が観察されることがある。

ウドムルト語では、3人称単数の所有接辞(と同形式の接辞)が形容詞に付くことで定性を示し、単独で名詞としても使われるが、その形の形容詞が名詞の前に来て修飾する場合は一致を示す(21)。詳細な検討がなされる必要があるが、少なくとも、常に形容詞と名詞の間に一致をするというエヴェンキ語とは異なる文法現象であるといえる。

(21) jegit-jos-ĩn-ĩz                  nĩl-jos-ĩn (Csúcs: 295)

young-PL-INS-3SG.POSS   girl-PL-INS

‘with the young ones, with girls’

また、コミ語では形容詞が修飾する名詞の後に来る場合に一致を示す(22)。これも、1例だけでは明確な結論は出せないが、5.3.1で述べた風間(1994)で挙げられているナーナイ語などにもみられる形容詞が遊離している場合の一致に類似しており、語結合の方法として一致とは別のものと見ることができる。

(22) vaj-Ø            te,            Varuk,            nʲanʲ-te,            čjěskĩd-ēs    da            pēsʲ-ēs

bring-IMP   2SG.NOM   VARUK   bread-2SG.POSS.ACC   tasty-ACC   and   warm-ACC

‘Vera, will you bring some bread, tasty and warm’ (Hausenberg: 319)

以上、エヴェンキ語と同じように一致を持つようになった諸言語における状況を観察した。ここでは概要を紹介するだけに留めるが、同様の例を見ることでエヴェンキ語における一致の借用は自然な言語変化であると確認することが出来る。

#### 5.4.2 一致を失った言語

ウラル諸語は、アルタイ系諸言語と同じく、本来は一致をもってはいなかったと考えられる。その後、前節で見たように、その西方に分布するバルト・フィン諸語は、印欧語のゲルマン諸語やバルト・スラブ諸語との長く強い接触ののちに、一致を受け入れていったとされる。

エストニア語は、そのバルト・フィン諸語に属する言語であるが、同語派の他の言語とは違い、一致を完全には示さないことがある<sup>59</sup>。

例えば、形容詞は、様格、到格、欠格、共格のときだけ、被修飾名詞との間での一致を示さない。エストニア語やフィンランド語などのバルト・フィン諸語では、14の格があるとされるが(言

<sup>59</sup> 他に、ハンガリー語は指示詞のみ一致を示し、サーミ語では形容詞が修飾語として名詞の前にたつときの特別な形態的变化がある。



語ごとに多少の差はある)、その主格をはじめとする10の格では一致をするにも関わらず一部の格では一致がないのである。表2は、フィンランド語での形容詞＋名詞の格活用と対照させたパラダイム(単数形のみ)である。

	フィンランド語	エストニア語
単数 主格	nuori ihminen	noor inimene
属格	nuoren ihmisen	noore inimese
分格	nuorta ihmistä	noort inimest
入格	nuoreen ihmiseen	nooresse inimesesse
内格	nuoressa ihmisessä	noores inimeses
出格	nuoresta ihmisestä	noorest inimesest
向格	nuorella ihmisellä	noorele inimesele
接格	nuorelle ihmiselle	noorel inimesel
奪格	nuorelta ihmiseltä	noorelt inimeselt
変格	nuoreksi ihmiseksi	nooreks inimeseks
様格	nuorena ihmisenä	noore inimesena
到格	-	noore inimeseni
欠格	nuoretta ihmisettä	noore inimeseta
共格	nuorine ihmiseneni (pl のみ)	noore inimesega

表2 形容詞に修飾された名詞句の活用(エストニア語の例は松村(1991)より)

また、ウラル諸語には、アルタイ系諸語で形動詞形と呼ばれるものに相当する動詞の分詞形があり、過去と現在の2つの時制、能動と受動(非人称)の2つの態にしたがって4つの形式をもつ。基本的に、形態的には形容詞と同じ振る舞いをするのであるが、エストニア語では過去分詞(能動と受動の2つとも)は、被修飾名詞との間で一致をしめさない(Tuldava 1994: 238)。例(23)は、受動過去分詞の例であり、被修飾名詞は格変化をしているが、修飾する分詞は不変である。

(23) ava-tud                      aken                      “開けられた窓(が)”

open-PART.PASS    window.NOM

ava-tud                      akna                      “開けられた窓の”

open-PART.PASS    window.GEN

このようなパラダイム内における非対称性は、変化の原因を探るうえで興味深い現象である<sup>60</sup>。このエストニア語の例は、ここではエヴェンキ語とは逆に一致が言語変化の結果消滅することもある例として捉えることができる。その上で、エヴェンキ語においては他のツングース諸語と比較して見ても、エストニア語のようにもともと一致があった状態から消滅する方向へ変わりつつある状態にある、とは考えられないと言すべきである。

#### 5.4.3 一致を持たない言語～接触によっても変化しなかった言語

上で見たように、言語の歴史の過程で一致という文法を一時期であっても持っていた言語は少なくない。言語変化の経済性から見ると、エヴェンキ語のようなより複雑な形態的構造を伴う一致を持つようになった言語というのは、言語変化の方向として決して多くない例といえよう。

エヴェンキ語のこの言語変化はロシア語との接触によるものであると考えているわけであるが、同じような言語状況であっても一致をもつことはなかった言語を取りあげてみたい。言語類型論的にも文法構造がたいへん類似している、他のアルタイ諸語である。特に、エヴェンキ語とも接触をもち、語彙借用や文法の類似が観察されるヤクート語とブリヤート語を見ておきたい。

#### ヤクート語

(24) Min            uu-bun            ıraax-tan    da    ıraax-tan    bah-a-bīn    ee,

1SG.NOM 水-1SG.POSS.ACC 遠く-ABL PCLE 遠く-ABL 汲む-PRS-1SG PCLE

en            bukatīn    bil-bet                      sir-gitten.    (Убрятова 1976: 156)

2SG.NOM 全く            知る-PART.NEG    土地-2SG.POSS.ABL

<sup>60</sup> 一致を失うということに、他の言語との接触による直接的な原因はないかもしれない。過去分詞が、複合完了形で繫辞と一緒に使われることが多いことや、分詞構文で副動詞的な役割をもつことなどが、一般の形容詞類とは区別される大きな理由ではないかと思われる。

“私はとっても遠くから水を運んで来るんだよ、お前の知らない所から。”

#### ブリヤート語

(25) Aldar-ai      bar'-aad   bai-han      tülx'üür-iin'   multar-s'a-ba(-φ). (Skribnik 2003: 126)

アルダル-GEN   持つ-CONV   COP-PART   鍵-3SG.POSS   脱落する-PERF-PST.3SG

“アルダルが持っていた鍵が落ちた。”

ヤクート語においても、ブリヤート語においても、基本的に、関係節をつくるときは修飾する名詞の前に形動詞形で導かれた節がくる。そのため、形動詞形と被修飾名詞は、ふつう連続することになる。また、両言語に共通していることは、節内の主語の表現方法である。節内でこそ、ヤクート語では主格で、ブリヤート語では属格で現れてはいるものの、人称接辞は、被修飾名詞の所有人称接辞に現れているのである(3.3.2参照)。これは、いわゆる相応とよぶ語結合方法と同じ構造をとっている。エヴェンキ語では、節と被修飾名詞の間に相応は見られない。

ロシア語と強い接触を持ってきた、そして現在においても接触は生じているという環境はエヴェンキ語と変わらない。また、この3つの言語は地理的に近いこともあり、歴史の中で相互に影響を及ぼしてきたことも見てきた(4.3参照)。しかし、エヴェンキ語とはおかれている社会言語学的環境の異なるヤクート語やブリヤート語では、少なくとも一致の現象については、まったく影響を受けていないことが分かる。

### 5.5 小結

現代エヴェンキ語においては、ロシア語と違い、一致が完全に見られるのは形容詞類修飾語と名詞との間であり、数詞や指示詞と名詞の間では揺れがあることを見た。一部に、一致が生じる以前の語結合方法が残っていると見る事が出来ることを指摘した。

また、他のツングース諸語や、ロシア語とは接触していない中国内のエヴェンキ語方言では一致が現在も見られないことを確認した。シベリア・エヴェンキ語内においても、テキストとして

は残っていないが、カストレンの19世紀中頃のエヴェンキ語資料には一致がないという記述があることを確認した。これら資料で確認できる一致の有無を、歴史的、地理的観点からまとめると、表3のようになる。

	ロシア影響下		満洲・中国影響下
ツングース語 (北方ツングース分岐前)	×	×	×
<i>Castrén 1856</i>	[東方言] ×		
<i>Poppe 1927</i>	[ソロン語] ×		
近現代エヴェンキ諸語 (1930年代以降)	○	(エウエン語) △	×

表3 テキスト資料で確認できるエヴェンキ語の一致の有無の時間的、地域的変遷

(○は一致が見られる、×は一致が見られない、空欄は資料がないことで確認不可を示す)

この表から分かることは、もとは一致がない状態から一致を持つようになったこと、そしてロシアのシベリア侵入が古くからあった西側のほうから、また、現在ではロシア語の影響がある地域のみで一致が観察されているという事実である。

以上より、エヴェンキ語は、ロシア語の影響を受け一致という文法を借用することで、一致を持つようになったと考えるべきである。また、一致を持つように変化した他の言語も一般に見られることを示し、このような言語変化は自然であると考えられること示した。

## 第六章

### エヴェンキ語における一致の受容仮説

5.1で見たように、本章ではエヴェンキ語の一致の受容の第2段階である受容過程について考察する。なぜ一致をもつようになったのかという疑問に対して、エヴェンキ語内に見られる語順の違いに着目し、その理由を推測してゆく手法をとる。

エヴェンキ語のデータを見てゆくと、書かれている内容によって区別される文体によって文法的な相違が観察される。その文体は、内容がエヴェンキの文化風習であるか、ロシア語からの翻訳であるか、あるいは話者が完全なバイリンガルであるかなどの点から、ロシア語との接触の過程を反映していると考えることができ、古い言語資料がほとんどないエヴェンキ語においては、重要な局面を示してくれている。この文体がスタイルであり、スタイル間にみられる相違を利用して古い段階を再構することができると考える。扱う資料の間に時間的な差は大きくないことから、いわば共時的な面から通時的な変化を観察する試みということができる。

本章では、スタイルについて述べたあと、データとして扱うエヴェンキ語テキストをいくつかのスタイルに分類する。そして、そのスタイル間に見られる相違について言及する。その後、スタイル間で異なる語順と一致の関係を考察し、エヴェンキ語が一致を受け入れることになった過程について考察する。

## 6.1 方法と仮説

前章で見たように、エヴェンキ語の一致はロシア語との接触によって受け入れた文法であると考えられる。しかし、その導入過程については、エヴェンキ語史の中で一致のない段階と一致がある段階は認められるものの、一致が徐々に広がっていく過程を示すデータは残されていない。表1にみるように、ロシア語との接触以前の古い段階のエヴェンキ語は(表には仮に“ツングース語”として載せている)、ツングース諸語や古いエヴェンキ語東方言に記述されている通り、一致がなかったと考えられる。その後17世紀頃から始まるロシア語との濃厚な接触を経た後、1930年代からエヴェンキ語のテキストが残され始めるのであるが、そのテキストでは一致は既に現れている。

	一致の有無
ツングース語 (ロシア語と接触以前)	一致なし ↓
ロシア語との接触(17c~)	?
(1930年代以降)	↓
現代のエヴェンキ語	一致あり

表1 確認できるエヴェンキ語の接触の歴史と一致の有無の相関

つまり、ロシア語との接触により多大な影響を受けたエヴェンキ語であるが、その過程を確認できる資料はなく、表1に破線で囲んだ部分は不明である。

この不明な部分で何が起こったのかを推測する方法は、一致のなかったツングース語時代の語順と、1930年代以降に残っているテキスト間に見られる語順、特に動詞の形動詞形による関係節とその修飾する名詞の語順に見られる差をもとに、中間段階を再構するものである。今、次節以下で詳細に見る前に、考察の概要を示しておく。表2は、形動詞形(VP)と、何らか

の格接辞(-case)を伴う被修飾名詞(N)の語順を簡略して示している。表1に挙げたように、実際に確認できるのは、表2にあるような段階の語順と一致の有無の状況である。

ツングース語	ロシア語と接触	現代のエヴェンキ語
VP + N-case	?	スタイル $\alpha$ -----> VP-case + N-case  スタイル $\beta$ -----> N-case + VP-case

表2 確認できるエヴェンキ語の VP と N の間の一致の有無

現代のエヴェンキ語では、なんらかの理由でスタイルが生じ、その両者の間で語順が異なって現れていることが観察される。また、両スタイルには一致がすでに生じており、文法としては定着している。

このような分布を見ると、まず、ロシア語と接触する過程でスタイルの違いが生じ、一方のスタイルでツングース語のような従来の語順が守られなくなった段階が考えられる。そのスタイルでは修飾関係が不明確になることから、ロシア語の一致を取り入れ、語結合の関係を標示するようになる。そして一致が他のスタイルへも広がり文法として定着してく、とみるのである。この変遷を示したのが、表3である。

次節より、ロシア語からの影響を考慮して分類した具体的なエヴェンキ語のテキストと、それぞれで現れる語順の相違を詳しく検討することで、以上のようなシナリオがエヴェンキ語の中で起こった言語変化の仮説として妥当であることを論じていく。

ツングース語	ロシア語と接触		現代のエヴェンキ語
VP + N-case	スタイル $\alpha$ VP + N-case	VP + N-case	スタイル $\alpha$ VP-case + N-case
	スタイル $\beta$ VP + N-case	N-case + VP-case	スタイル $\beta$ N-case + VP-case
	~ N-case + VP		

表3 推測されるエヴェンキ語の VP と N の間の一致の変遷

## 6.2 スタイルとは

スタイルとは、社会言語学において定義される概念である。似たような用語に、レジスターという概念もあるが、Holmes (2003: 259) によれば“その区別は常に明確というわけではなく、多くの社会言語学者は単に気にしていない”という。ここで、スタイルの定義として、Fromkin et al. (2011) から、説明の部分を引用しておく：

*Most speakers of a language speak one way with friends, another on a job interview or presenting a report in class, another talking to small children, another with their parents, and so on. These “situation dialects” are called **styles**, or **registers**.*

(Fromkin et al. 2011: 469)

個々の発話者レベルで観察すると、発話の対象者、発話の場面などが、スタイルの使い分けに関与していると言える。一方、職業や、属する社会的な階層など、他の発話者とは共有しないようなグループレベルでのスタイルの差というものもある。さまざまな要因での使い分けがなされる社会方言の一つであるスタイルに、体系的にパラメータを想定することは簡単ではない。社会的な要因から言語的な差異を考察するのではなく、逆に、言語的な相違が認められるの



であれば、それが社会的ななんらかの要因があることの証しであるとみるほうが分かりやすい。その社会的な要因に、例えば、母語以外の言語との接触の反映をみることも、可能であると考えられる。

では、スタイル間の言語学的な相違は、どのような面で表出してくるのであろうか。例えば、以下に引用するような言及がある：

*... style is seen as the making of conscious and unconscious choices of certain linguistic forms and structures in preference to others that could have been chosen but were not.*

(Encyclopedia of Language & Linguistics (2006), vol. 12: p.203)

ここでスタイルとは、意識的にか、あるいは無意識的にかに関わらず、なんらかの文法的な特徴を選ぶことと述べている。さらに、音韻や語彙、形態素などの形式にも、統語的な構造の面にも表れうると述べられている。文法的には、いくつかの方法が選択可能であるにも関わらず、どれかが他より比べて優先的に使用されることが観察されるわけである<sup>61</sup>。この優先性が、スタイル間の言語学的な差異として、目に見える形で出てくるのである。

エヴェンキ語の文法記述の先行研究において指摘されている、文法的な使用頻度の差異も、実はスタイルの違いと考えられるものがある。Nedjalkov(1997: 235)では、いくつかある過去時制に使われる動詞の時制接辞の中で、「非未来を表す接辞-*ra* は、物語を語るスタイルでは不定過去を表す接辞-*ča* よりも頻繁に使われるのに対し、会話体では逆に-*ča* が多く使われる」という記述がある。

しかしこうした記述は稀であり、これまでエヴェンキ語のスタイルを分類し、言語学的な違いについて指摘した研究はない。

---

<sup>61</sup> 異なるスタイルの言語を、それぞれ別の言語とみるのか、それとも一つの言語とみるのかについては、本文でも引用した Fromkin et al. (2011) に次のような言及がある：“Social situations affect the details of language usage, but the core grammar remains intact, with a few superficial variations that lend a particular flavor to the speech (筆者訳：社会的状況は言語使用の細部にわたり影響を与えるが、核心となる文法は変わらない。いくつかの表層的変異がその発話に特有な風味を与えるだけだ)”(Fromkin et al. 2011: 469)。このように、核心となる文法が同一と見なせるならば、スタイルは一言語に含まれるいくつかの変異とみるべきである。

### 6.3 エヴェンキ語におけるスタイルの分類

第1章でみたように、エヴェンキ語のテキストの最も古いものでも、19世紀末から20世紀初頭にかけて、探検調査により得られたものである。遡れるとしても、せいぜい1世紀だけである。エヴェンキ語を始めとする他のツングース諸語も、エウエン語などのようにエヴェンキ語とほぼ同じ長さの歴史しかない言語、あるいはネギダル語、ウリチ語などのようにもっと近年になってから初めて記述された言語のように、記述の歴史は短い。言語の歴史を考察するとき、このことは決して十分とはいえない時間的長さである。また、本論文で扱う一致についていえば、一部の東方言を除き、記録され始めた当初のテキストから、一致は観察されている。これまで、一致の発生についての考察がほとんどなされてこなかったことの、大きな要因であるといえる。

しかし、エヴェンキ語のテキストを観察すると、テキストの種類によりスタイルが異なることがわかる。そして、スタイル間でいくつか、文法的な差異も観察される。このエヴェンキ語内における共時的な差異を、言語変化の過程による結果と捉え、いわば内的再建のような手段で、より古い段階からの言語変化の様子が推定できるのではないかと、考える。つまり、歴史的資料がほとんどないエヴェンキ語のような言語にとっては、スタイルの差異は、言語変化を考えるための重要なデータとなりうるのである。

エヴェンキ語を初めとするシベリア諸語の調査は、当初のテキストとしては主に民話などの、民俗学的、文化学的に、伝統的な話を採集している。その分、ロシア語から受ける影響は少ないと言える。一方で、現代において使用されている民族語は、話者のほとんどがロシア語とのバイリンガルであることから推察されるように、ロシア語の影響を多く受けていると考えられる。スタイル間の違い、つまりはテキストの種類による違いは、とくにロシア語の接触の度合いによって、使い分けがなされていると捉える。

では、まずは以下に、具体的なテキストのスタイルによる分類を行う。

エヴェンキ語のテキストのデータはあまり多いとは言えない。これらのテキストは、スタイルとして以下の5つに分類できると考えた。主に書かれた文献によるデータを扱っており、発話(会

話)体については含めていない<sup>62</sup>。

---

1.	物語・フォークロア体	
2.	ロシア語翻訳体	行政文体 ロシア文学体
3.	教科書スタイル	
4.	近代エヴェンキ文学体	
5.	現代エヴェンキ語体	

---

おおよその概念として、1. 物語・フォークロア体は伝統的なエヴェンキ語の特徴が見られるのに対し、ロシア語の影響を強く受けているのが、2. ロシア語からの翻訳体と5. 現代エヴェンキ語体であると言える。3. 教科書体は、主に教育上の必要性から整えられた文語体であり、規範性が高い。実際には方言差があったり、揺れがあるような表現でも、規範性により一律的、体系的に“正しい”とされる形式の使用が、求められていると言える。4. 近代エヴェンキ語体は、シベリアの少数民族にも教育が施され、ロシア語が普及するとともに、規範性の高い民族語の教育を受けた人が詩や小説を書き始めたような文体である。

## 6.4 文体と言語特徴

### 6.4.1 物語・フォークロア体

主にフォークロアなどの、エヴェンキに伝統的な自然観や、生活に根ざした内容の話が書かれる時の文体をここに分類する。資料としては、ワシレーヴィッチなどが 20 世紀前半に行った言語調査で得られたデータを出版したものが挙げられる。近年でも、フォークロアのテキスト集は出版されたりもするが、そのほとんどが教育や子供向けの本であることなどから文体が書き換えられているため、本来の物語・フォークロア体には含めない。また、発話されたものがその

---

<sup>62</sup> これは個人的なフィールドワークの限界と、エヴェンキ語の発話は現代ではかなり限られた場面(都市部のエヴェンキ族はほぼ民族語を使わず、地方の村落部でも現代生活様式・職業スタイルにおいてはロシア語で話すのが普通である)しかないことによる。

ままテキストデータにされている資料はないが、自然発話にも近い文体とすることができる。例(1)は、上中下の3つの層から成る世界に住む神と悪魔に関する、エヴェンキの神話からの例である。

- (1) Nonon ilan dundə-l bi-ŋki-tin. Ugi-lə bi-ŋki-n howokī,  
 at first three world COP-PST-3PL upper-LOC COP-PST-3SG god  
 hərgi-lə bi-ŋki-n akīn-īn – hatana. Dulgu-du dundə-du  
 lower-LOC COP-PST-3SG brother-3SG.POSS demon middle-DAT world-DAT  
 howokī hawal-čā-n, hatana tuḡī hawal-čā-n. (Василевич и Алькор 1936 より)  
 god work-PST-3SG demon also work-PST-3SG

“最初に3つの世界があった。上の世界には神さまが住んでいて、下の世界には彼の兄弟の悪魔が。真ん中の世界で、神さまは働いていて、悪魔も同じく働いていた。”

例に挙げたように、物語・フォークロア体では短い文が好まれる。定動詞形を含む短い文が、接続詞などの連結する語をはさむことなく、連なることが多い。形動詞形を使った関係節の複文は、あまり使われない。副動詞形を使った複文は、形動詞形に比べれば多く見られるが、いくつもの副動詞が連なることは多くない。

#### 6.4.2 ロシア語翻訳体

ロシア語翻訳体は、ロシア語で書かれたものがまず存在し、それをエヴェンキ語に翻訳したものを指す。

全体としてどのくらいの量のロシア語文献がエヴェンキ語へ翻訳されているのか、その実体は不明である。多くは、民族語を教える学校の教材のためにつくられたものであろうが、単に民族語の保持のためというよりは、ソ連時代の思想やロシア文化のシベリアへの浸透のためという目的もあったことは否めない。

翻訳体は、さらに2種類に分類することができるが、これはオリジナルであるロシア語の文献に差異があるためでもある。一つは、行政的な文献で、ロシア語原文が格式張った論説調の文体、あるいはロシア語によく見られる長い文の多い文体を翻訳したものである。もう一つは、ロシア文学作品がオリジナルであるものの翻訳である。

また、ともに教育の場で使われる読本としての役割もあつたためか、教科書体に通じる、規範的な文法の一貫性が見られる。

#### 6.4.2.1 行政文体

行政文体として扱うテキストは、スターリンの共産党大会での演説をエヴェンキ語に翻訳したものを取り上げる。このテキストは、第18回共産党大会(1939年)でのスターリンの演説を、コンバギル(С.Н.Комбагир:エヴェンキ人)と、レベジェワ(Б.П.Лебедева:ロシア人のエヴェンキ語研究者)の二人が共同で翻訳したもので、教育大学の教科書のひとつとして1940年に出版されている。

他の資料としては、書籍などのように出版された文献としては見つからないが、ロシア語でなされる行政的・経済的な内容を含むエヴェンキ語のテキストも挙げられる。オリジナルと想定しうるロシア語は記録されていないため、正確な意味での翻訳体とは言えないかもしれない。しかし、内容的に翻訳であると見なされ、またスタイルとしても共通した特徴を持つため、ロシア語翻訳体と考えられる。例えば、フォークロア集のなかにも、*рассказы* (“話し”、普段の生活のことなどを話すこと)として分類されるものがあり、その中には、集団農場などのソビエト経済・行政にかかわる内容になると、行政文体に近い、ロシア語からの直訳に近いような文体もみられることがある。

- (2) Huski o-ča, 1937 anŋni ge-duk-in kaltaka-duk-in omakta  
 against make-PART 1937 year second-ABL-3SG.POSS half-ABL-3SG.POSS new  
 ekonomikadi krizis nonovul-ča-n. Nuŋan ĵava-ča ŋnogumamat ČIIA-və,  
 economical crisis start-PST-3SG 3SG.NOM grasp-PART first USA-ACCD

tar amardukin Anglija-va, Frantsija-va, hadi-l-va-tin huŋtu-l-və strana-və.

that after England-ACCD France-ACCD part-PL-ACCD-3PL.POSS other-PL-ACCD country-PL-ACCD

“反対に、1937 年後半から新たな経済的危機が始まった。それはまず最初にアメリカをとらえ、それからイギリス、フランス、その他の国々を飲み込んでいった。”

(参考:ロシア語の原文)

*Наоборот, начиная со второй половины 1937 года начался новый экономический кризис, захвативший прежде всего США, а вслед за ними – Англию, Францию и ряд других стран.*

翻訳体では、文が大変長いものが頻繁に出てくる。こうした長い文は、フォークロアなどではあまり見ることはない。文を構成する要素を並置するなどして構成素が多い、あるいは、形容詞などで修飾される名詞が多いことなどが大きい理由として挙げられる。また、指示詞 *tar* を格活用した接続詞を使った、並列文も多く見られる。また、*nuŋan* などの、3人称代名詞がよく使われることも指摘できる。

こうした長い文や、代名詞の使い方は、もとのロシア語の特徴とも一致するわけであるが、では逐語訳した直訳体かという、そうではない。原文が関係代名詞などでつながれた複文であっても、エヴェンキ語訳では、短く2つの文に分けて訳されるということもあり、より自然なエヴェンキ語に訳そうとした文体であることは推測される。

#### 6.4.2.2 ロシア文学体

行政文体と同じくロシア語からの翻訳体であるが、オリジナルの文章がロシア語文学であると、それに伴いとスタイルにも違いが出てくる。こうしたロシア語文学の翻訳も、主に民族語教育の場で使われる読本としてつくられている。民族語教育は、民族語の保持もさることながら、ロシア文化の普及、ロシア語の普及も目的としていることから、ロシア文学の民族語への翻訳がなされている。

(3) Tički-du gulə-l plan-a ačín-ji o-v-ča-l, ilə-tikin  
 T-DAT hut-PL plan-ACCIN absence-INSTR make-PASS-PART-PL person-each  
 gələ-ri-ji-n. jur gulə-l biraja-məmə-du ilit-čara,  
 want-PART-INSTR-3SG.POSS 2 hut-PL big.river-INTS-DAT stand-PST.3PL  
 umun – urə uluktama-du kaltir-du-n, ge-l japka-li, beru-l-gači-r, hujət-čə-l.  
 1 mountain steep-DAT slope-DAT-3SG.POSS other-PL bank-PROL sheep-PL-like-PL disperse-PART-PL

“ティチキ(地名)の民家は、それぞれが建てたいままに、なんの計画性もなく建てられている。2つの民家は川の中に、ひとつは山の崖間際に、そして他の家々は川岸に沿って、まるで羊のように散在していたのだった。”

(参考:ロシア語の原文)

*Избы в Тычках выстроены без всякого плана, как кто хотел. Две избы стоят над самой речкой, одна – на крутом склоне горы, а остальные разбрелись по берегу, как овцы. (Рассказы, Д. Н. Мамин-Сибиряк)*

オリジナルはロシア語文学であるため、自然環境や文化的にエヴェンキ語にはないような語彙を翻訳しなければならない局面が多くなる。語彙数ではロシア語のほうが遥かに多いこともあり、借用語(*plan* “計画”)や、フォークロアなどのエヴェンキ語テキストではあまり見ないような語(*beru* “羊”:エヴェンキ族と羊は関係が深いとは言えない、この語もブリヤートの南方言の一部で使われている語彙)が使われるなどしている。

文法としては、行政文体に近く、ロシア語の原文に合わせて、長い文、接続詞や形動詞形、副動詞形を駆使した複文がよく見られる。文法性の一貫性も見られる。

#### 6.4.3 教科書体

20 世紀半ばくらいから、小学生から中学生くらいを対象として教科書や読本が、比較的多く

つくられてきた。近年では、すでに話すことができる民族語を保持するためというよりも、聞けば分かる程度にしか知らない言語に話す能力をつけるための教育へとシフトしてきている<sup>63</sup>。それに従ってか、教科書にも文法的な説明の記述が多くなっている。また、そこで挙げられる練習問題の文体も、その規範的な文法にふさわしい形が用いられる。

また、教師用の文法書もつくられており、ペテルブルク教育大学の授業の場などでは教科書として使われている。ソ連解体後、出版社の自由化、あるいは地方の民族教育への熱意の現れもあるためか、近年でもあらたな教科書作りがなされている。やはり、そこでも一貫した文法は重視されている。

(4) Agi-du gidama-l jožik-il, burgu-l homoti-l akit-ja-var

woods-DAT of.needles-PL hedgehog-PL fat-PL bear-PL bed-ACCIN-REFL.PL.POSS

baka-vki-l. Umun-duk garakan-duk ge-la garakan-dula bərkə-məmə

find-PART-PL one-ABL twig-ABL other-ALL twig-ALL restless-very

uluki mikčan-jərə-n.

squirrel jump-PRS-3SG

“森で、針だらけのハリネズミと、太ったクマたちが、寝床を探しています。ある枝から、別の枝へ、せわしないリスが飛び移っています。”

一貫した、一致や複数接辞の使用、動詞が文末にくるなどの、特徴が挙げられる。

一方で、次の例のように、命令文は必ず動詞が文頭にcomingことがある。

(5) jon-kallu, avadi-l turə-r prilagat'el'noje-l-ji gərbiči-vu-vki-l

think-IMP.2PL how.many-PL word-PL adjective-PL-INSTR call-PASS-PART-PL

<sup>63</sup> 2007-9年の間、ペテルブルク教育大学北方民族研究所に在籍するエヴェンキ族の学生で流暢にエヴェンキ語を話せる人はいなかった。かつて池上二良先生が同研究所に滞在された1969年に、エヴェンキ人学生からエヴェンキ語の語彙やテキストを収集できていた状況(池上 1973)とは全く違う。



“いくつかの語が形容詞とよばれているか、考えなさい”

間接疑問文のような構文であるが、ロシア語の文をほぼ逐語訳しただけのような文体である。

教育という場所のせいもあり、ロシア語の影響をうけつつも、規範化したエヴェンキ語文法を駆使するという、独特の文体であると言える。こうした教科書には、フォークロアやエヴェンキ語文学から読本テキストをとって載せていることが多々見受けられるが、興味深いことに、それらの文体も、教科書体に合わせて、規範的な文体になっている。

#### 6.4.4 近代エヴェンキ文学体

近代になって、エヴェンキ人が、エヴェンキ語で文学的な文章を書くことが見られるようになった。数としてはかなり少ないが、テキストのデータとしては興味深いものがある。詞などの韻文は多く見られるが、語順等を考察する上ではあまりよいデータとは言えないため、ここでは散文のものだけを取り上げる。

データとして、ネムトゥーシュキン(1939-2006)の自叙伝的な小説を使う。彼は北方言に属するとされるエルボガチョンの出身だが、ペテルブルクへ出て教育を受けている。いくつかのエヴェンキ語で書かれた小説が有名だが、手にすることができたのは『鳥よ帰ってこい・・・』という作品だけであった。

- (6) ədu, əvgidə-du-n      birajakan, daran gulə-l-nun, ju-l-nun,      - gudəj-ko! – ilitča-ŋki-tin  
here this.side-DAT-3SG.POSS river      next.to hut-PL-COM      house-PL-COM beautiful-VOC      stand-PST-3PL
- mujə-l-ji-vər      ŋaŋŋa-va      turu-čə-jənə-l      jagda-l.      tala,      bargida-du-n,  
summit-PL-INSTR-REFL.PL.POSS      sky-ACCD      support-IMPF-CONV-PL pine.tree-PL over.there other.side-DAT-3SG.POSS
- təŋkə-du – čalbaka-r.      Ičət-čəŋə-s      – asatka-r-ŋəčin ilitča-jaŋa-tin.      gudəjə, gudəjə.  
hill.bank-DAT      birch.tree-PL      see-FUT-2SG      girl-PL-like      stand-FUT-3PL      beautiful beautiful
- əvi-li-mčə      pəŋkikijəvun – umnət horoli-li-mča-l      johorjə-və. čutumaka-r tətigə-l-tin,  
play-INGR-COND      mouth.harp      once      round-INGR-COND-PL dance-ACCD      blue-PL      cloth-PL-3PL.POSS

bagdamaka-r halga-r-tin!

white-PL            foot-PL-3PL.POSS

“ここ、小川のこっち側は、小屋や家が並んでいて、なんと美しいことか！一松がそのてっぺんで空を支えているように立っていた。あちら、川の向こう側は、小高くなった岸には白樺があった。見えるでしょうー女の子のように立っているのが。とってもきれいなのだ！口琴を奏ではじめたらーすぐに踊りも回りだすだろう。青い服(緑の服)に白い足！”

(7) ələ bəjə o-na,            sagdal-mi,            ejana-val alba-l-ča-v            bi-jə-mi            huŋtu-l-du

only man    become-CONV become.old-CONV whatever    cannot-INGR-PST-1SG    COP-IMPF-CONV other-PL-DAT

guləsəg-il-du. əmugdə-v    amaski    ičəč-il-čə-n.    tolkič-il-ča-v    oro-r-vo,    birajača-r-və,    amut-va,  
village-PL-DAT heart-1SG.POSS backward look-INGR-PST-3SG dream-INGR-PST-1SG reindeer-PL-ACCD river-PL-ACCD    lake-ACCD

čipiča-l-və, ejana-val ičə-vu-l-čə-tin            guluvu-r, saŋña-ja-na-l,            minə    ori-jə-nə-l,  
bird-PL-ACCD    whatever    watch-PASS-INGR-PST-3PL bonfire-PL    smoke-IMPF-CONV-PL 1SG.ACC call-IMPF-CONV-PL

doldi-vu-l-ča-tin    holokto-l ikə-r,    tamnaksa-ŋačin-duk    ju-l-čə-tin            omŋo-v-čə-l  
hear-PASS-INGR-PST-3PL old-PL            song-PL    fog-like-ABL            appear-INGR-PST-3PL forget-PASS-PART-PL

ilə-l    dərə-l-tin,    tadék-da    til-il-čə-v    –    gorovo    huŋtu-l-duli    dunnə-l-duli  
man-PL    face-PL-3PL.POSS and-INTS    understand-INGR-PST-1SG    long            other-PL-PROL    land-PL-PROL

girkū-ča-s-im,    dunnə-kən-mi    baldijak-iv            minə    ori-l-lə-n.  
walk-IMPF-SMLF-1SG    land-DIM-REFL.SG.POSS birth.place-1SG.POSS    1SG.ACC    call-INGR-NFUT-3SG

“大人になり老い始めたときになってはじめて、私はどうしても他のいろいろな村にすることが出来なかった。私の心は後ろを見はじめた。トナカイを、川を、湖を、鳥たちを夢に見るようになり、どうしてか焚き火が煙を出して私を呼びながら現れ、古い歌が聞こえ、霧のようなものから忘れられていた人たちの顔が出てき出したのだ。そして私は分かったー長い間いろんな村を歩き回ってきたが、自分の土地である故郷が私を呼び始めたのだと。”

内容は、エヴェンキの生活に近いものが多いが、フォークロアのような短い文章が連なる文体ではなく、文学的な表現豊かな文体となっている。副動詞形を多用し、複文構造もよく現れている。教科書の読本ともちがう、より自然な表現や、語構成が使われている。

文法としては、語順は比較的自由になっているが、動詞が文末にくることが多いと言える。

#### 6.4.5 現代エヴェンキ語

現代エヴェンキ語として挙げるものは、インターネットで閲覧できる、エヴェンキ語の新聞からとったテキストである。文学や、発話と違って、より固い表現の文章であるが、ロシア語からの翻訳体とはまた異なる、あらたな文体と言える。今後、エヴェンキ語による新聞、雑誌などの出版物が増えていくとすれば、こうした文体が増えると推測される。

- (8) Kuŋaka-r-du so aja-v-rə targači-r əvidi arčmka-l, urunča-na-l  
 child-PL-DAT very like-PASS-NFUT.3PL such-PL recreation meeting-PL be.glad-CONV-PL  
 nuŋartin mata-l-və arča-ra, ajat nuŋar-va-tin sa-nə-l,  
 3PL.NOM guest-PL-ACCD meet-NFUT.3PL well 3PL.ACC know-CONV-PL  
 əmə-ri-və-tin urunmat mədəv-rə-n, upkat simula təgət-nə-l ajat dolčat-na-l.  
 come-PART-ACCD-3PL.POSS gladly talk-NFUT-3SG all silently sit-CONV-PL well listen-CONV-PL

“子供たちはそのようなレクリエーションの会が大好きで、喜んでお客たちを迎え入れ、彼らと仲良くなり、彼らが来たことを嬉しそうに(一人の子が)話すと、全員は静かに座ってよく聞く。”

現代エヴェンキ語体では、ロシア語から受けたと考えられる要素がより強く見られる。翻訳体よりも、よりロシア語の直訳に近いようにも見えるが、おそらく書き手はロシア語のバイリンガルのためであるということが考えられる。

特徴としては1文がたいへん長い。多くの文要素が並べられ、形容詞や、関係節、名詞の格形式で修飾されている。また、副動詞 *-na* により、次々に文がつけられていくことが指摘で

きる。ロシア語であれば、*i, to* などの接続詞で並列文が出てくるようなところに、エヴェンキ語では副動詞による複文が現れてくるということである。

また、第7章でも触れるが、文法に大きな変異があることが指摘できる。一致の有無や、関係代名詞の使用などである。ロシア語からの借用語も大変多くみられることから、ロシア語との混成言語に近い言語状態であると指摘できる。

## 6.5 語順的特徴のスタイル間の差異

関係節に関する語順と一致の発生の関係については次節にまとめるが、その前に上で見てきたスタイルの間で、どの程度、文法に差があるのかを見ておきたい。主に、語順との関係で、次の2点について、観察する。

- ・ 文における動詞の位置
- ・ 形容詞と名詞の語順

### 6.5.1 文における動詞の位置

エヴェンキ語と類型論的に類似するアルタイ諸語は、基本語順として SOV をとっていることはよく知られている。また、その中でも比較的語順が自由とされるエヴェンキ語ではあるが、基本語順はやはり SOV であると指摘されている(Василевич 1958: 736, Лебедева и др. 1985: 224 など)。

動詞の位置が、文末か、それとも文末でないか(非文末であるか)について、それぞれのスタイルにおける数をかぞえた結果が、表2である。ランダムに200語程度のテキスト部分を選び、その中に出てくる各文につき、主文における定動詞の位置のみを数えた(形動詞形や副動詞形による従属節内の動詞位置は数えていない)。また、動詞一語で文となるものと、主語と動詞だけからなる文も数に入れていない。

	動詞文末	動詞非文末
物語・フォークロア体	16	19
ロシア語翻訳体	10	6
教科書体	13	0
近代エヴェンキ語体	12	10
現代エヴェンキ語体	0	17

表2 動詞の文における位置

一般的に言われている基本語順 SOV に対して、結果はかなりの違いがあると言える。動詞が文末に来る、いわば伝統的なエヴェンキ語の語順とされるものは、ロシア語翻訳体や、教科書体、近代エヴェンキ語体に多くみられ、もっとも伝統的な文法が予想される物語・フォークロア体では、決して圧倒的に多数となる語順ではないことが分かる。現代エヴェンキ語体にいたっては、動詞が文末にくることはほとんどない。

確かに、動詞の位置の揺れは単に基本語順が変わったからだと言うことはできない。情報構造など、なんらかの語順を変える操作がかかったかもしれないからである。しかし、“よりエヴェンキ語らしく”という意識が働く文体にこそ、動詞文末が多く見られるというのは、“基本語順”が強く意識された結果もあると言える。実際には、SOV あるいは SVO の、どちらが基本語順なのかは、文体によって異なるという方が、正しい記述と言えるかもしれないのである。また、基本語順が SVO である場合、現代エヴェンキ語を一種の混成言語と見て、従来のエヴェンキ語とは別の言語変異と見るができる可能性も否定できなくなる。

### 6.5.2 形容詞と名詞の語順

一致がもっとも典型的に現れるのは、名詞修飾である。とくに、形容詞による修飾の場合、一致の出現に揺れはない。

一致が発生(あるいは言語接触により“借用”)した原因として、直感的に述べられることに語順の自由化が挙げられる。それでは、修飾語と被修飾語の位置関係も自由になったのであろうか。ここでは、形容詞と、それが修飾する名詞の位置について、統計をとってみた。もはや調

べるまでもない明白な結果が予想されるが、20文程度の箇所を取り、形容詞と名詞の位置関係の分布を数えてみると、表3のようになる。

	形容詞＋名詞	名詞＋形容詞
物語・フォークロア体	1	0
ロシア語翻訳体	11	0
教科書体	9	0
近代エヴェンキ語体	5	0
現代エヴェンキ語体	7	0

表3 形容詞と名詞の語順

結果は、考察するまでもなく、一目瞭然である。つまり、形容詞は名詞に後続することはないのである。いくら語順が比較的自由になったとは言え、名詞修飾する形容詞の基本的な位置は変わっていない。とすれば、他のアルタイ諸語のように、一致という文法を受け入れなくとも、連接という語結合で、なんら解釈に曖昧性が生じるなどの問題はなかったはずである。

確かに、一致は語順の変化と関係があると言えるが、単に語順が自由になったからだと言及するのは不十分である。語順に関わる、ある特定の要因が関係しているとみるのが合理的であり、そのためには語結合体系の中をより詳細に見ていく必要がある。

## 6.6 “一致”の受容過程～文体と語順

### 6.6.1 語順と一致の必要性

前節まで、エヴェンキ語におけるスタイルと、その間に見られるいくつかの文法的な相違を観察した。ロシア語との接触により、ロシア語から受ける影響の違いの差をスタイルというエヴェンキ語内の言語変異を通してみることができると主張した。

一致の発生、あるいは、ロシア語から一致という文法的特徴を“借用”したのではないかという

点から考えるとき、重要になるものが語順である。ロシア語においては、語順がきわめて自由であるが、これは一致という文法特徴があることがその大きな理由の一つであると言える。

- (26) Красные, голубые, жёлтые поднимаются к небу скалистые вершины.  
red.PL.NOM blue.PL.NOM yellow.PL.NOM go.up.PRS.3PL to sky.SG.DAT rocky.PL.NOM top.PL.NOM  
“赤、碧、黄色の岩山の頂きが空に向かってそびえている。”(和久利 1959: 181)

この例文(26)では、主語であり被修飾語である語は“頂き”であるが、文末にある。一方で、これを修飾する“赤い”“碧い”“黄色い”は文頭にある。しかし、これらは全て複数主格の語尾で一致しているため、修飾関係が明確になる。ロシア語でもこうした形容詞と名詞が離れるということは頻繁にあるわけではないが、文学や、なんらかの強調がかかるときに見られる。一致という標示方法で、語の結びつきが分かる例である。

それではエヴェンキ語においても、ロシア語での状況と同じように、語順が自由になったことと一致の発生はどのような関係があると考えられるだろうか。なお、ここで語順が自由になることと、一致の発生がどちらが先に起こったことを考えることはできない。エヴェンキ語の記述の歴史でも触れたように、この変化の過程を観察できるほど、古くからのエヴェンキ語資料は残っていないためである。そのため、本論文ではエヴェンキ語のスタイルによる文法的な差異から、その原因を探っていく。

#### 6.6.2 語順の変化～関係節にみられる変化の重要性

ここで注目する語順は、関係節に関するものである。

エヴェンキ語のいくつかのスタイルを見たように、語順が自由化しているという点については確かに認めることが出来る。少なくとも、典型的なアルタイ諸語に見られる語順を基本と考えれば、動詞の位置は必ずしも文末ではないことが分かる。一致という文法の発生を考えると、修飾関係にある語の語順が変わっているのか否かは重要な要素である。この点も、前節で見たように、名詞を修飾すると形容詞の位置については、語順の変化は全く起こっていないと言ってよい。つまり、形容詞は常に名詞の前におかれているのである。だとすれば、一致の発生は

語順、とくに修飾関係を示す語結合とは関係がないのであろうか。

実は、関係節の位置を考えると、重要な語順の変化が起こっていると言えることが出来る。従来、関係節は動詞の形動詞形で従属文が導かれ、被修飾名詞の前におかれていた。動詞部分が文末にくれば、必然的に形動詞形も従属文の最後に来ることになり、その結果、修飾する名詞の直前におかれることになる。このとき、修飾関係は明確であり、一致という語結合法則の必要性はなかったかもしれない。しかし、以下で挙げてみる事例に先行して結論から述べると、ロシア語の接触を通じて、関係節の位置が被修飾名詞の前置から後置へと変化していると見ることができるのである。さらに動詞の文中における位置も必ずしも文末ではなくなってきていることもあり、形動詞形とそれが修飾する名詞が、離れることが増えてくる。

以下、スタイル別に関係節による複文を観察してゆく。ロシア語との接触の強さの差異を反映していると考えられるスタイル別にみることで、この節と被修飾名詞の間の語順がどのように変化してきているかが分かると考える。一致という文法はすでにどのスタイルでも確立しているため、一致の有無についての変化過程は確認することはできない。しかし、スタイル間に見られる関係節の語順の変化を観察することで、一致という語結合方法を新たに受け入れた要因について考察し、それに妥当性があることを示す。

#### 6.6.2.1 物語・フォークロア体の関係節構造

最も本来のエヴェンキ語(接触以前のエヴェンキ語)に近い特徴を保持すると考えられる物語・フォークロア体に見られる関係節から取り上げる。

物語・フォークロア体では単文が好まれ、形動詞形による関係節はあまり見ることはないといえる。また、関係節が使用される時も、従属文自体がそれほど長くない場合か、項をとったとしても一つくらいのものが普通であると言える。例えば、次のような例である。

- (27) əŋin-in            anŋat-tā-n            ʊmʊkən    dolbonī-wa,    əmə-*dina*-du-n  
         mother-3SG.POSS stay-NFUT-3SG    alone            night-ACCD    come-PART-DAT-3SG.POSS



inəŋi-du-n            alāt-cinā.            (Василевич 1936)

day-DAT-3SG.POSS    wait-CONV

“彼の母は、彼が帰ってくる日を待ちわびて、夜ひとりぼっちでいた。”

この例は、少し複雑な文となっている。副動詞形による従属文をもつ複文であり(副動詞形節は主文に後置されている)、その副動詞形節の中に関係節が含まれているという構造である。形動詞接辞-*dinā* のついた動詞 *amə*-“来る”が、名詞 *inəŋi* “日”を修飾している。このとき、名詞についている与格接辞-*du* が形動詞形にもつくことで一致を示している。上で述べたような、典型的な動詞一つからなる関係節で、被修飾名詞の前に置かれている。

このように、物語・フォークロア体では、基本的に被修飾語の直前に形動詞形が置かれる例が一般的である。

#### 6.6.2.2 近代エヴェンキ語文学体

近代エヴェンキ語文学体として取り上げるテキストにも、関係節はそれほど多くは出てこない。比較的、関係節を多用する翻訳体と比較すると、これは従来のフォークロア体にも共通するエヴェンキ語の特徴とも言える。

そのような中、次の例(28)のような形動詞形による関係節の使用例が見られる。

(28) ..... *spasibo*,    *əməvu-nni*    *minə*    *baldiĭak-tula-v*,

thank.you    bring-NFUT.2SG 1SG.ACC    birth.place-ALL-1SG.POSS

*aglan-dula*, *duku-čav-ja-ri-la*            *pasporta-du-v*.            (Немтушкин)

field-ALL    write-PASS-IMPf-PART-ALL passport-DAT-1SG.POSS

“.....、ありがとう、君は私を生まれ故郷へ、私のパスポートに書かれてある草原へ運んでくれたね、と言いながら。”

ここでは、まず関係節の語順は、被修飾名詞の後ろにおかれていることが分かる。動詞 *dukučav*-“書かれてある”が形動詞形接辞-*ri* を伴い、名詞 *baldijak*“故郷”および *aglan*“草原”を修飾していることが、名詞の場所格接辞-*(du)la* で一致していることで分かる。フォークロア体と比べると、関係節の後置は大きな変化の結果と見る事ができる。またここでは、関係内での動詞位置が従属文末ではない。つまり補語である“私のパスポートに”が後置されている。しかし、被修飾名詞の直後に形動詞形がくることで、それが修飾する先の名詞との結びつきは分かりやすいといえることができるだろう。

#### 6.6.2.3 ロシア語翻訳体(文学体および行政文体)

次に、ロシア語翻訳体における関係節の語順をみる。まず初めに、ロシア文学体の様子から見てみよう。

- (29) Tar guləkən-du,    agi    ʃapka-maju-du-n        ilit-ča-ri-du        sagdi bəjumimni  
          that   hut-DAT        woods edge-INTS-DAT-3SG.POSS stand-IMPf-PART-DAT    old   hunter
- Emelʃa hulukukən-nun hutə-nun-mi                    Grishutkan-nun        bi-ʃə-čə-n.  
*Emelʃa*    small-COM        son-COM-REFL.SG.POSS    *Grishutka*-COM        COP-IMPf-PST-3SG

“森の端にたつそのあばら屋には、年老いた猟師のエメリヤが、まだ小さい孫のグリシュトカと一緒に住んでいた”<sup>64</sup> (*Рассказы, Мамин-Сибиряк*)

例(29)では、形動詞形による名詞修飾が観察されるが、ロシア語原文では関係代名詞による修飾構造である。形動詞節が被修飾名詞の後ろに置かれる語順をとっている。関係節内では、動詞 *ilit*-“立つ”という述語部動詞の形動詞形は文末にきているため、被修飾名詞と隣合わせることなく離れているが、与格接辞-*du* の一致によって、修飾関係が分かる。

関係節の語順が被修飾名詞の後ろに置かれるという点において、例文(28)の近代エヴェン

<sup>64</sup> ロシア語の原文は次の通りである： *В той избушке, которая стоит у самого леса, живет старый охотник Емеля с маленьким внуком Гришуткой.*

キ語文体と同じでと指摘できるが、関係節内での動詞の位置が異なっていることが指摘できる。関係節内に置ける動詞の位置については、あまり一般的な傾向はないため、スタイル間で必ずしも被修飾名詞と隣接するかしないかの傾向に差があるわけではない。フォークロア・物語体ではほとんど観察されないが、他のスタイルでは名詞の後ろから関係節が修飾する語順は少なくない。

次に行政文体の翻訳体を見てみる。ここでも、基本的に形動詞形に導かれる関係節は、被修飾名詞の後ろに置かれるほうが普通である。一語からなる動詞形動詞形の場合には、名詞の直前に置かれる傾向にあるとはいえるものの、長い関係節になると全てが後置型になる。

このとき、オリジナルであるロシア語の原文においても複雑な構造であるため、エヴェンキ語訳でも複雑になる傾向にある。しかし、構造が複雑であるが故に、一致という語結合が文の構造を理解する上で重要な点となっているといえる。

以下では、原文のロシア語を基準に観察していく。ロシア語では、関係代名詞による関係節と、動詞の形動詞形による関係節の2通りが可能であり、とくに文章語や硬い表現の多い文体ではその両方が使い分けられる<sup>65</sup>。翻訳体エヴェンキ語では、その両方ともが形動詞形により置き換えられている。

まず、原文では名詞の直後に形動詞形による修飾がなされている文(30)である。被修飾名詞は主格のためゼロ標示で一致していると見ることが出来る。

(30)	Ekonomikadi	<u>krizis</u> ,	<u>nonovul-ča</u>	kapitalistti-l-du	strana-l-du
	economic.NOM	crisis.NOM	begin-PART.NOM	capitalistic-PL-DAT	country-PL-DAT
	1929 anņani	ge-du-n	kaltaka-du-n,	1933 anņani	mudama-kla-n
	1929 year.NOM	second-DAT-3SG.POSS	half-DAT-3SG.POSS	1933 year.NOM	end-LOCALL-3SG.POSS

<sup>65</sup> フィンランド語の関係節についてまとめた節(5.4.1)でも述べたが、関係代名詞のほうがより口語的で、形動詞形による文の連接は格式張った印象を与えるようである。形動詞形による修飾は、関係節内で主語か目的語になるものしか修飾できないという制約ゆえに使用頻度が下がるため、関係代名詞のほうが好まれる結果、より口語で広く使われるのであろう。その反動として、形動詞形による表現が硬い印象をもつようになるのではないか。

ŋəŋə-ʃə-čə-n.

go-IMPF-PST-3SG

(ロシア語原文)

Ekonomicheskij krizis, nachavshijsja v kapitalisticheskikh  
economic.M.SG.NOM crisis.M.SG.NOM begin.PART.ACT.PST.M.SG.NOM in capitalistic.F.PL.PRPOS  
stranakh vo vtoroj polovine 1929 goda,  
country.F.PL.PRPOS in second.F.SG.PRPOS half.F.SG.PRPOS 1929 year.M.SG.GEN  
prodolzhsja do konca 1933 goda.  
last.PST.M.SG till end.M.SG.GEN 1933 year.M.SG.GEN

“1929 年後半に資本主義国家において始まった経済危機は、1933 年の終わりまで続いた”

続いて次の例(31)は、ロシア語原文で関係代名詞により名詞が修飾されている例である。  
エヴェンキ語では近年、疑問詞を関係詞として扱う表現もあるが、翻訳体においてはまだ観察  
されない。従って(31)のエヴェンキ語訳文でも、形動詞形による名詞修飾へと置き換えられて  
いる。主格の無語尾での一致であり、形動詞形は名詞の直後に置かれている。

- (31) Өr tablica-duk ičəv-ʃərə-n, Sovetti Sojuz ər ələ əmykin mir-du  
this table-ABL show-PRS-3SG Soviet Union this only unique.NOM world-DAT  
strana, ə-si sa-rə krizis-il-və, nuʃanŋin promyshlennosti-n  
country.NOM NEG-PART.NOM know-CONNEG crisis-PL-ACCD his industry-3SG.POSS  
okin-da ugiski, ugiski ugiriv-ʃə-ri-və-n.  
always upwards upwards go.up-IMPF-PART-ACCD-3SG.POSS

ロシア語原文

Iz etoj tablicy vidno, chto Sovetskij Sojuz  
 from this.F.SG.GEN table.F.SG.GEN obvious that Soviet.M.SG.NOM union.M.SG.NOM

javljaetsja edinstvennoj stranoj v mire, kotoraja<sub>1</sub>  
 be.PRS.3SG unique.F.SG.INSTR country.F.SG.INSTR in world.M.SG.PRPOS REL.F.SG.NOM

ne znaet krizisov i promyshlennost' kotoroj<sub>2</sub>  
 not know.PRS.3SG crisis.M.PL.GEN and industry.F.SG.NOM REL.F.SG.GEN

vsjo vremja id'ot vverkh.  
 all.N.SG.ACC time.N.SG.ACC go.PRS.3SG upwards

“この表から分かるのは、ソ連邦が世界で唯一危機というものを知らない国で、その工業は常に上昇しているということだ”

次の例(32)は、主文が一語文であり、そこに形動詞形によって修飾節が続いている形であるが、エヴェンキ語訳ではいくぶん分かりやすく意識されている。その中で、原文では属格による語結合の名詞句のところを、エヴェンキ語では繫辞動詞 *bi-* の分詞を使うことで訳している部分がある。被修飾名詞と隔離しているが、対格接辞の一致により、その結合関係が分かる。

- (32) Ər taŋu-l hadi-tin<sub>(b)</sub> promyshlennost' krizis-və-n<sub>(a)</sub> amaskipti-l-du  
 this number-PL part.NOM-3PL.POSS industry.NOM crisis-ACCD-3SG.POSS last-PL-DAT
- tunŋa-du anŋani-l-du bi-čə-və<sub>(a)</sub> kapitalistti-l-du strana-l-du  
 five-DAT year-PL-DAT COP-PART-ACCD capitalistic-PL-DAT country-PL-DAT
- taduk CCCP-du promyshlennaj-va ugirivri-və-n ičəvkən-jəri-l<sub>(b)</sub>  
 and USSR-DAT industrial-ACCD growth-ACCD-3SG.POSS show-PART.NOM-PL

ロシア語原文

Vot        nekotorye        cifrovie        dannye,        illjustrirujushchie  
here\_is    some.PL.NOM   numerical.PL.NOM   data.PL.NOM   illustrate.PART.ACT.PRS.PL.NOM  
  
krizisnoe        polozhenie        promyshlennosti   kapitalisticheskikh   stran  
crisis(adj).N.SG.ACC   situation.N.SG.ACC   industry.F.SG.GEN   capitalistic.F.PL.GEN   country.F.PL.GEN  
  
za   poslednie   p'at'        let        i        dvizhenie        promyshlennogo  
for   last.PL.ACC   five.ACC   year.PL.GEN and   movement.N.SG.ACC   industrial.M.SG.GEN  
  
pod"joma        v   CCCP.  
rise.M.SG.GEN   in   CCCP

“ここにあるのは、過去5年間のうちで資本主義国で起こった工業の危機状況と、ソ連  
邦における工業の発達を示す数値データである。”

この例文(32)は、複雑な構造をとっている。というのも、関係節が二重に含まれているため  
である。(32)'にその二重にある関係節の構造が分かるように英訳により図に示した。まず、  
“データ”をそれに後続する節が修飾する。さらにその節の中にある“危機”という語にまた別の  
関係節が修飾するという構造をとっている。

(32)' Here is the numerical data

↑ [*which* shows the crisis ... and the growth ...]

↑ [*that* had taken place...]

修飾する形動詞形と被修飾される名詞が、距離的に離れているのみならず、その間に別の  
名詞を修飾する従属節が挟まっているのである。ここでは、格と数の一致が、文の構造を理解  
する際の重要な鍵となつてはたらいっていると考えられる。

最後に挙げる例(33)も、ロシア語原文では関係代名詞で名詞修飾がされている例である。ここでも、エヴェンキ語訳で形動詞形は被修飾名詞からかなり離れているが、与格接辞-*du* の一致で結合関係が明確になる。ただし、被修飾名詞は2つありそれぞれが単数形であるが、分詞には複数の接辞-*l*も標示されている。

- (33) *Ər tablica-duk časki ičəv-jərə-n, Italiija-du, Japonija-du, Germanija-duk unətmərit*  
 this table-ABL further show-PRS-3SG Italia-DAT Japan-DAT Germany-ABL earlier  
*voennaj ekonomika jugu-klə-n təgədi-və khozjajstvo-var*  
 military.NOM economy.NOM direction-LOCAL-3SG.POSS national-ACCD economy-REFL.PL.POSS  
*ḡənəv-čə-l-du, 1938 anḡani-du promyšlennost' ḡənə-n hərgiski suru-čə-və-n.*  
 move-PART-PL-DAT 1938 year-DAT industry.NOM move-NFUT.3SG downwards go-PART-ACCD-3SG.POSS

ロシア語原文

*Iz etoj tablicy vidno, dal'she, čto v Italii*  
 from this.F.SG.GEN table.F.SG.GEN obvious further that in Italy.F.PRPOS  
*i Japonii, kotorye ran'she Germanii pereveli svojo*  
 and Japan.F.PRPOS REL.PL.NOM earlier Germany.F.GEN convert.PST.PL own.N.SG.ACC  
*narodnoe khozjajstvo na rel'sy voennoj ekonomiki,*  
 national.N.SG.ACC economy.N.SG.ACC onto rail.M.PL.ACC military.F.SG.GEN economy.F.SG.GEN  
*uzhe nachalsja v 1938 godu period dvizhenija*  
 already begin.PST.M.SG in 1938 year.M.SG.PRPOS period.M.SG.NOM movement.N.SG.GEN  
*promyšlennosti vniz.*  
 industry.F.SG.GEN downwards

“この表から更に分かることは、ドイツよりも早く自国の国民経済を戦時経済へ移行させたイタリアと日本において、すでに 1938 年に工業の下方への動きの時期が始まっ

ていたということだ”

一方で、翻訳体は単にロシア語を逐語訳しただけのものではないかとの疑問があるかもしれない。ここで例文(34)に、ロシア語の文体が必ずしもエヴェンキ語へ直訳に近い形で複文に訳されているわけではないことを示しておく。

- (34) Huski o-ča, 1937 anɲni ge-duk-in kaltaka-duk-in omakta  
against make-PART 1937 year.NOM second-ABL-3SG.POSS half-ABL-3SG.POSS new  
ekonomikadi krizis nonovul-ča-n. Nuɲan ʃava-ča ɲnogumamat CIIA-və,  
economical.NOM crisis.NOM start-PST-3SG 3SG.NOM grasp-PART first USA-ACCD  
tar amardukin Anglija-va, Frantsija-va, hadi-l-va-tin huɲtu-l-və strana-və.  
that after England-ACCD France-ACCD part-PL-ACCD-3PL.POSS other-PL-ACCD country-PL-ACCD

“反対に、1937 年後半から新たな経済的危機が始まった。それはまず最初にアメリカをとらえ、それからイギリス、フランス、その他の国々を飲み込んでいった。”

(ロシア語原文)

Naoborot, načinaja so vtoroj poloviny 1937 goda  
on\_the\_contrary start.CONV from second.F.SG.GEN half.F.SG.GEN 1937 year.M.SG.GEN  
načals'a novyj ekonomičeskij krizis, zakhvativšij  
start.PST.M.SG new.M.SG.NOM economic.M.SG.NOM crisis.M.SG.NOM seize.PART.ACT.M.SG.NOM  
prezhd'e vsego CIIA, a vs'ed za nimi – Angliju, Frantsiju  
first\_of\_all USA and following them(=USA) England.F.SG.ACC France.F.SG.ACC  
i r'ad drugikh stran.  
and number.M.SG.ACC other.PL.GEN country.F.PL.GEN

“逆に、1937年の後半から、まずこ米国を、それに続いて英国、フランス、そして他の様々な国を捕えた新しい経済危機が始まった。”



原文のロシア語では、能動過去形動詞形を使った複文構造を持つ1文であるが、エヴェンキ語では、2つの文に分けられている。もし、形動詞形構文を使い1つの複文で訳される場合、(34)では被修飾名詞が主文で主格で現れているため、一致する接辞はゼロ接辞になる。少なくとも他にゼロ接辞の名詞類はこの文には出てこないため、修飾関係が混乱することがないはずであるが、一致は明示的には示すことができなくなる(接辞を持たないといういわば消極的な一致でしか表せない)。分かりづらくなることを避け、またよりエヴェンキ語らしくなるように2文に分けられたのではないかと考えられる。

以上より、ロシア語翻訳体を観察したが、ここでは通常関係節は名詞の後ろにおかれることが分かる。また、関係節内の形動詞形の位置は一定でなく、名詞のすぐ後ろにくることもあれば、遠くに離れていることもある。さらには、関係節内にさらに別の関係節が含まれるような複雑な構造をもつ文もみられる。こうした複雑な構造を持つ文は、物語・フォークロア体をはじめとする、日常的なエヴェンキ語の会話などではほとんどみられない構造である。このような構造を理解するとき、どの形動詞形がどの名詞を修飾しているのかは、一致する語尾によって確認することが出来る。つまり、ここに一致という語結合の必要性があると見る事ができるのである。ロシア語の翻訳体ということで、ロシア語文法にある文法的な一致を形態的な直訳として受け入れやすいという状況も考えられるだろう。しかし、5.4.3でヤクート語とブリヤート語の例で見たように、語順がアルタイ諸語に見られるような関係節が被修飾名詞の前にくるというものであったならば、一致を取り入れる必要はなかったであろう。ロシア語翻訳体がエヴェンキ語の構造、特に複文の語順に与えた影響は、エヴェンキ語が新たに文法として一致を受け入れることになる条件をも作ったと考えられる。

#### 6.6.2.4 現代エヴェンキ語体

現代エヴェンキ語体において、関係節はほとんどが疑問詞によるものである。

- (35) Əvənkija-du ajat jənča-jara iləl-və ni prokuratura-du haval-ča-n  
 Evenkiya-DAT well remember-PRS.3PL people-ACCD who.NOM prosecution-DAT work-PST-3SG  
 dunna-və hava-t-vər uvir-jənə-l. (ЭЖ 2013, No.9)  
 country-ACCD work-INSTR-REFL.PL.POSS raise-CONV-PL

'In Evenkiya they remember well about those who worked in the prosecution and supported the country by their work.'

“エヴェンキヤでは、検察に貢献し、その仕事ぶりで国家を支えた人々のことがよく記憶されている。”

例文(35)では、本来疑問詞である *ni* “誰”が、いわゆる関係詞として使われている。他のアルタイ諸語でも同様であるが、疑問詞が接続詞として使われることは稀であるといえる。これは、ロシア語で *kto* “誰”が関係代名詞として使われていることから、そのまま直訳的にエヴェンキ語の疑問詞を関係代名詞として使っていると見ることが出来る。

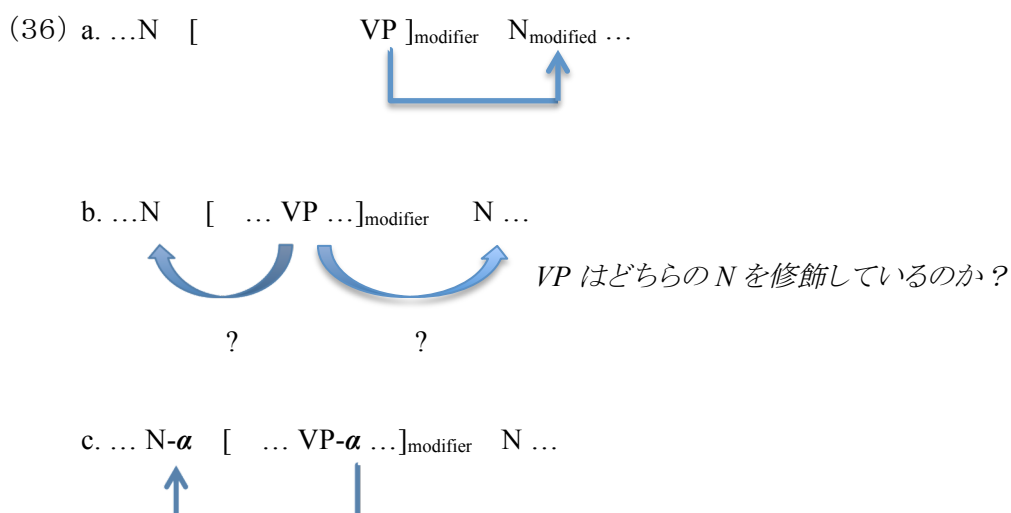
近年において、こうした特別な文体のみならず、日常のエヴェンキ語の中でも疑問詞が関係接続詞として使われることがあるという。話者の多くはロシア語のバイリンガルで、ロシア語で高等教育を受けたり、生活基盤が都市部にあることなどから、どちらかといえばロシア語の方が母語として強くはたらく話者が多いと考えられる。統計的なデータはないが、少なくとも、ロシア語が日常生活においても強く入り込んでいるような社会言語学的な環境が、疑問詞を関係代名詞に使用することに強く関わっていると見ることが出来る。

### 6.6.3 統語関係上の曖昧性の回避

エヴェンキ語とも言語類型論的に大変近い特徴をもつヤクート語やブリヤート語などのアルタイ諸語では、修飾部は被修飾名詞の前に置かれるのが普通である。修飾部が節になるとき、述語動詞が形動詞形となり、主文中にそれが修飾する名詞の前に挿入される構造をとる。エヴェンキ語でも修飾部が形容詞である時は、このアルタイ諸語的構造(語順)になる。また、ア

ルタイ諸語的な関係節を含む文構造も、エヴェンキ語では主に物語・フォークロア体にはよく見られる。しかし一方で、ロシア語翻訳体では、形動詞形に導かれる関係節は、被修飾名詞の後ろへ置かれることが多く見られる。そして、現代エヴェンキ語体では、関係節は、多くの場合は疑問詞が関係接続詞として機能して、文を接続する。これはロシア語で見られる関係代名詞と並行的な例と見る事が出来る。

元来、エヴェンキ語は一致という語結合方法を持っていなかったと推測されている。形容詞の場合と同じく、形動詞形も名詞に前置されている限り、一貫して修飾構造にずれは生じなかったと考えられ、一致という方法の必要性もなかったと言える：(36a)。



しかし、形動詞形の位置が一定でなくなると、構造に曖昧性が生じることになる。例えば、形動詞形の導く従属節が文中にあり、前後になんらかの名詞が存在するとき、一体どちらの名詞を修飾しているのか、解釈が難しくなることが考えられる：(36b)。このような場合に、一致という手段で形動詞形がどの名詞を修飾しているのかを示すことが出来るのであれば、この曖昧性は回避できることになる：(36c)。一致という語結合の手段の必要性が、そして一致を新たに受容する合理性がここに生じると見る事が出来る。

このように、関係節の構造の変化は、エヴェンキ語の一致の発生に、重要な影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

## 6.7 “一致”の規範化～教科書体にみる文法

一致の受容は上で見たように、語順の変化、とくに関係節がかかわる文の構造の変化が大きいとみた。こうした一致の受容が根付いた要因の一つとして、教育現場における文法の規範化も、無視できない要因である。

エヴェンキ語の標準語文法は、1940年代にひらかれた会議で、北方方言のひとつであるポリグス方言を基盤として、他の方言からも要素をまぜることで成立した。5.3.2で見たように、一致の有無に揺れがあった東方言と違い、基盤となった北方方言ではロシア語との接触も歴史的に早く、一致が定着していたと考えられる。従って、一致はエヴェンキ語の標準語の規範的な文法として位置付けられた。

エヴェンキ語の教科書が作成されたり、民族語教育がなされ始めたのは、正確な開始年は不明であるが、およそ第二次大戦後のソ連時代からであろう。そのため、教科書などによりエヴェンキ語の規範化が普及するまえから、一致はすでに文法として東方言のほうへも広まっていた。つまり、教育という場が一致の発生そのものにかかわる要因とは見ることは出来ない。しかし、一致が規範として強く受け入れられ、定着していく過程には大きな要因となって働いたことは想像できる。ワシレーヴィッチのシベリア調査では東方言には一致に地域差や揺れがあることが指摘されていたが(Василевич 1948: 13, Колесникова 1966: 43)、教科書はおおよそその時期から作られ教育現場で使用されており、現在ではひろく一致が見られることを考えると、教育的な文法の周知の影響は大きいといえる。

例えば、5年生用のエヴェンキ語の教科書<sup>66</sup>には以下のような説明が書かれている：

*Прилагательное согласуется с существительным по падежу, тадук тангуду уилдывувкил.*

「形容詞は名詞と格と数で一致する」

また、Лебедева et al.(1985)は言語教育の教師のための教科書であるが、エヴェンキ語の統

---

<sup>66</sup> Булатова, Н. Я., З. И. Ковалева, А. Т. Лапуко и Л. Г. Осипова 2001 *Эвэды турэн 5*, 5-е изд., дораб., Просвещение, СПб.

語関係の説明の箇所以下のような説明がなされている:

形動詞構文は通常主文の前か、あるいはその後ろにおかれる。形動詞形で表される文の二次成分は、普通はそれにより置き換えられる文中の場所に置かれる。

...主文の中における形動詞節は、主文とは接続語を用いて結びつけられる。つまり、主文とは、格の支配によるものか、あるいはその節が属する、主文の成分と格と数の一致によって、結ばれる。

(Лебедева et al. 1985: 250[筆者訳])

また、第三章でみたように、一致すべき接辞は数と格であるが、格接辞には後置詞的格接辞として分類した接辞類がある。文法格接辞や副詞的格接辞と違い、後置詞的格接辞は派生接辞に近い特徴をもち、実際のテキストでは一致を示さないことが少なくない接辞である。しかし、教育による一致の規範化は、こうした後置詞的格接辞にまで一致を示さなければならぬと記述されていることが確認できる。

以上のことより、エヴェンキ語における、現代に至るまでに一致という文法が受け入れられ定着する過程では、教育による普及という要因は決して小さいものではないと考えられる。

## 6.8 小結

この章では、ロシア語の接触の程度を反映していると見ることが出来るエヴェンキ語におけるスタイルによる違いを比べて、関係節をつくる構造の変化をもとに、一致という文法手段の発生、借用の原因を考察した。

現在残っているエヴェンキ語を記録したテキストは、一番古いものでもすでに一致は文法として存在していることを示している。残念ながら、一致が徐々に浸透している段階は文献としては確認できない。ただし、ロシアによる西からのシベリア征服の方向から見ると、最も遅くにロシ

ア語と接触することになったと考えられるエヴェンキ語の東方言では、一致が見られない方言の存在が文献で確認できる。

ロシア語からの影響は、かなり古い段階の言語接触ですでに起こっていたのであろう。シベリアの民族に対するヤサーグと呼ばれる税徴収がよく知られているが、征服側と非征服側での当初の言語関係は、ロシア語の政治、経済、行政的な内容をエヴェンキ語に翻訳するという関係であったであろう。つまり、その段階でロシア語の語順に影響を受けた形のエヴェンキ語翻訳体が、エヴェンキ語として書き留められることはなかったものの、ひとつのスタイルとして成立していたと考えられる。

ロシア語からの翻訳を通して成立したと考えられるスタイル(ロシア語翻訳体)において、形動詞とそれが修飾する名詞の語順が自由になり、形動詞の前後に名詞が来ることが可能になると、修飾関係が曖昧になる。そこで修飾関係を明示する手段として、ロシア語文法にある一致が借用された。この一致が修飾関係を示す一般的な語結合の方法として、語順に変化のない形容詞と名詞の間にも転用された。さらに、ロシア語翻訳体のみならず、一致が規範として捉えられていくとともに、動詞文末の語順が比較的定着していて、語順もロシア語翻訳体ほど自由ではない物語フォークロア体や日常会話においても、一致が使われるようになったと考えるのである。

このような変化の過程を仮定すると、20世紀前後くらいから始まる言語調査隊による言語の記述が始まるころには、西方言の方ではほぼ義務的に、東方言では義務的ではないものの一致が見られるという状態になっていたと思われる。このことから、表1でみたデータ資料では証明できない破線の囲み内の状態について、受容過程の仮説を図式化して示すと表4のようになる。

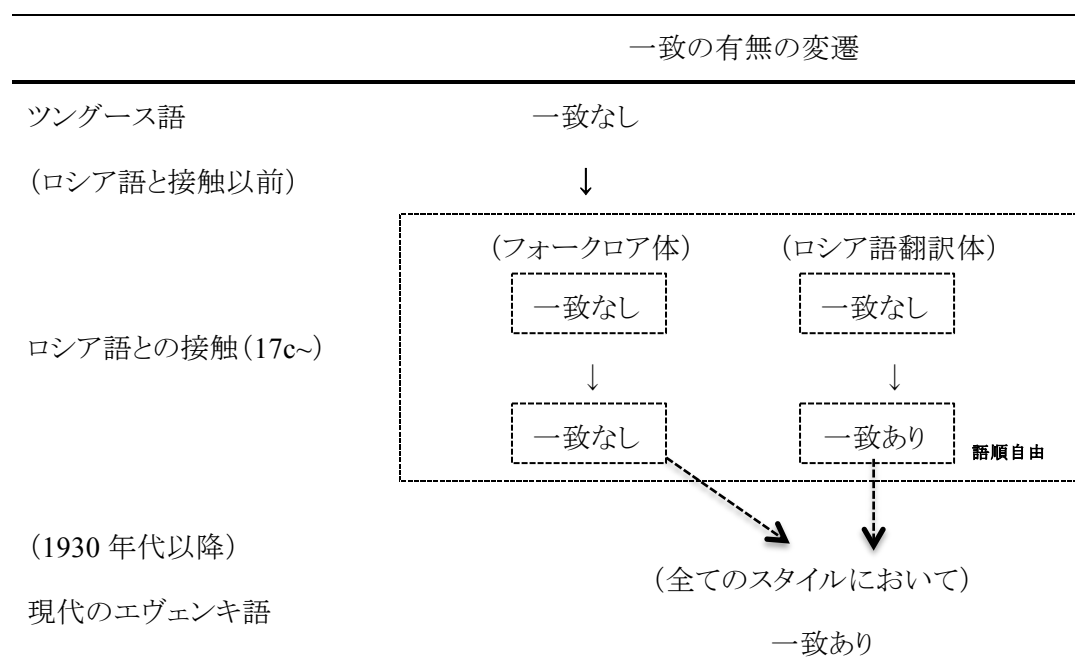


表4 立証できるエヴェンキ語の接触の歴史と一致の有無の相関

ほどなくして、1940年前後から文法記述の結果として、民族語教育のための標準文語の設定、教科書類の作成がなされ、そこでは一致することが“規範”として受け入れられ、広められていくことになる。こうした教育による、一致の“規範的な文法”としての普及がすすみ、その後エヴェンキ族のなかで現れる近代文学的な文体や、さらにはロシア語からの翻訳によらない長文や複雑な複文をもちいる現代エヴェンキ語体生じるが、一致はエヴェンキ語の文法として定着して見られることになる。

本章で分類したスタイル間での影響を時間の経過に従って考えると、表5のような流れを仮定することが出来る。元来のエヴェンキ語のスタイルと考えられるフォークロア体は、ロシア語の影響を大きく受けた翻訳体から影響を受け、語彙や文法に変化を被った。この時点で、一致の受容は生じていたのである。その後、テキストや辞書、教科書が整えられるころから規範的なエヴェンキ語文法も整えられ、また広まっていく。ロシア語との完璧な二重言語話者が生

まれるに従い、近代エヴェンキ語、さらには現代エヴェンキ語といった文体が見られるようになってきた、と見ることができる。












		ロシアによるシベリア制服	一致の受容	言語の記述	1930年代 文法記述と規範化		ロシア語とのバイリンガル	
ロシア語								
ロシア語翻訳体								
現代エヴェンキ語体								
教科書体								
近代エヴェンキ語体								
フォークロア体								

表5 エヴェンキ語の歴史とスタイル間における一致の受容過程



## 第七章

### エヴェンキ語の“不一致”の出現

前章において、エヴェンキ語においては、従来他のツングース諸語や周辺のアルタイ系諸語と同様に、修飾語は被修飾語の数・格に一致した接辞をとることはなかったが、ロシア語との接触による複雑な文の生成の必要性和、教育での規範的文法の徹底により、一致が文法として受容されたと考えた。

このことにより、それまでアルタイ諸語と共通して持っていたと考えられる“連接”と呼ばれる語の結合方法がなくなったということになる。しかし、近年のエヴェンキ語資料を観察すると、一致を示すべきところに一致がなく、無標の形で修飾語として機能している例が見られる。

本章では、エヴェンキ語に近年みられるさらなる語結合の変化について観察する。まず、近年のエヴェンキ語資料についてまとめる。そして、「連接(примыкание)」と呼ばれる語結合について、複合語との関係からまとめる。最後に、一致の無い語結合について、「連接」と「複合語」との関係から再検討し、エヴェンキ語で起こっている語結合方法の変化について言及する。

#### 7.1 アルタイ諸語の連接とは

第三章で概観した通り、ツングース諸語に属する言語の中でもエヴェンキ語には、語結合方法としての連接はおおくは用いられなくなっている。副詞が修飾する形容詞や動詞の前におかれる程度である。

一方で、他のアルタイ諸語において接続はよく用いられる方法であるといえる。例えば、エヴェンキ語に隣接するヤクート語における語結合方法を見てみよう。

Убрятова(1950)によれば、ヤクート語には、接続、相応<sup>67</sup>、反映があるとされる。これら語結合の方法が、どのようなときに使われるのかを、エヴェンキ語の語結合方法と対応させたものが、図である。ヤクート語での状況は、ほとんどのアルタイ系諸語にも通ずるものであり、細かい点を除けば、ヤクート語独自で変化したものはない。

エヴェンキ語		ヤクート語
相応	所有構造	相応
	名詞＋名詞	
-----		
一致	形容詞＋名詞	連接
連接	副詞＋形容詞・動詞	
反映	定動詞類述語	反映

表1 エヴェンキ語とヤクート語の語結合方法の対比

前章まで考察した通り、エヴェンキ語には従来“一致”という語結合はなかったと考えられる。とすると、それ以前の語結合は、図に示したようなヤクート語の状況とさほど変わりがなかったであろうと考えられる。形容詞と名詞の間の修飾関係をしめす結合に、一致という文法が借用されると、[名詞＋名詞]にだけは残るはずの接続にも、なんらかの結合標示が必要になったのではないか。具体的には、名詞に形容詞派生接辞がつき一般的な修飾関係としてと捉えるか、あるいは所有構造と同じように人称接辞による相応によって表すかの、どちらかよることになる。そうして接続による[名詞＋名詞]の結合はなくなるわけであるが、この[名詞＋名詞]の結合の典型的な例が、複合語であるといえる。

<sup>67</sup> Убрятова(1950)では、相応(отражение)のことをエザーフェ(езафе)と呼んでいるが、ここでは統一的に相応と呼ぶことにする。

## 7.2 複合語について 一致と形態的变化

### 7.2.1 複合語の定義と位置づけ

一般に**複合**とは、音韻論および形態論で論じられる語形成の一手段で、2つ以上の独立性のある語から形成することで、これにより作られる語は複合語と呼ばれる(影山 1993: 13)。“独立性”という点において、後で触れる**派生**とは区別される。また、意味的な側面も関与する。すなわち複合語の意味するものは、構成する語の意味からはしばし予測不可能であると指摘される(Fabb 2001)。例えば、ロシア語(Rus.)の *tikhij* “静かな”という形容詞を見てみよう:

- (1) Rus. a. *tikhaja muzyka* “静かな音楽”

静かな 音楽

- b. *tikhij okean* “太平洋”

静かな 海洋

- c. *tikhookeanskij* “太平洋の (adj.)”

(1a)は形容詞と名詞からなる句で複合語とは呼びがたいが、(1c)のように形態的に二つの語が合成されて一つの語になっているときは複合語であると判断しやすい。また(1b)のように、形態的には一つに統合されてはいない場合でもあっても、意味的に一つの語と見なされ得るならば複合語と呼ぶことが出来ると、ここでは考える。

### 7.2.2 エヴェンキ語には無い複合語

エヴェンキ語(Ev.)には、語形成の手段として①派生、名詞句内の語の結合関係を表す手段として②一致と相応がある。

### ① 派生と複合

従来、エヴェンキ語の語形成は主に派生接辞によるものが一般的で、複合という語形成手段は存在しないとされてきた(Василевич 1940: 75, Nedjalkov 1997:85<sup>68</sup>, Болдырев 2007: 65)。例えば、(2a)では名詞 *ulguki* に名詞派生接辞である *-ksa* がつくことで、新たな名詞が作られている。また、(2b)では、名詞 *jolo* に形容詞派生接辞である *-mo* が付き、名詞 *alla* を修飾する構造で、新たな語である「石炭」を作っている。特に(2b)は、接続によって *\*jolo alla* とは言えない。これは、言語類型論的に相互に類似し、歴史的にも関係がある周辺言語のヤクート語(Sakh.)やモンゴル語(Mong.)には接続による複合という手段が生産的に存在することを考えると、特徴的なことと言えよう: 例(3), (4)。

- (2) *Ev.*      a. ulguki-ksa “リスの毛皮”      b. jolo-mo əlla “石炭”  
                リス-SUFF                                  石-SUFF      炭
- (3) *Sakh.*    a. taas čokh “石炭”                                  b. saruuu kumat “コウモリ”  
                石      炭    なめし皮      翼      (Убрятова и другие. 1982: 116)
- (4) *Mong.*    a. šar      šuvuu “フクロウ”                                  b. deed suruguul’ “大学”  
                黄色い      鳥    上      学校                                  (Kullmann 1996: 58)

## ② 一致と相応

エヴェンキ語の名詞句は修飾語の結合方法として、一致と相応がある。

一致は主に形容詞による名詞修飾において見られ、形容詞が主要部名詞の数・格に一致した語尾を取るものである：(5a)では名詞が与格標示を取っているが、これと同じ接辞が形容詞にもついているのが分かる。一方、相応は名詞による名詞修飾で、修飾する名詞の人称・数に相応する接辞が主要部名詞に標示されるが、このとき二つの名詞の間には所有関係あるいは全体と一部の関係があるときなどに限られる(Колесникова 1966)：(5b)では名詞 *amaka* “熊”の3人称単数に相応する所有人称接辞 *-n* が、名詞 *abdun* “巢穴”の最後に付いているのが分

<sup>68</sup> 「*compound nominals* が存在しない」と記述されている。



.... Turuŋi (8)dulugu tatkit-internat-il-du tāduk (9)kuŋakadi gulə-l-du (10)Turuŋi kraevedčeskaj

トゥルの 中間の 学校-寄宿学校-PL-DAT そして 子供の 家-PL-DAT トゥルの 地域学の

muzej-duk havamni-l-in alagumni-l-nun tāduk vospitaťel-il-nun ymnə itiga-na-l.

博物館-ABL 労働者-PL-3SG.POSS 教師-PL-COM そして 保育員-PL-COM 一緒に 準備して-CONV-PL

(Эвенкийская Жизнь, 15.03.2013, No.10)

「私たちの言葉」という祝日を、多くの様々な<sup>(7)</sup>ロシアの民族が祝う。・・・トゥルの<sup>(8)</sup>中等寄宿学校と<sup>(9)</sup>幼稚園で、<sup>(10)</sup>トゥルの地域博物館からの館員が教師や保育員らとともにが準備して(行事を執り行った)’

(8)、(9)は形容詞による名詞修飾の例だが一致は見られない。(10)では形容詞、格形式の名詞が前置され(連接)、後ろにくる名詞を修飾している。(9)の *kuŋakadi* は名詞 *kuŋakan* “子供”に、形容詞派生接辞-*di* がついた派生形容詞であり、(10)の *Turuŋi* は地名である *Turu* に接辞-*ŋi* が付いた派生形容詞、*kraevedčeskaj* はロシア語形容詞からの借用である(形容詞の曲用はせず語末は常に-*aj* になる)。また、(7)では相応が名詞修飾に使われているが、表す意味は所有でも全体・一部の関係でもないことが指摘できる。

エヴェンキ語において2つ以上の語が結合して名詞句を構成する時は、規範的には一致か相応のどちらかによるとされている。学校の民族語教育に使われる教科書などで書かれる文は、通常これに当てはまる<sup>70</sup>。しかし、上で見たように、現代のエヴェンキ語ではこれに従わない例が見られるのである。これら“例外”をまとめると、原則というほど強いものではないが、強い傾向として次のように分類できる。

<sup>70</sup> 風間(1994: 68)にはエヴェンキ語の一致について先行研究を中心に、他のツングース諸語の状況と比した分析がなされている。確かに東方言では一致はあまり見られないという先行研究はあるが、今回扱うデータは北方方言(ポリグス方言:標準語)に属す地域であり、また現代の民族語教育の教科書では一致は必須とも記載され、一致の有無が有意味であると考えられるため、これに反する例を例外として分析・分類対象とする。

### 7.3.1 意味的に複合語と見られる場合

形容詞と名詞の結びつきが強く、意味的に“複合語”と見なされるような場合は、一致はほとんどみられない。多くはロシア語の翻訳借用と見なせるような語である。

- (11) a. Turu-*ŋi* nono-*pti* tatkit-internat-*tu* “トゥルの初等学校で”

トゥル-ADJ 始め-ADJ 学校-DAT

- b. *hægdi* klassi-*l-du* “高学年のクラスで”

大きい クラス-PL-DAT

- c. *əvədi* turən-*di* “エヴェンキ語で”、 *əvədi* kul'tura-*va* “エヴェンキの文化を”

エヴェンキの 言葉-INSTR

エヴェンキの 文化-ACCD

- d. *hūŋtu* turə-*r-və* “他の言語を”

他の 言葉-PL-ACCD

これらのうち例えば(11b)にある形容詞 *hægdi* が普通の形容詞として使われていると考えられる次のような例(12)では一致が見られる。

- (12) *hægdi-l-və* *ǰagda-l-va* “大きなマツを”

大きい-PL-ACCD マツ-PL-ACCD

また、(11c)にあるような *əvədi* という語は一致しないで使われることが多く、(11d)の *hūŋtu* のように複合語とは考えにくい、通常一致が見られない使用がされる形容詞というものもいくつかある。実は *əvədi* が次の(13)のように一致を示す場合もある。しかしこの例では、名詞句に強調助詞-*kə* が続き文頭に名詞句がきているように、なんらかの強調を含めたニュアンスがあると考えられる。

また、(14)のように、通常の形容詞による名詞修飾で一致がある名詞句の場合、強調の助詞が付けられる時は、形容詞の後、つまり名詞句の間に割り入って来ることが多く見られる。一

方で(13)のように、複合語と見ることができる構造の場合、名詞句の間に助詞が入ることはなく、名詞句の後に置かれる。このことから、やはり(13)は一致は示しているものの、複合語としての性質は保持していると見るのが妥当である。

(13) əvədi-***l-və***      nimɲaka-***r-və-kə***    su      sa-rəs?

エヴェンキの-ACC 話-PL-ACC-PCL      2PL.NOM 知る-PRS.2PL

“エヴェンキのお話をあなたたちは知ってますか?”

(14) əvənki-l (...) in-ɟərə      hərəkə-***l-du-də***    dunnə-***l-du***...

エヴェンキ-PL 住む-PRS.3PL 他の-PL-DAT-PCL 土地-PL-DAT

“エヴェンキは他の土地にも住んでおり...”

### 7.3.2 派生形容詞の場合

次に、名詞としてもよく使われる語が、生産的な形容詞派生接辞(-ADJ)<sup>71</sup>を伴って出てくる場合、あるいはロシア語形容詞の借用語である場合は、一致があまり見られない。これら派生形容詞や借用形容詞の場合は、一致を示さなくとも次にくる名詞を修飾しているという語の結合関係が明確であるため(形容詞接辞と、一致の数・格の語尾の標示が余剰的に感じられるためか)、一致が見られないと考えられる。

(15) a. Turu-***ɲi***    nono-***pti***    tatkit-internat-***tu*** “トゥルの初等学校で” = (11a)

トゥル-ADJ 始め-ADJ 学校-DAT

b. ***gosudarstvennaj*** alagu-***di***    institut-***tu*** “国立教育大学で”

国立の(< Rus.) 教え-ADJ 学校-DAT

c. ge-***lə***    əvi-***di***    konkurs-***la*** “他のゲームのコンクールにおいて”

他の-ALL 遊び-ADJ コンクール-ALL

<sup>71</sup> 形容詞派生接辞は多様であり一つではない (Колесникова 1966: 111)。



### 7.3.3 格接辞と名詞の結合の場合

名詞が動詞からの派生である場合において、語根の動詞が取る格形式(動詞による格支配)がそのまま語結合の標示として残る例がある。「～する人」を表す名詞派生接辞-*mni*だ。

- (16) a. tavu-mni-l nimɲaka-r-*va*, ulgu-r-*və*, ikə-r-*və*, fol'klor-*va*

集める-人-PL 話-PL-ACCD 物語-PL-ACCD 歌謡-PL-ACCD フォークロア-ACCD

“民話、物語、歌謡、フォークロアを集める者たち”

- b. so savka-l oro-r-*vo* karavuči-mni-l

とても 有名な-PL トナカイ-PL-ACCD 見張る-人-PL

“とても有能なトナカイの見張り人たち”

### 7.3.4 相応

本来は所有関係、全体と一部の関係を表す時に使われている相応が、そのような関係以外の名詞と名詞の結合にも使われることがある<sup>72</sup>。

- (17) a. Əvenkija iləl-*və*-n “エヴェンキヤの人々を”

エヴェンキヤ 人々-ACCD-3SG.POSS

- b. professija gərbi-l-*və*-n “職業の名称を”

職業 名前-PL-ACCD-3SG.POSS

<sup>72</sup> エヴェンキ語においても、日本語の接続助詞「の」の名詞限定修飾用法(所有関係、全体・部分の関係、時間的關係、場所的關係、材料の限定、種類の限定、内容の限定など)と補足語的用法(格關係を表す)が示す範囲(益岡・田窪 1992: 159)や、ロシア語の生格による名詞修飾の用法にある所属關係(所有、附属、機能、性質、行為、時期など)などの表す範囲(八杉・木村 1953: 43)にも似た広い範囲の關係において語結合が可能のようにみられるが、その確認のためにはより多くの例を見る必要があるだろう。ここでは指摘にとどめる。

## 7.4 語結合の過渡期的変化

以上より、現代エヴェンキ語における一致の有無の揺れ、名詞修飾の意味の現れ方の分類から、次のことを主張する：

一致は、形容詞と名詞からなる名詞句内の語結合において義務的であるが、次のような場合は関係が明確であると判断されうるため、一致がない、つまり連接による結合が許容される。

- ・ 複合語と判断される場合
- ・ 形容詞派生接辞により後ろにくる名詞との修飾関係が明確な場合

許容されるというのは、決して一致することはないというわけではなく、強調や明確性が欠けるときなどには一致を示すことも可能であることを含む。

また、名詞修飾における相応は、所有や全体・一部の関係よりも広い意味で、語の結合方法として使われるようになっている。

エヴェンキ語			
反映		所有構造	
		名詞＋名詞	
一致 (修飾)	或は	連接 (複合)	形容詞＋名詞
連接		副詞＋形容詞・動詞	
相応		定動詞類述語	

表2 エヴェンキ語の語結合の新たな局面

最後に、エヴェンキ語における語結合の全体を眺めると、おおよそ次のような体系の変化が

起こっていると指摘できる。つまり、従来は品詞により結合方法を分けて考えられていたが(A)、一致をしなくてもよい複合による結合が生じるように至り、その結果、語の結合度合いにより結合方法が選ばれるようになってきた(B)。今回は共時的な面を中心に観察してみたが、そもそもエヴェンキ語における一致は言語接触により近年になって文法として成立したと考えており、一致をめぐってさらに通時的な動態を考察することも必要であろう。

(A) 従来のエヴェンキ語における語の結合方法

結合の種類	結合方法
形容詞＋名詞	一致
名詞＋名詞	相応



(B) 現代のエヴェンキ語における語の結合方法

結合の種類	結合の度合い	
	弱 ←	→ 強
形容詞＋名詞	一致	連接(複合語)
名詞＋名詞	派生接辞や格接辞	相応

表3 語の結合具合からみた多様化への変化

## 第八章

### 結論

これまで、エヴェンキ語における一致の発生の原因を追究するため、言語接触という視点からその変化の過程、要因を探ってきた。

第一部では、エヴェンキ語が現在おかれている社会言語学的状況から、いかに周辺言語からの影響を受けてきた言語であるか、また、将来的に危機的であるほどに母語保持率が低いことを見た。そしてその後に、エヴェンキ語の文法の概要について記述した。エヴェンキ語が、さまざまな変異 (variants) を保つとしても、その基幹となる文法システムに違いはないと考えられる。もしその基幹を揺るがすような変異があるのであるならば、それはもはやエヴェンキ語とは別の実体であると捉えるべきである。

第二部に入り、エヴェンキ語の歴史をたどりつつ、ツングース諸語との関係、接触を持ってきたヤクート語や、ブリヤート語との接点をさぐった。アルタイ諸語とよばれる相互に似た言語であるものの、系統関係については立証されていないこれら言語であるが、近隣での長く緩い接触は、収斂とも呼べるような相互に似た文法体系をもつに至ったことの大きな要因と考えられる。例えば、エヴェンキ語には副動詞形に人称語尾をとるという特徴が発達している。しかしこうした特徴も、類型論的にみれば東北アジアのアルタイ系諸語には類似した特徴であることをしめた。そして、どの言語から影響を受けてそのような文法を持つようになったのかが分からないほど、収斂的に共通して持つに至った共通文法特徴ということができる。

その後のロシアのシベリア進出により、すでにエニセイ川からバイカル湖までの水系地域を中心に広く居住範囲を広げていたエヴェンキは、いち早くロシア、すなわちロシア語との言

語接触を受けることになった。ロシア語との接触は、それまでの他の言語との接触と比べると、はるかに強力で濃厚なものであった。借用語を例にとれば、当初はエヴェンキ語の音韻の中へ変換される必要があったが、今ではロシア語のレキシコンがそのままエヴェンキ語のレキシコン源として機能していると見える。それは文法の分野でも当然に起こりうることで、具体的な事例として、エヴェンキ語に置ける不定対格の使用の変化をみた。否定文や、疑問文などに出てきやすいなど、ロシア語の生格と似た使われ方がなされていることを確認した。

一方で、ロシア語との接触が密接で、圧倒的になるとともに、エヴェンキ語の記録もなされ、文法、辞書、テキストがまとめられてゆく。

本論文の目的である、エヴェンキ語における言語変化としての一致を考察するとき、一致がどこからきたのかという問題と、なぜ、どのように一致を受け入れたのかという問題は、別にして考察しなければならない。というのも、言語学的な記述が始まったその当時、すでにエヴェンキ語は一致という文法特徴を一般に受け入れていた。歴史的資料によっては、言語変化の過程を確認することは出来ないのだ。

一致がどこからきたのかという起源の問題に対しては、古い記述と地理的な文法の差異から答えを見いだすことが出来る。ロシアの影響が相対的に低い東方言の初期の記録には、一致を起こさないという記述の存在が確認できる。また、シベリアのエヴェンキ語と中国のエウエンク語やオロチョン語は、エヴェンキ諸語というひとつの方言群へと帰属させることが確認されたが、その中国内のエヴェンキ諸語には、一致はみられないことが確認された。つまり、ロシア語の影響化にあるエヴェンキ語にだけ一致はみられ、変化も西から東へと移っていったことが分かり、一致の起源はロシア語以外には考えられない。また、一致を持つように変化をした言語は他にもあり、言語変化としても自然なものであると言える。

次に、一致の受容の過程、原因についてであるが、これ現在のデータから推測し仮説を立てることができる。記録され始めたエヴェンキ語のテキストには、ロシア語の影響の度合いによって異なるスタイルをとることに注目し、それらのスタイルの間に見られる差異から一致の発生の要因の探るという方法をとった。語順が自由になったと指摘されるエヴェンキ語であるが、スタ

イル間で差異があることが分かった。たとえば、一致の目的である修飾関係をみれば、形容詞は名詞に前置される点において、語順に変化は一切起きていない。そのような中、一致と関わる重要な語順の変化に、関係節の位置と構造があることを指摘した。

フォークロア体など、古い語順を取る傾向にあるスタイルでは、形動詞形に導かれる関係節は被修飾名詞の前に置かれる。それが、ロシア語翻訳体を通して、後置されるようになり、近代のエヴェンキ文学においても、後置されることが確認された。現代のジャーナリズムに使われるようなスタイルでは、疑問詞を関係詞としてつかう接続方法にまで変わってきている。こうした一致を必要とする構文にあわせて、近年では、教科書類などで一致をすることがエヴェンキ語の規範的な文法として記述され、教育されてきたことも大きい要因と考えた。

以上により、エヴェンキ語における一致の発生は、ロシア語との言語接触により、ロシア語翻訳の文体をとおして、エヴェンキ語の語の結合方法に変化を与えた、という仮説が立てられると主張した。

ここで、言語接触の結果、現在のエヴェンキ語はどのような位置づけが可能であろうか。

ロシア語との接触以降、大きな変化を被りつつもエヴェンキ語は保持され、いくつかのスタイルに共通するような基幹となる文法もあると思われる。しかし、現代エヴェンキ語体についてみると、そのロシア語からの影響は大きく、それまでのエヴェンキ語の変異として扱える範囲なのかについては、疑問がある。レキシコンのロシア語化、語結合に複合が加わる、そして動詞は基本的に文末には来ない。さらには、副動詞形の多用や、関係代名詞・関係副詞のような関係接続詞による文の結合などにいたっては、まるでロシア語の文体である。言語接触の分類で、新たな言語が生じるという場面の一つ、混成言語の成立というものがあつたが、現代エヴェンキ語はその混成言語と呼ぶことができる可能性も否定できない。図1に示したように、エヴェンキ語は今も民族語として存在しているが、ロシア的な都市生活の中では、ロシア語との混成がかなり進んだ段階にきていると見るのが可能である。この混成言語と見なうる現代エヴェンキ語(文体)は、今のところ、一部の新聞の書き言葉に見られる言語文体であり、極端なスタイルの一つに過ぎないかもしれない。しかし、母語保持率の低く、ロシア語へのシフトやバイリンガルが多いエヴェンキ語話者が、今後はさらにロシア語のほうにより基盤を置く言語生活と

なっていくであろうことを考えると、こうした混成言語としての現代エヴェンキ語が安定してゆくことが考えられよう。

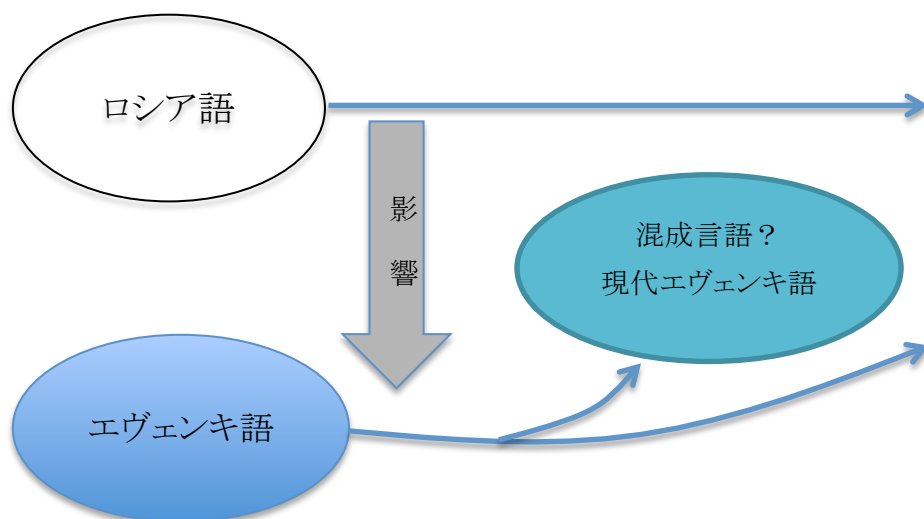


図1 ロシア語とエヴェンキ語の接触による言語実体の局面

## 付録資料

### 付録 1 基本語彙の音声表記一覧

語彙	音声表記	辞書形式
001 頭	dɛl	дэл(-ва)
002 髪	ɲu:rikte	нюриктэ
003 額	ɔmχɔtɔ	омкото
004 目	e:sa, e:xa	ᠡса, ᠡха
005 耳	se:n	сѐн
006 鼻	ɔŋɔktɔ	онгокто
007 口	amɲa	амнга
008 齒	ɨ:ktɕ	иктэ
009 手	ɲa:la	нгᠠᠯэ
010 指	ɯŋakan	унякᠠн
011 足	halgan	халган
012 皮膚	nanna	нанна
013 血	sɤksɕ, sɕ:xɕ	сᠡксэ
014 骨	ɡɛramna	гирамна
015 肉	ɯllɕ	уллэ
016 体	ɨllɕ	иллэ
017 病	ɶŋɯ:mɯk	энᠡмук
018 藥	bɕgɕ	бэгᠡ
019 塩	tu:rka	турукэ
020 油	ɶmu:ran	
021 酒	araki:	аракй
022 タバコ	(tabak<rus.)	



023	食べ物	dzevga:	девгэ
024	卵	umũkta	умукта
025	鳥	dəgĩ	дэги
026	刀		
027	糸	tomqo	ТОМКО
028	服	tətĩ	тэты
029	紙	(buma:gə<rus.)	
030	もの	ĩdəgə	идэгэ
031	魚	ɔllo	олло
032	犬	ŋinaki	нгигакин
033	家	dzu:	дзю(-ва)
034	金	məŋun	мэнгун
035	木	mo:	мō
036	草	təu:ka	чўка
037	葉	avdanna	авданна
038	花	ilaga	илага
039	道	xəktə	хокто
040	川	bira	бира
041	山	urə	урэ
042	水	mu:	мў(-вэ)
043	石	dzo'lo	дёло
044	土	tokala	тукала
045	火	toyo	того
046	風	ədin	эдын
047	雲	tuksu	тўксу
048	雨	tĩgdə	тыгдэ
049	空	ŋaŋŋæ	нянгня

050	太陽	de:la:ea:, si:gun, ju:ltən	дэлачā, сигун, юлтэн
051	月	be:ga	бēга
052	星	o:ei:ka	ōсйкта
053	日	i:naŋji, karga(ji:)	инэнги, тирганй
054	月 =051		
055	年	aŋgaŋi:	аннганй
056	朝	təgəltənə	тэгэлтэнэ
057	昼 =053		
058	夜	si:ksə, dɔlbɔltənɔ, a:xeltana	сиксэ, долболтоно, āхилтана
059	昨日	tɪ:jivə	т̄йнивэ
060	明日	təmi:	тэми
061	今日	i:naŋuman	инэнгмэн
062	今	əxɪtkən	эхйткэн
063	いつ	o:kin	ōкин
064	時間	xər	
065	1	umun	умӯн(-вэ)
066	2	dzu:r	д̄юр(-вэ)
067	3	ilan	илан
068	4	digi	дыгын
069	5	tunŋa	туннга
070	6	nuŋun	нюнгун(-мэ)
071	7	nadan	надан
072	8	dzapkun	дяпкун
073	9	jegin	егин
074	10	dza:n	д̄ян
075	いくつ	adi	ад̄й
076	夫	ədi	эд̄й

077	妻	axi	ахй, асй
078	父	amin	амйн
079	母	əɳɿn	энийн
080	息子	omolgi	омолгй
081	娘	xonat	хунāт
082	兄	akin	акйн
083	姉	əkɿn	экйн
084	弟・妹	nəkɯn	нэкўн
085	友	gɿrki	гиркй(-вэ)
086	男	bəje	бэе
087	女 =077		
088	名前	gərbi	гэрбй
089	声	dilgan	
090	音	ɿɳɯ	инни
091	言葉	tu:ra	турēн
092	心・心臓	mie:lan	мёван
093	神	səvəkɿ	сэвэкй
094	左	dzeginɳu	дегиннгў
095	右	a:nɳu	аннгў
096	前	dzulaski	дюлэски
097	後ろ	amaski	амаскй
098	中	do:gu	дōгў
099	外	turgu	
100	上	ɔjɔgu	оёгў
101	下	xərɔ	хэрэ
102	見る	iteetmi	ичэтмй
103	聞く	do:lteatmi	дōлчатмй

104	言う	gunmi	гүнмй
105	歌う	xa:ga:mi	хага̄мй
106	話す	uktea:matmi	
107	笑う	ɟɲemi	инемй
108	泣く	sɔ:mi	сонгомй
109	怒る	təkɔ:lmi, sɛ:ndemi, xe:ndemi	хēндымй
110	驚く	so:xi:mi	сохемй
111	打つ	iktɛmi	иктэмй
112	押す	tɛrmi	
113	待つ	dzaɣami	дявамй
114	殺す	ɣa:mi	вāмй
115	着る	tɛtmi	тэтмй
116	読む	taŋmi	тангмй
117	切る	dzigmi	дигмй
118	作る	ako:mi	
119	開ける	ɲi:mi	нймй
120	閉める	tasmi, sommi	сōмй
121	住む	bigimi, ɟimmi	бидемй, инмй
122	数える = 116		
123	生む	baldemi	балдб̄мй
124	生まれる	baldevmi	балдб̄вмй
125	死ぬ	bɯmi	бумй
126	会う	alteami, balaldami	алчамй, бакалдб̄мй
127	置く	na:mi	
128	出る	ju:mi	юмй
129	入る	gerkomi	геркумй
130	来る	ɛmɛmi	эмэмй

131	行く	ɲəɲəmi	нгэнэмй
132	与える	bu:mi	бумй
133	する	o:mi	омй
134	思う	dzelda:mi	
135	知る	sa:mi	самй
136	ある	bimi	бимй
137	大きい	xəgdɿ	хэгды
138	小さい	o:xa	оха
139	強い	əgdəxi	энгэхй
140	弱い	jumbu	юмбу
141	遠い	goro	горо
142	近い	daga	дага
143	熱い	xəkɯ:xi	хэкухй
144	寒い	xe:mori, ɲɲiɲi	хёмур, ингин
145	新しい	o:makta	омакта
146	古い	goropti	городпы
147	多い	kətə	кэтэ
148	少ない	ogo:kun	угукун
149	光	ɲə:ri	нгэри
150	白い	bagdama	багдама
151	黒い	koɲnomo	конгномо
152	赤い	xulama	хулама
153	色	ɲteɖa	
154	良い	aɟa	ая
155	悪い	əɾɯ	эрӯ
156	同じ	targateinti	таргачин

付録 2

エヴェンキ語方言間基礎語彙対応表

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
(1) 数詞						
1.“1”	emũ	əmun	əmun	əmun	omon	umun
2.“2”	žūr	džuur	dzuur	džuur	džuur	jūr
3.“3”	ilā	ilan	ilan	elan	ılan	ilan
4.“4”	digĩ	digin	digin	digin	dijin	digin
5.“5”	tona	ton	ton	tona	tonɣa	tunɣa
6.“6”	ńunũ	niun	nunun	niun	ńunun	ńunun
7.“7”	nadā	nadan	nadan	nadan	nadan	nadan
8.“8”	žakkũ	džaxon	džabkon	džabkon	džapkon	japkon
9.“9”	jegĩ	jəgin	jəgin	jəgin~jəjin	jəjin	yəgin
10.“10”	žāā	džaan	dzaan	džaan	džaan	jān
(2) 身体名称						
12.頭	dil~dili~dəli	dela	deli	dele	dılı	dəl
13.髪	nūriktə~nūritte	nūttu	nūrigtə	niarigtə	ńuriktə	ńuriktə

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
14.額	maŋil~maŋila	maŋgil	omkoto	omokot	dərə	omkoto
15.顔	dərɛl, m'ēta	dərəl	dərəl	dərə		dərə, bādə
16.あご	ʒɛgi	dʒəgi	dʒəgi	dʒəgə	dʒəg	ʒəg
	sarmilta ~					
17.まゆ	sarmikta ~ sarmitta	samitta	sarmigta	saramigta	ʃarmokta	sarimikta
18.頬	ančā	aŋtʃin	antsan	aŋtʃan	aŋtʃan	ančan
19.目	īsal	iisal	iisa	eexa	jɛɛʃa	əsa~əha
	namakta ~ naŋmukta	namatti	namugta	inamugta	ńamokta	ińamukta~inamukta
20.涙						
21.耳	šēē	ʃeen	ʃiin	ʃeen	ʃɛɛn	syēn
22.鼻	nēnča	neɛŋtʃi	onogto	oŋogto	ɔŋɔktə	oŋokto
23.口	amma	amma	amŋa	amuŋa~amŋa	amŋa	amŋa
24.唇	ɛmmɛ	omoŋ	əmun	xəmuŋ	əmun	həmun
25.舌	iŋi	iŋi	inni	inni	iŋŋi	inni~ilŋi~inŋi
26.齒	ītte	iittə	iigtə	iigtə	iktə	iktə
27.首	nixama~nixima	nixam	nikimna	nikimna	nɪkɪmna	nikimna

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
28.肩	mīrē~mīri	miir	miir	miir	miirə	mirə
29.手	nāla~nāli	naalla	naalla	ḡaalla	ḡaala	ḡālə
30.掌	algā	aḡḡa	aliga	xanḡan	aḡḡa	hanḡa
31.指	unaxāā	unuxuḡ	onakaḡ	onekatḡan	uḡakan	uḡakān
32.足	bēldīr	bēldiir	bēgdiiil	xagdixi	algaḡ	halgaḡ
33.膝	ēḡē	əḡəḡ	ənnən	xənḡən	əḡḡən	hənḡən
34.かかと					(əḡt'ə)	ḡiḡti
35.背中	darama	sogdondo	sogdondo	kəntirə	arkan	kəḡtirə
36.胸	xəḡer, tiḡē	xəḡgər	tiḡən	tiḡəḡ	tiḡən	tiḡən
37.腹	guḡḡēḡ~guḡḡēḡ ē	gudug	gudig	ur	gudəḡə	ur
38.皮膚	nanda	nanda	nanda	illə	nana	nanna
39.血	sēkčē~sētčē	səətḡtḡi	səəḡsə	saaxa	ʃəkḡə	səksə
40.骨	giranda	giranda	giramda	giramna	giramna	giramna
41.肉	uḡḡē~uḡḡi	uḡḡu	uḡḡə	uḡḡə	(ulə)	uḡḡə
42.体		bəj	bəjə	bəjə	bəjə	illə
43.病	ēḡexū	ənuxu	ənuku	ənuku	ənuku	(aḡūmuk)



	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
44. 藥	dōō	əəŋ	əəɳ	bəgə	əəm	bəgə
(3) 動植物						
45. 魚	oxsōō	oxsoŋ	oldo	ollo	ɔlɔ	ollo
46. 魚の卵					tɪfə	tihə
47. 鳥	dəgī	dəgi	dəgi/ʃiibkan	tʃiibkatʃan	dəji	dəgi
48. 卵	umatta~umurta	umutta	omogto	omogta	ʊmʊkta	umukta
49. 乳	uuxū	uxuŋ	ukuŋ	ʊkʊŋ	(uxun)	ukumnī
50. 犬	ninaxī	ninixin	ninakin	ninakin	ŋanakın	ŋinakin
51. 馬	morī	moriŋ	morin	morin	mʊrɪn	murin
52. 牛	uŋegē~uŋigē	uxʊr	xukur/ukur	xʊkʊr	ukur	hukur
53. 狐	sulaki~sulaxi	(ʃʊlaxɪ)			(ʃʊlaxi)	sulakī
54. 兔	tōlēi, tutčaxi~turčaxi	tooli	toole	tuuxaki	(t'uxʃaxi)	tuksakī~tuhakī
55. 鼠	aśixsāā	aʃiʃtʃaŋ	xologna	tʃiŋirikan	(əniʃəən)	siŋərəkēn
56. リス	uluxi	(əluxi)			(ulixi)	ulukī
57. トナカイ		(bʊg)			(k'umaxaa)	oron

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
58.角	ījə	iigi~iigə	iijə	iijə	(jeje)	ijə
59.尾	irgi~iggi	iggi	irgi	irgə~irgi	(irki)	irgi
60.爪	uśikta	uŋitta	uŋigta	oxegta		osikta
61.巢	ūwī~ūbī	uuge	uur	tʃaapa		umuk
62.金	altā	altan	altan	soolota	altan	altan, золото
63.銀	məgūi	məgun	məgun	məŋun	mowon	məŋun
64.木	mō	moo	moo	moo	mow	mō
65.草	nogō ~ noyō ~ orōkto	orootto	oroogto	oroogto	tʃuoka	čūka
66.葉	natiči	latʃtʃi/natʃtʃi	nabtsi	abdanna	naptʃi	avdanna
67.花	ilgā	igga	tsətsəg	onio	ilga	ilaga
68.根	dagasā	niintə	undus	niintə	(moot'əxən)	ŋiŋtə
(4) 自然						
69.道	tuurgō	təggə	xogdo	xogdo	əktə	hokto
70.川	bira, muurū	doo	bera	bera	bira	bira

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
	orōō, urę, xadār	ur	oroon	urə	urə	urə
71.山						
72.谷		dzigga	xonkor	təwəkə	jupkan	hərəlgən
73.森	bosog, sagdūl	ʃige	xəgdəg ʃige	əgdən	(mɔɔʃa, ɕiji)	agī, mōsa
74.湖	amuǰi	əlɡəəŋ	karadz	amutgaŋ	əgdəŋə bira	āmut
75.海	dalej	dale	dalaj	moore	dalaj	lāmu
76.岸	üg~ug, ǰakka	nəəxi	nəəŋki	əmkel	(məxtin)	ǰapka, ugu
77.水	mū	muu	muu	muu	muu	mū
78.氷	ömuukći~ömwut ći	əmətʃtʃə	umugsu	əməxə	(tʃuxə)	ǰukə
79.石	ǰolo	dzolo	dzolo	dzolo	(tʃɔlɔ)	ǰolo
80.土	tuxali	ʃirattan	tukal	tukala	(tʰuxala)	tukala
81.土地	buya(~boɣ)				tur	dunnə
82.火	togo	tog	tog	togo	tɔgɔ	togo
83.風	ędī, xī	ədiŋ	ədin	ədin	ədin	ədin

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
	tökčę ~					
84.雲	tukčę ~ tukčuw	tətʃtʃi	tugsu	tuuxu	tukʃu	tüksu
85.雷鳴	agdī	adde	agdi	agdi	agdı	agdī
86.稲妻		gilowuŋ	tale	dʒuxəniwuŋ	(t'alenu)	talınuran
87.雨	udū	uduŋ	udun	tigdi	udin, tigdə	tigdə
88.雪	imanda	imanda	imanda	emanna	ımana	imanna
89.空	burkā, teŋeɾ	abagaŋ, bog	naŋna, boga	boga	boga, ńaŋńa	ńaŋńa, buga (自然)
90.太陽	šigūũ	ʃigun	ʃigun	ʃigun	dilatʃa	dəlačā, sigun, jultən
91.月	bēya~b'ēya	beega	beega	beega	bεega	bjēga
92.星	ōšikta~ōšitta	oʃitta	ooʃigta	oxigta	ɔʃikta	ōsīkta
93.光	geɾel~geɾil, ilāā, saŋa	ilaan	ila	garpa	ılaan	ŋōrī
94.霞					ɔlaŋŋa	
95.霜	onōr				ıkʃan	suvɣiksə, siŋiksə
96.霧	manā	manaŋ/nəəkkəŋ	manaŋ	tamna	tamna	tamnaksə
97.露	šilikši				ʃiləkʃə	siləksə

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
98. 雹					bugana	bōna, bōkta
99. 虹		ʃeeran	solonɡo	ʃeeran	ʃeeron	
(5) 時間						
100. 時間	erī	əriŋ	əriŋ	adidu/ookin	ərin	(hər)
101. 日	ineŋi~ineyi	inig	inəŋgi	inəŋi	iniji~inigi	inəŋi, tirganī
102. 月	bēya~b'ēya	beega	beega	beega	bεε	bjēga
103. 年	an'ē, žil	ane	annani	anŋani	aŋŋani	anŋanī
104. 朝	egde~edde~erd e	əddə	inərəŋ/timatsiŋ	təəltəŋ	inəŋ	təgəltənə
105. 昼	ineŋi~ineyi	inig	inəŋgi	inəŋi	ərdə, inəŋ dolın	inəŋi, tirganī
106. 夜	dolbo	dolob	dolbo/agtir	dolbo	dolbo, ʃikʃə	siksə, dolboltono, āxiltānə
107. 昨日	tīnuwe	tinuɡ	tiinuʷ	tiinəʷ	tiinəwə	tīnivə
108. 明日	timāšī	timaafīŋ	timatsiŋ/teme	temen	tīmaana	tēmī
109. 今日	eri inəgi	əri inig	əʃi inəŋgi	əxitkəŋ	ənnijii	inəŋmən

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
110.今	ẽʃĩ	əʃĩ	əʃĩ	ərdət	(əʃk'əxin)	əhĩtkān
111.早春	nɛlxi	nələki	nəlki	nəlki	nəlki	nəlkinĩ
112.遅春						ñəŋñənĩ
113.夏	ʒuga	dʒog	dʒuga	dʒowa	dʒuga	ʒuganĩ
114.秋	bolo	bol	bol	bolo	bɔlɔ	bolonĩ
115.冬	tuɠu	tug	tugə	tugə	tuwə	tugənĩ
(6) 親族など						
116.夫		ətɬəŋ	ətirkəŋ	ətirkəŋ/ədi	ədii	ədĩ
117.妻		gikki/aʃe	atirkəŋ/aʃe	atirkəŋ	aʃu	ahĩ~asĩ
118.父	abā, abaj, amĩ	amiŋ	amin/ama	ami	amin	amĩn
119.母	enē, enĩ	əniŋ	ənin/ənə	əni	anın	ənĩn
120.子供	uɾe, uɾe	urəl	xuril	xuril	kɔɔkan	hutə
121.孫		omole	minuʃik	minuʃik	ɔmɔlɛɛ	hutəv hutən
122.息子	uɬkɬexēē	ut	omolge	omolge/xutə	utə	omolgtĩ
123.娘	unāʒĩ	unaadz	unaadz	xunaadzĩ	ɔnaadzĩ	hunāt
124.兄	axĩ	axiŋ	aka	akin	akin	akĩn

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
125.姉	exĩ	əxiŋ	əkə	əkin	əkin	əkĩn
126.弟	nəxũ	nəxun	nəkun	nəkun	nəkun	nəkũn
127.妹	nəxũ unāǰi	unaadz nəxun	unaadz nəkun	xunaadzı nəkun	unaadzı nəkun	nəkũn
128.老人	etikkēē~rk- ~etxēē	xəkə	diidu/ətirkəŋ	xəkə	ətirkəətʃəən	ətirkəŋ, amākā, əhəkə
129.老婆	atikkāā	əwə	baabu/atirkəŋ	əwə	atırkaatʃaan	atirkān, ənyəkə, əbəkə
130.友達	guusw, nuwō	axa nəxul	girki	girki/nakume	gutʃu	girkĩ
131.男	bəi, beje	nerog	nerawi	bəxətkəŋ	nıraj bəjə	bəjə
132.女	aśĩ	aʃe	aʃe	axatkaŋ	aʃı bəjə	ahĩ, asĩ
133.名前	gərbĩ	gəbbi	gərbi	gərbi	kala/gərbi	gərbĩ
134.声	dilgā	delagaŋ	dilgan	delgan	(telkan)	dilgan
135.音		anir	awen	goolas		inni
136.言葉	wg~wgə~ũyę m'ēyā ~	dziŋdziwun	wgə/inni amŋa	təurən	(urkur)	turəŋ, həŋkə
137.心(臓)	mĩyā ~ ōg	meegaŋ	meewan	meewan	mæegan	mjēvan
138.神		bokkoŋ	borkan	borkan		səvəkĩ

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
(7) 方向						
139.左	ᠵᠡᠩᠭᠤ	dʒəgin	dzəəŋ	dʒəgin	dʒəjiŋɣida	ʒəginɣū
140.右	barūntixī	aan	baruun	anɣun	aanɣida	anɣū
141.前	ᠵᠠᠯᠢᠰᠠᠰᠠ	dʒulida	dzulilə	dʒulələ	dʒulgidə	ʒuləski
142.後	amīlā	amida	amirila	amala	amargida	amaskī
143.中	dōlā	doolo	doolo	doola	doolaa	dōgū
144.外	tulᠡᠰᠠᠰᠠ~tulᠡᠰᠠ ī	tullə	tulilə	tuligə	tulləə	tulilə
145.上	uɣᠡᠰᠠᠰᠠ	ugilə	ugilə	ujilə/xoron	ujləə	ojogū
146.下	eri	əggilə	ərgilə	xərgilə	ərgiləə	hərə
(8) 形容詞						
147.大きい	egdūguu	bonɣon	əgdug	xəgde	əgdəŋə	həgdi
148.小さい	nisūxūũ ~ nisxū	nisəxəŋ	niitsi	osa	nitʃukun	hulukūn, ʒokyə
149.高い	gugda	goddo	gugda	gogdo	gugda	gugda
150.低い		nəttə	nəgtə	nəgtəg	nəktə	nəktə



	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
151.長い	ninomi	nonom	nonim/onime	ḡoniam/onim	ḡonom	ḡōnim
152.短い		urḡḡkḡḡ	urumkḡḡ	urḡḡkḡḡ	urumkun	urumkūn
153.広い	ḡemme	ḡḡḡḡ	urgḡḡ	albiḡ	awam	ḡmḡḡ
154.狭い		datʃʃi	ʃilimkḡḡ	ʃilimkḡḡ	ʃilḡmkun	tijḡ
155.太い	boḡḡ, dirami	diram	dereme	deram	dīram	dīram
156.細い	nḡmḡkkū ~ nḡnnḡkū	nḡmi	nḡmi	nḡmkḡḡ	nḡmkun	nḡmkūn
157.強い		mandi/xata	kata	manni	(k'at'aan)	ḡḡḡhī
158.弱い		moḡgir	dujḡ	xḡʃḡʃḡ	(ḡpḡḡ)	jumbu
159.遠い		goro	goro	goro	ḡḡḡ	goro
160.近い	daga	daga	daga	daga	daga	daga
161.深い	sūnta	sonto	sonta	sonta	ʃuḡta	huḡta
162.浅い	arbīkkū	albiḡ	albiḡ	arbiḡ	alba	arba
163.重い	mandē~mandī, uggḡḡdi	uggḡḡdi	uurku	urgḡ	urgḡ	urgḡhī
164.軽い	ḡnikkū	ḡnikkḡḡ	ḡniḡ	inimkḡḡ	ḡḡḡmkun	ḡīmkūn
165.暑い	ḡxuḡḡdi	ḡxuḡḡdi	ḡku	xḡku	ḡku	hḡkuxī

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
166.冷たい		bottaddi	səruuŋ	xemuri		hǰēmur
167.水溫い						jəpu
168.寒い	inigigdi	inigiddi	iŋini	iŋini	iŋin	iŋin
169.暖かい	namagdi	namaddi	nama	niamaxi	ńama	ňamahĩ
170.涼しい		bottaddi	sərun	ʃiŋuŋ	ʃərun	
171.新しい	irkēxĩ	ikkiŋ	irkəkiŋ	oomogta	irkəkin	ōmakta
172.古い		irəəttə	agibti	bələrgi	gərəpti	goropti
173.若い	ǰalū	ojon	dzalab	ədər	dʒalaw	ilmakta
174.老いた	sagdĩ~saddĩ~ē	sadde	əgdi/sagde	sagdi	ʃagdi	sagdag
175.多い	barāā	baraan	əgdi	kətə	baraan	kətə
176.少ない		xondo	asukuŋ	ʉwəkəŋ	atʃəkən	ugūkūn
177.良い	aja	aja	aja	aja	aja	aja
178.悪い	ərũ	əru	əru	əru	əru	ərũ
179.難しい		bəkkə	bərkə	turətne	(mut'iin manee)	urgəpču
180.簡単な		amal	amurkaŋ	xitən	(k'imta)	əjūmkūn
181.白い	giltarĩ	giltariŋ	bagdiriŋ	bagdariŋ	jalbarin	bagdama

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
182.黒い	xarā, xoŋnorĩ	xonnorin	konnorin	konnorin	kəŋnərin	koŋnomo
183.赤い	ulāā	ulirin	ularin	xolarin	olaarin	hulama
184.青い		jatʃin	kuku	tʃuərin	tʃaŋgeen	čūtūma
185.黄色い	šingarĩ	ʃenarin	ʃinarin	ʃinarin	ʃinarin	siŋama
186.灰色の					kirurin	igʃama
(9) 生活						
187.家	ǰūy	dʒuu	dzooko	dʒuu	dʒuu	ǰū
188.塩		doosun	dabson	tʉurak	katagan	turukə
189.油	imukčə	imitʃtʃi	imugsu	imʉrən	imukʃə	(jumūran,)imūhə/imūk sə
190.酒	araxi	akki	araki	araki	arakı	arakĩ
191.服	tətə~təti- 着る	təggətʃtʃi	tətig	tətkə, polto	təti	təti
192.狩る	bəjūnĩ beje 獵師	bəjʉwun	bəju	bəju	bəju-rən	bulta-mĩ
193.銃					mıwtʃaan	bər, pəktirəbun
194.弾						uhəkə
195.弓	bəri	bər	bər	bərkən	bər	bərkən

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
196.矢	nuru~nur	nor	godoli	luki	luki	ñur, luki
197.ナイフ		usxəŋ(kə)	(niitsti) utsi	koto(ko)	kɔtɔ	koto
198.槍		akkiŋka	xəə	bər		gida
199.罨		xogga	orika	xorka		hurka
200.網		alaar	neewet	dala	alga	adil

(10) 代名詞

201.1 単	bi	bi	bi	bi	bii	bī
202.2 単	ši	ʃi	ʃi	ʃi	ʃii	sī
203.3 単		tari, nugaŋ	tari, nugaŋ	tara, nugaŋ	nɔganin	nuŋan
204.1 複包括	miti				mitii~mir	mit
205.1 複排除	bū	bə	bu	bə	buu	bū
206.2 複	sū	sə	su	sə	ʃuu	sū
207.3 複		talar, tatʃtʃil	taril	nuŋaŋtil, tawaril	nɔgartin	nuŋartin

(11) 疑問詞

208.誰	āyī, nīxǝ	awu, nii	ni	ni	nii	ŋī
209.何	ī, īxū	oxoŋ	ikoŋ	jekoŋ	ikon	ǝkūn, ǝ

	ソロン語	鄂温克語ホイ方言	鄂温克語メルゲル方言	鄂温克語オルグヤ方言	鄂倫春語	シベリア・エヴェンキ語
					irigəʈʃin,	əkuma,
210.どんな	ōndī	innəgəŋ	irigətsin	irgəʈʃin	inŋəʈʃin,	əkudi,
					innuwəən	əkupti
211.いつ	ōxīdu	oxidu	aali	ookin	aalı	ōkin
212.どこ	īlē	ilə	ilə	idə	iri, irigidə	īdū (ir-, ava-)
214.どれ/どの	īr	iri	ilə/iri, iima	iri/ooni	iri	avgū, idigū, idivū
215.如何に	īttū	ittə	ittu	ooni	oon	ōn
216.なぜ	īdā, jōdā	ima	ida	jeda	ida	ōdā, ət

## 参考文献

### 露文文献

- Аврорин, В. И. (1959) *Грамматика нанайского языка*, Наука, М.-Л.
- Аврорин, В. И. и Б. В. Болдырев. (2001) *Грамматика ороцкого языка*, Изд. СО РАН, Новосибирск.
- Афанасьева, Е. Ф. (2003) *Фонология и фонетика эвенкийского языка*. Изд. Бур. госунив. Улан-Удэ.
- Болдырев, Б. В. (1988) *Русско-эвенкийский словарь*. М.
- (2000) *Эвенкийско-русский словарь – около 21000 слов*, ч. 1, 2. Изд. СО РАН филиал «Гео».
- (2007) *Морфология эвенкийского языка*. Наука, Новосибирск.
- Василевич Г. М., Я. П. Алькор. (1936) *Сборник материалов по эвенкийскому (тунгусскому) фольклору*, Издательство института народов Севера ЦИК СССР им. П. Г. Смидовича, Л.
- Василевич Г. М. (1940) *Очерк грамматики эвенкийского (тунгусского) языка*. Учпедгиз. Л.
- (1948) *Очерки диалектов эвенкийского (тунгусского) языка*, Государственное учебно-педагогическое издательство министерства просвещения РСФСР ленинградское отделение, Л.
- (1958) *Эвенкийско-русский словарь*, Государственное издательство иностранных и национальных словарей, М.
- (1966) *Исторический фольклор эвенков, сказания и предания*, Наука, М.-Л.
- (1969) *Эвенки, Историко-этнографические очерки (XVIII – начало XX в.)*, Наука, Л.
- Воскобойников, М. Г. (1960) *Эвенкийский фольклор – учебное пособие для педагогических училищ*, Учпедгив, Л.
- Колесникова, В. Д. (1966) *Синтаксис эвенкийского языка*, Наука, М.-Л.
- Константинова, О. А. (1964) *Эвенкийский язык: фонетика и морфология*. Наука. М.-Л.

- Коркина, Е. И. (1985) *Деепричастия в якутском языке*. Академия НАУК СССР  
Сибирское отделение якутский филиал институт языка, литературы и истории.  
Новосибирск.
- Кормушин, И. В. (1998) *Удыхейский язык*, Наука, М.
- Лебедева, Е. П., О. А. Константинова, И. В. Монахова (1985) *Эвенкийский язык – учебник  
для педагогических училищ*, Просвещение, Л.
- Мыреева, А. Н. (1972) Влияние русского языка на говоры эвенков Якутии. *Вопросы  
языка и фольклора народностей Севера*. Якутск, 3-10.
- Новикова, К.А., Н.И.Гладкова, В.А.Роббек. (1991) *Эвенкский язык – учебник для  
педагогических училищ*, Просвещение, Л.
- Поппе, Н. Н. (1927) *Материалы для исследования тунгусского языка: Наречие  
баргузинских эвенков*. Л: Изд-во АН СССР.
- (1931) *Материалы по солонскому языку*, Изд. АН СССР, Л.
- Романова, А. В., Мыреева, А. Н., Барашков, П. П. 1975 *Взаимовлияние эвенкийского и  
якутского языка*. Наука, Л
- Рычков: Materials at Архив Института Восточных рукописей РАН; Ф.49, Оп.1, No.1-16.
- Терещенко, Р. М. (1973) *Синтаксис самодийских языков: простое предложение*, Наука, Л.
- Убрятова, Е. И. (1950) *Исследования по синтаксису якутского языка II. Простое  
предложение*. Наука, М-Л.
- (1976) *Исследования по синтаксису якутского языка II. Сложное предложение*.  
Наука, Новосибирск
- Убрятова, Е. И. и другие. (1982) *Грамматика современного якутского литературного  
языка. Фонетика и морфология*. Наука, М.
- Харитонов, Л. Н. (1982) *Грамматика современного якутского литературного языка*. Наука, М
- Цинциус, В. И. (1947) *Очерк грамматики эвенского (ламутского) языка*, Учпедгиз, Л.
- (1949) *Сравнительная фонетика: тунгусо-маньчжурских языков*, Учпедгиз, Л.

- Цинциус, В. И. и др., (1975, 1977) *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков, Материалы к этимологическому словарю, том 1, том 2.* НАУКА, Л. (ТМС)
- ЯН СССР V: *Языки народов СССР -том V- Монгольские, тунгусо-маньчжурские и палеоазиатские языки*, 1986, Наука. Л.

## 欧文文献

- Benzing, Johannes (1955) *Die tungusischen Sprachen – Versuch einer vergleichenden Grammatik, Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Geistes- und Sozialwissenschaftliche Klasse, Jahrgang 1955, Nr. 11.* Verlag der Akademie der Wissenschaften und der Literatur in Mainz, Mainz.
- Bosson, J. E. (supervised and edited by Nicholas Poppe) (1962) *Buriat Reader.* Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 8, Mouton, The Hague.
- Brown, K. et al. (2006) *Encyclopedia of Language & Linguistics*, 2<sup>nd</sup> ed., Elsevier.
- Bulatova, N & L. Grenoble (1999) *Evenki*, Languages of the World/Materials 141. LINCOM Europa, München ; Newcastle.
- Castrén, M. A. ( 1856 ) *Grundzüge einer tungusischen Sprachlehre nebst kurzem Wörterverzeichnis.* St. Petersburg.
- Comrie, Bernard. (1997) Typology of Siberian Languages, in Matsumura, Kazuto & Hayasi, Tooru (eds.) *The Dative and Related Phenomena*, Hituzi Syobo, Tokyo.
- Csúcs, S. (1998) Udmurt, in D.Abondolo ed. *The Uralic Languages*, Routledge, New York.
- Doerfer, G. (1978) Classification Problems of Tungus, *Beiträge zur Nordasiatischen Kulturgeschichte, Tungusica*, Band I, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- (1985) *Mongolo-Tungusica*, Tungusica band 3., Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Fabb, N. (2001) Compounding, in *The Handbook of Morphology* eds. by A. Spencer and A. M. Zwicky, Wiley-Blackwell.



- Fox, Anthony (1995) *Linguistic reconstruction –An introduction to theory and method*, Oxford university press.
- Fromkin, V., R. Rodman & N. Hyams. (2011) *An Introduction to Language*, 9<sup>th</sup> edition. Wadsworth.
- Haspelmath, M. (1995) The Converb as a Cross-linguistically Valid Category, in M. Haspelmath and E. König (eds) *Converbs in Cross-linguistic Perspective. Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms – Adverbial Participles, Gerunds*. (Empirical Approaches to Language Typology 13) pp. 1-55, Mouton de Gruyter, Berlin, New York.
- Hausenberg, A-R (1998) Komi, in D. Abondolo ed. *The Uralic Languages*, Routledge, New York.
- Heine, B. & T. Kuteva. (2005) *Language Contact and Grammatical Change*, Cambridge UP.
- Helmski E. (2003) Areal groupings (Sprachbünde) within and across the borders of the Uralic language family: a survey, *Nyelvtudományi Közlemények* 100, pp.156–167.
- Holmes, J. (2008) *An Introduction to Sociolinguistics*, 3<sup>rd</sup> ed., Pearson Education ESL.
- Janhunen, J. (1981) On the structure of Proto-Uralic, *Finnisch-Ugrische Forschungen* 44, pp.23-42, Helsinki.
- (1998) Samoyedic, in D. Abandolo ed. *The Uralic languages*, pp.457-479, Routledge, London and New York.
- Janhunen, J. ed. (2003) *The Mongolic Languages*. Routledge, London and New York.
- Johanson, L. (1998) The Structure of Turkic, in L. Johanson and É. Á. Csató (eds) *The Turkic Languages*, Routledge, pp. 30-66, London and New York.
- Kałużyński, St. (1962) *Mongolische Elemente in der jakutischen Sprache*. Warszawa.
- Kullmann, R. (1996) *Mongolian Grammar*. Jenco Ltd.
- Marcantonio, A. (2002) *The Uralic language family – facts, myths and statistics*, Blackwell.
- Matras Y. (2009) *Language Contact*, Cambridge UP.
- Moravcsik, Edith A. (1978) On the distribution of ergative and accusative patterns. *Lingua* 45,

- pp. 233-279, Amsterdam: North-Holland Pub.
- Myers-Scotton, C. (2002) *Contact Linguistics, Bilingual Encounters and Grammatical Outcomes*, Oxford UP.
- Nedjalkov, I. (1997) *Evenki -Descriptive grammar*. London/New York: Routledge.
- Nedjalkov, V. P. (1995) Some Typological Parameters of Converbs, in M. Haspelmath and E. König (eds) *Converbs in Cross-linguistic Perspective. Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms – Adverbial Participles, Gerunds*. (Empirical Approaches to Language Typology 13) pp. 97-136, Mouton de Gruyter, Berlin, New York.
- Poppe, N. (1960) *Buriat Grammar*. Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series 2, Mouton, The Hague.
- (1972) On some Mongolian Loanwords in Evenki. *CAJ* 16, pp. 95–103.
- Ptitzine, W. (1903) *Recherches sur les dialectes tOUNGouses de Goloousna sur le Baïcal – Очерки тунгусского языка*, Американская Скоропечатня, СПб.
- Skribnik, E. (2003) Buryat, in J. Janhunen (ed) *The Mongolic Languages*. pp. 102-128, Routledge, London and New York.
- Stachowski, M. and A. Menz. (1998) Yakut, in L. Johanson and É. Á. Csátó (eds) *The Turkic Languages*. pp. 417-433, Routledge, London and New York.
- Thomason S. G. & T. Kaufman. (1988) *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*, University of California Press, Berkeley, Los Angeles, Oxford.
- Tulduva J. (1994) *Estonian Textbook – Grammar, Exercises, Conversation (Indiana University Uralic and Altaic Series, vol.159)*, Indiana University, Bloomington.
- Weinreich, U. (1953 (1963, 1975)) *Languages in Contact – Findings and Problems*, Mouton & Co. (和訳: 神鳥武彦訳 (1976)『言語間の接触—その事態と問題点—』、岩波書店、東京。)
- White, Leila (2008) *A Grammar Book of Finnish*. Finn lectura, Porvoo.
- Winford, D. (2003) *An Introduction to Contact Linguistics*, Blachwell.

## 和文文献

- 青木正博（1996）「ロシア語の否定生格の現象における格標示」『言語研究』110: 52-78.
- 池上二良（1973）「シベリア・ツングース語テキスト I」『北方文化研究』6号、pp.163-190. 北海道大学文学部、札幌
- （1989a）「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻【世界言語編】』, pp. 1058-1083. 三省堂、東京
- （1989b）「第1部 多様な民族文化 第Ⅲ章 東北アジアにおける言語の変遷  
1 東北アジアの土着言語、2 東北アジアの言語分布の変遷」三上次男・神田信夫編『東北アジアの民族と歴史』山川出版社、東京
- 荻原真子（1989）「第1部 多様な民族文化 第Ⅱ章 民族と文化の系譜」三上次男・神田信夫編『東北アジアの民族と歴史』山川出版社、東京
- 小沢重男（1963）『モンゴール語四週間』大学書林、東京
- （訳注）（1968）『モンゴル民話集』大学書林、東京
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房、東京.
- 風間伸次郎（1994）『ナーナイ語の「一致」について』（北大言語学研究報告第5号）、北海道大学文学部言語学研究室、札幌.
- （1997）「ツングース諸語における「部分格」、『環北太平洋の言語』第3号
- （1999）「ツングース諸語における指定格について」『語学研究所論集』第4号、pp.51-79.
- （2002）『ネギダール語—テキストと文法概説』（ツングース言語文化論集 19）
- （2003）「アルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み—」、アレキサンダー・ボビン／長田俊樹共編『日本語系統論の現在／Perspectives on the Origins of the Japanese Language』（日文研叢書 31）pp. 249-340、国際日本文化研究センター
- 加藤九祚（1986）『北東アジア民族学史の研究』恒文社、東京

- (1989) 「第2部諸民族の歴史世界 第 III 章ロシア人の進出とシベリア原住民」、  
三上次男・神田信夫編『東北アジアの民族と歴史(民族の世界史3)』、山川出版社、東京
- 勝田茂 (2001) 『トルコ語文法読本』大学書林、東京
- 栗林均 (1989) 「シラ・ユグル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻【世界言語編】』pp. 262-268、三省堂、東京
- (1992a) 「保安語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第3巻【世界言語編】』, pp. 88-92、三省堂、東京
- (1992b) 「モンゴル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第4巻【世界言語編】』, pp. 492-498、三省堂、東京
- 庄垣内正弘 (1987) 「ヤクート」『月刊言語』Vol.16, No.10, pp. 50-55、大修館書店、東京
- (1989) 「チュルク諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第4巻【世界言語編】』, pp. 937-950、三省堂、東京
- (1992) 「ヤクート語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第4巻【世界言語編】』, pp. 544-550、三省堂、東京
- シロコゴロフ、川久保悌郎・田中克己訳 (1941) 『北方ツングースの社会構成』(東亜研究叢書第五巻)、岩波書店、東京
- 高橋盛孝 (1943) 『北方諸言語概説』、三省堂、東京
- 朝克採録・著/津曲 敏郎編 (1995) 『鄂温克語三方言対照基礎語彙集』、小樽商科大学言語センター
- 朝克(ドラル・オソル)/中嶋幹起共著 (2005) 『エウエンキ語への招待』大学書林
- 津曲敏郎 (1988) 「エウエンキ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第1巻【世界言語編】』, pp. 884-886. 三省堂、東京
- (1996) 「【フォーラム】中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110, pp.177-191, 東京.
- 藤代節 (1989) 「ドルガン語の成立過程について—言語接触の観点から—」『内陸アジア言語の研究』第5巻 pp. 155-184、アジア大陸の言語研究班 (神戸市外国語大学)、神戸

- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版、東京。
- 松村一登（1991）『エストニア語文法入門（エストニア語研修テキスト 1）』、東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所、東京
- 松本克己（1998）「ユーラシアにおける母音調和の二つのタイプ」『言語研究』114:1-35.
- 松本亮（2005）「エヴェンキ語、ヤクート語及びブリヤート語における人称接辞を伴う副動詞  
形について」『京都大学言語学研究』24号, pp.153-184.
- （2007）「エヴェンキ語の不定対格とその能格的特徴」『アルタイ学報』17号,  
pp.106-124.
- 三上次男・神田信夫編（1989）『東北アジアの民族と歴史』、山川出版社、東京。
- 水野正規（1995）「現代モンゴル語の従属節主語における格選択」『東京大学言語学論集』  
14、pp. 667-680、東京大学文学部言語学研究室、東京
- 宮脇淳子（2002）『モンゴルの歴史—遊牧民の誕生からモンゴル国まで』(刀水歴史全書  
59)刀水書房、東京
- 八杉貞利・木村彰一（1953）『ロシヤ文法』岩波書店、東京。
- ヤンフネン、ユハ（1983）「北アジアの民族と言語の分類」『月刊言語』Vol.16, No.10、pp.  
46-53、大修館書店、東京
- 和久利誓一（1959）『テーブル式ロシヤ語便覧』、評論社、東京。

## 中国語文献

- 朝克, D. O.（1995）『鄂温克语研究』、民族出版社。
- 鄂伦春族简史编写组（1983）『鄂伦春族简史』、内蒙古人民出版社。
- 鄂温克族简史编写组（1983）『鄂温克族简史』、内蒙古人民出版社。
- 韩有峰・孟淑贤（1993）『鄂伦春语汉语对照读本』、中央民族学院出版社。
- 胡增益・朝克（1986）『鄂温克语简志』、民族出版社。

胡增益 (2001) 『鄂伦春语研究』、民族出版社.

李 兵 (1998) 「论通古斯语言元音和谐的语言学基础」『民族语文』1998 年第 3 期:  
pp.1-12.